

スポーツ庁

平成 28 年度武道等指導充実・資質向上支援事業
(テーマ4: 指導成果の検証)

「ダンス領域の指導実践上の課題解決のための方策」

平成 29 年3月 研究代表者 横浜国立大学 高橋和子

<http://kazuko-ynu.jp>

takahashi.kazuko-fs@ynu.ac.jp

はじめに

1. 背景・課題意識

平成 26 年度文科省委託事業「中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査」の結果を受け、平成 27 年度は「ダンス領域を実践する上での成果と課題の把握並びにその解決の為の方策」の①～⑥を行った。その結果、次の事が明らかになった。

- ①男子は柔道を、女子はダンスをより肯定しているが、女子中学生の運動離れにはダンスが歯止めになる。
- ②現代的なリズムのダンス（以下リズム系）は約 8 割、創作ダンス（以下表現系）は約 6 割、フォークダンス（以下 F D）は約 5 割の生徒が履修している。リズム系では振付・発表が多く、リズムに乗り自由に踊るのは 5 割弱。表現系では簡単な作品創作・発表が多く、即興表現は約 3 割。外国の F D が約 4 割。つまり、学習指導要領（解説）等で提示している「基本的な内容」はあまり教えていないが、この「基本的な内容」は教員自身の経験や指導経験があるほど指導している。
- ③神戸市の全中学校では、表現系の成果発表会を 57 年にわたり開催しており、教員のダンス指導が可能になっている。生徒自身がダンスで身に付いた力として、神戸市では「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を挙げているのに対し、リズム系の履修が多い全国では「身体感覚」が高い傾向である。
- ④ダンスの外部指導者の活用はほとんどされていないが、横浜市では「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」を活用した授業が好評であり、その好循環を導くにはコーディネーターの役割が重要である。

2. 「ダンス領域の指導実践上の課題解決のための方策」の成果と課題

平成 26・27 年度の継続事業として、平成 28 年度は「ダンス領域の指導実践上の課題解決のための方策」を掲げ、ダンス課題を解決することを目的とした。

① 基礎・基本を押さえた指導

表現系やリズム系の基本的内容の指導が少ないことから、全国でも各ダンスの実施率が低い県を中心に研修会（模擬授業含む）を実施し、教員の指導力向上の育成を図った。

② 持続可能な指導の為の WEB 教材開発

教員や生徒はダンス実施のヒントとして YouTube 等の映像を参考にしていることから、10 分間位のダンス教材と、全国大会における創作ダンス受賞作品や大学授業作品等を WEB 上にアップした。このことにより、教材のヒントをいつでも得ることができるので、持続可能なダンス指導につながったと考えられる。（通称、横糸）

③ 継続的な指導

幼小中高での連関を重視し、継続的なダンス指導を目指すために、幼稚園から大学までの発達を踏まえた実践事例を提示した。（通称、縦糸）

④ アクティブ・ラーニングを先導するダンス学習

21 世紀型能力を育成する方法としてのアクティブ・ラーニングを援用してきた日本のダンス学習法を体育科教育学者が論じると共に、ダンスの有効性を内外の著名な専門家に語っていただいた。このことにより、2021 年から開始される文部科学省学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」に通じる方策を提示できた。

⑤ 課題

今回は教員の研修会や教材開発を通して、ダンス指導力の向上を図ってきた。今後は、大学教員や大学生による、現場の教員や中学生への研修機会を増やしていき、中学校へのダンス普及推進に寄与していきたいと考えている。

目次

はじめに	横浜国立大学 高橋和子
第1章 ダンス学習の理論とその背景 p4	
1. アクティブ・ラーニングとダンス学習	横浜国立大学 高橋和子
2. ダンスのある風景	横浜国立大学 高橋和子
3. からだとところが自由になるダンス！ 45年後のダンスダンス	映画監督 野中真理子
4. 映画『ダンスの時間』をめぐる対談	映画監督 野中真理子・横浜国立大学 高橋和子
5. 踊る快感、動く楽しさ	コンドルズ主宰 近藤良平
6. ダンスはだれもが主演・みんなが主演	横浜国立大学 高橋和子
7. 内側から捉える身体とダンス教育：ソマティクス(身心学)の視点からみる即興性 Body-Mind Centering® Bonnie Bainbridge Cohen ・上智大学 吉田美和子・横浜国立大学 高橋和子	
8. 生涯学習社会の実現のために：学校教育と社会教育・男女共同参画の視点から	文部科学省生涯学習政策局長 有松育子
第2章 発達を踏まえたダンスの指導法 p29	
1. 幼児の表現遊び指導について：物を使った初心者向けの実践	共立女子大学 足立美和
2. 日常的な表現運動を通して、より開放された表現運動の授業を目指す	川崎市立東大門小学校 村井美沙
3. 附属鎌倉中学校のダンス授業の現状と課題	横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校 松村智也
4. 支援を必要とする児童生徒を対象とした表現活動：体ほぐしから表現へ 取り組みやすい教材提示	横須賀市教育委員会 支援教育課ゆうゆう坂本相談教室 齋藤昌子
5. 編集・構成から創作ダンスを考える：かかわる動きをメインに	湘北短期大学 小笠原大輔
6. ダンスにおけるアクティブ・ラーニングを活用した事例：生涯にわたってダンスを楽しむコツを探る	横浜国立大学非常勤講師 伊藤史織
7. 教員養成大学：身近な音楽を口ずさみながら表現してみよう	横浜国立大学 高橋和子
8. 大学授業作品の舞台上演に至るまでの創作過程	横浜国立大学 高橋和子・外川さつき・中澤美穂・宮崎瞳子
9. 教員のダンス研修の成果と課題	横浜国立大学 高橋和子
第3章 ダンス映像 p75	
1. 身近な音楽を口ずさみながら表現してみよう「ピクニック」「オクラホマ・ミクサー」	横浜国立大学 高橋和子
2. かかわる動き	湘北短期大学 小笠原大輔
3. 幼児の表現遊び：身近な素材を使って	共立女子大学 足立美和
4. 授業作品『さらば愛しきものたちよ』 日本教育大学協会第36回全国創作舞踊研究発表会	横浜国立大学 高橋和子・大学生・院生
5. ダンス作品『あたしにとっての ^{あなた} ベンチ～谷川俊太郎詩集より』	横浜国立大学 高橋和子・モダンダンス部
第29回全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸 特別賞受賞「主題にふさわしい斬新な動きの発見に対して」	
あとがき	

第1章 ダンス学習の理論とその背景

1. アクティブ・ラーニングとダンス学習

横浜国立大学 高橋和子

1. アクティブ・ラーニング導入の背景と課題

中央教育審議会（以下、中教審）「論点整理」（2015.8）によると、高等教育の授業改革において注目を集めてきた「アクティブ・ラーニング（以下、AL）」が、次期学習指導要領改訂に伴い初等中等教育へも導入される。ALは、一方向的な知識伝達型講義を聴くという受動的学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のことを指す。学びはそもそも能動的な活動なはずだが、ALには、知識や技能習得を目指す伝統的な教授学習観の転換を目指すことや、変化の激しい社会を生きていく上で必要となる力を保証することが期待されている。ALの導入は、これまでの学習指導要領が「何を教えるか（ねらいと内容、留意事項）」のみを示してきたのに対し（例外は、習得・活用・探究）、「どう教えるか」という方法を示すもので、大きな変換を意味する。私はALに賛成の立場を取りながらも、日本教育大学協会や中教審「体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループ（以下、保体WG）」において、公定の学習指導要領に教育方法を記載する危機感を発言してきた。目の前の子ども達に「いつ・何を・どのように」教えるかは、教師に任せられているからである。また、小学校教育や体育・ダンス学習ではALをすでに行ってきた（梅澤 2015^①）と捉える人も多いことから、混乱する可能性もあり、改めて学習方法だけでなく学習論を再考する時でもある。

戦後の新教育と言われた時代にも『経験主義』が掲げられ、子ども達が活発に動くこと自体が目的化してしまい、“はいまわる経験主義”と揶揄された。はいまわるだけのALを避けるには、学習者が活発に話し合っているからと言って理解が深まっているとは限らず、「知識・技能（内容）と活動の乖離」が起こらないように、教師の確かな看取りや学習評価の充実が必要になる。また、かつて表現系ダンスにおいて問題視された「話し合いだけで動くことが少ない授業」になってはならない。この背景には、「子どもの発想や動きを重視するのだから、教師が教えると創造性が失われる」と誤解されたこともある。この反省を生かし、今のダンス学習では「動きながら考える」スタイルが取られている。

また、ALには教師の周到な授業準備が欠かせないが教師は多忙すぎる。OECD 国際教員指導環境調査結果（2015.6）では、日本の教師は53.9時間/週と参加国中最長の現状である（平均38.3時間）。さらに、中教審「論点整理」では、三つの学びの過程（主体的な学び、対話的な学び、深い学び）を挙げ、生涯にわたって学び続けること、保体WGで言う「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」を目指している（下図には「体育の見方・考え方」「育成すべき資質・能力の三つの柱」「学びのプロセス」が網羅されている^②）。学習者が他者と関わりながら対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時に、これからの人生に繋げていけるような学習である。私が関わった附属鎌倉小学校の赤坂桂級では、2年にわたるダンス実践の最終に「キャッツ」を保護者に上演した。高松智行級では、平和学習と図工実践で長野の無言館を訪れたことを契機に、卒業後も8年間にわたり学びが継続し、このたび映画「二十歳の無言館」が上演された（朝日新聞 2016.6.20 掲載）。AL 実践を支えるには、教師の努力に加え、「カリキュラム・マネジメント」「チーム学校」の充実がなくてはならない。

2. ダンス学習における指導法：アクティブ・ラーニングを先導した表現系

ダンス学習では戦後70年にわたりALを先導してきたと言われている（鈴木直樹 2016^③）。ここでは、ダンス学習（3つの内容：表現系、リズム系、フォークダンス系）における指導法について、特にALとの関連について述べる。

①表現系ダンス（表現、創作ダンス）の指導法

学習指導要領のダンス領域では、長年「表現」「創作」を主内容として創造性や個性を引き出し、主体的・協働的にグループ学習を行ってきた。その為に表現系では、1960年代にはすでに問題解決学習が行われ、今この学習方法を援用している。さらに、ダンスにおける創造性の重視は、1977年以降の学校体育が標榜した「楽しい体育」に、学習者の主体性や自発性を手掛かりとして大きな影響を与えたとされている（松田 2016⁹⁾。

ダンス学習では、教師が提示する「問題」（教材）に応じて学習者は習得すべきダンス技能を体験した後、グループでの創作活動を行う。いわば、個人で練習問題を解いてからグループで応用問題を解く流れである。この学びのプロセスを通して、学習者は21世紀型能力と言われる「思考力・基礎力・実践力」や表現系ダンスに特徴的な「表現力」「創造力」を身につけてきた（高橋 2016）。一方、教師はダンスを「創り・踊り・観る」ために必要な技能を教材に落とし込み、学習者に体験させる。そして、各グループが選んだテーマに合うイメージや動きを追及するように、グループ間をまわり学習者にアドバイスをを行う。このアドバイスも各グループの進み具合や様相に応じて異なるため、教師はおのずから、個性や多様性を引き出す指導法に熟達していったのである。さらに、「教える・教えられる」が一方通行ではなく、双方向の学びが創生されることを重視してきた。そのような理由からか、ダンス指導が上手な教師は他の教科のみならず、学級経営や特別な支援が必要な学習者への指導も上手だと言われてきた。

しかし、文部科学省や村田芳子氏⁴⁾や高橋ら⁹⁾の中学校の全国調査（以下、全国調査）によると、表現系は約6割の実施率であり、即興表現などの基本的内容よりもグループでの作品創作やクラス内での発表会をしている学校が半数を占め、そこでは「振付ダンス」をしている可能性も高い。ここで確認しておくが、教師が何も教えることなく、すぐにグループ創作を行うことはありえない。それは“はいまわる経験主義”や“話し合いだけのダンス授業”、あるいは“ダンスが得意な生徒による振付ダンス”に陥りやすい。また、話し合いが活発であっても、ダンスの技能や知識の高まりがなければ、深い学びには繋がらない。

②リズム系ダンス（リズムダンス・現代的なリズムのダンス）の指導法

リズム系の指導実態を全国調査からみると、生徒の興味・関心の高さも起因して約8割の実施率である。しかし、ビデオ等の振付を真似させている学校が半数以上を占め、AL的活動が保障されているとは限らない。

本来、リズム系は表現系と同様、非定型の踊り（テーマや動きは自由）である。中学校学習指導要領解説の指導の留意点には、「既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではない」と記載されている。また、「指導の段階に応じてグループごとの選曲」、「仲間とかかわりをもって踊ること」、「仲間やグループ間で、簡単な作品を見せ合う発表の活動を取り入れること」が明示されている。これを単元での指導過程に結び付ければ、導入段階では教師と共にリズムに乗って全身で自由に弾んで踊ることを体験する。単元後半では、仲間とかかわり合って、変化やまとまりを付けて踊ったり、動きを見せ合ったりして交流する活動を行う。さらに進んだ段階では、選曲や踊りたいリズムや動きの組み合わせの工夫もグループで行う。特に単元後半の活動はALそのものと言えよう。ところが、リズム系の現状は皆がそろって踊ることを目指す技能習得の教授法が多い。

その理由を考えてみたい。「現代的なリズムのダンス」が中学校学習指導要領に入った1998年頃は、世の中もダンスブームであり、メディアから得られる情報は、そろって踊る定型のダンスであった。また、中学校1・2年のダンスが必修化された2008年頃には、EXILE(2001年発足)やAKB48(2005年発足)等のストリートダンス（ヒップホップ、ロック、ブレイク等）やジャズダンスが身近に見られる時代になっていた。さらに、iPhone（携帯情報端末、2008年日本で発売）の普及により、「いつでも・どこでも・誰でも」がインターネットでダンス映像を見ることができるようになった。このような振付ダンスが学習モデルになり、「カッコいいダンスを自分も踊りたい・踊れるのではないか」と思う中学生にとっては、カウントに合わせて真似して踊ることにあこがれたのも当然の流れだったと思われる。しかし、アイドルのようにカッコよく踊るには、学校ダンスに配当される年間約10時間では到底足りない。そこで、カウントやステップに縛られない自由に弾むダンスを目指し、それに対応する学習法の普及が必須になる。

一方の教師は自らがリズム系の体験がないことも起因して、生徒たちの振り写しダンスをよしとせざるを得

なかったのではないか。また、リズム系ダンスをフォークダンス系と同様に定型ダンスとして認識したり、「オリジナルダンスは創作ダンスである」と誤認したりしていたのではないだろうか。

③フォークダンス系（外国のフォークダンス・日本の民踊）の指導法

フォークダンス系の指導実態を全国調査からみると、約4割（フォークダンス44%、民踊23%）の実施率であり、体育祭等での発表は24%である。フォークダンス系は、決まった動き（組み方や隊形も含む）を習得した後、仲間と踊って楽しむところに魅力がある。動きの習得も教師による一斉指導により、10分もあれば一曲踊れるようになる。学習指導要領解説に例示された曲目にしても、民衆によって受け継がれてきた踊りであるため、簡単に踊れるはずである。そのためには教師があらかじめ踊りを習得し、フォークダンスにあった指導法にも熟達して、授業に臨む必要がある。通常は教師が一曲踊って見せてから、学習者は曲全体を大まかにつかんで踊り（全習法）、難しいところを取り出して踊る（分習法）ことが適当である。初めはカウントで教えることが多いが、慣れた頃には曲を教師自身が歌いながら指導すれば、音楽をかける前に曲と対応して踊れるようになり、学習者も戸惑わずに踊ることができる。音源や電源がなくとも、フォークダンスは「いつでも・どこでも・誰でも」が踊れるユニバーサルダンスなのである。

ほとんどの学習者はこれで踊れるようになるが、フォークダンスが初体験だったり不得意だったりする学習者であっても、踊りながらの教え合いが自然に行われ、ALの指導が日常的に行われていると考えられる。一方で、教師が踊り方を教えずに、学習者自身がフォークダンスの踊り方を調べ学習で習得する方法もある。これは文字通りのALであるが、時間的な問題もあることから、選択制（中学3年～高校3年）で行うのが良いのではないだろうか。

3. 指導法が変容する手がかり

以上、戦後70年にわたるダンス学習を振り返ると、ダンスはALを先導してきたと言える。その一方で、現状の指導実態は技能習得を目指す伝統的な教授学習観や“はいまわるだけのAL”であることも推測される。

では、ダンスにおける指導法の変容は期待できるのだろうか。AL導入に当たり、教員養成系大学での役割も重要になる。私は初等体育科教育法において、学生による模擬授業（体づくり運動・器械運動・陸上運動・ボール運動・表現運動・保健）を設定している。表現運動（表現系・リズム系）では、教師役の学生は、即興表現や自由にリズムに乗って踊ることを促す言葉かけやグループ学習を援用していた（写真①②）。フォークダンス系では、教師役が外国のフォークダンスや日本の民踊の背景や文化を説明し踊って見せてから、皆で踊りを楽しむ方法を提示していた。学生は自身の体験に裏打ちされてAL的な指導を展開したのである。聞き取り調査によると、学生の小中高でのダンス経験は少なく、フォークダンスに至っては生まれて初めて踊ったという学生も多くいた。その一方で、運動会で「よさこいソーラン」を踊った学生が多いのも特徴的である。しかし、教科専門科目「表現運動」の5回の体験でも、学生の指導法に影響を与えたのも事実である。他の運動領域では、系統的な技の習得や戦術学習など、領域にあった学習法を自然に行っていた。学生達は大学での教科教育法や教科専門科目、あるいは、小中高での自らの体験を基に、指導法をイメージして実践したと考えられる。このように、教員養成においては教育法や教育実習やインターンシップ等、また、教員には教員免許法講習等において、ALの指導の在り方を実践的に学ぶ場を保証したいものである。ダンス単元においてAL指導がより活発化するのには単元後半と考えられる。この具体は「単元計画立案の考え方」^⑤を参照して頂きたい。

註

①高橋和子研究代表・梅澤秋久他：平成26年度文部科学省受託事業報告書『中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査

②平成28年5月26日文部科学省中教審保体WG資料2-1

③高橋和子研究代表・鈴木直樹・松田恵示他：平成27年度文部科学省受託事業報告書『ダンス領域を実践する上での成果と課題の把握並びにその解決策の為の方策』2016

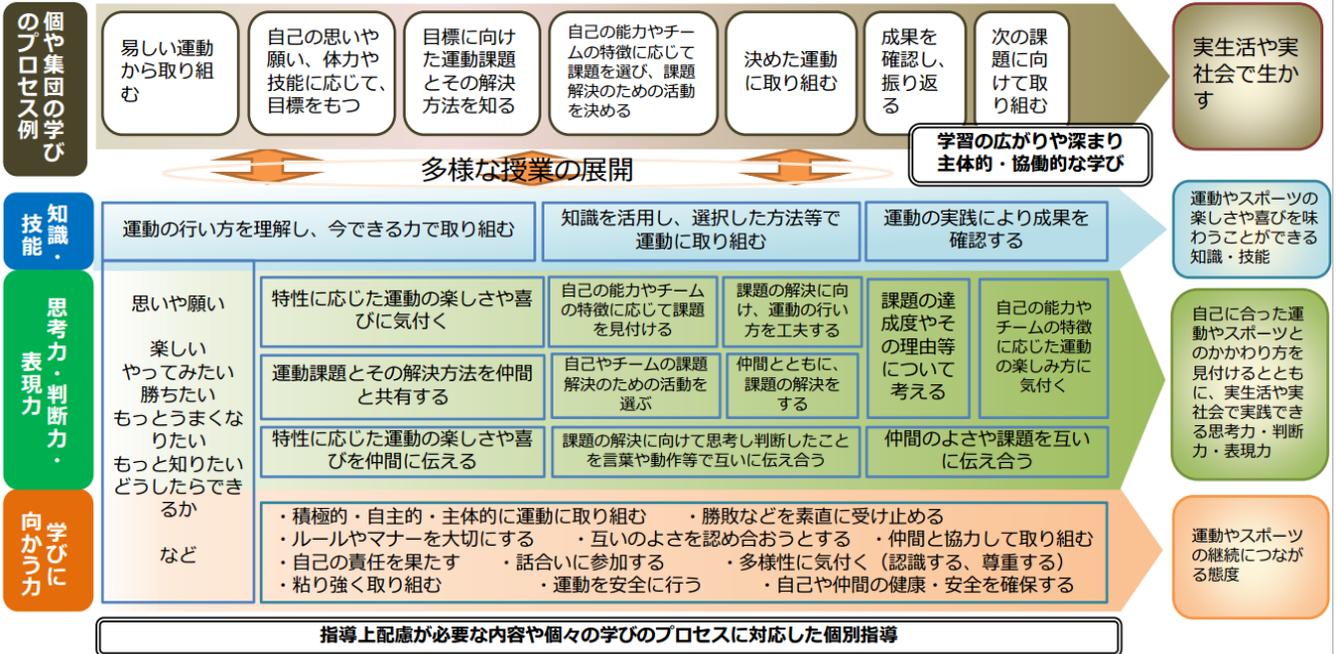
④村田芳子研究代表者：平成26年度文部科学省委託研究「ダンス領域の必修化に対応した指導の実施状況調査」2015

⑤高橋和子「中学校・高等学校のダンス単元計画立案の考え方」女子体育53-8・9, 2011

体育科・保健体育科における課題発見・解決の学びのプロセスのイメージ（運動に関する領域）
 （検討素案）

平成28年5月26日
 体育・保健体育、健康、安全WG
 資料5

体育の見方・考え方：運動やスポーツについて、その意義や特性に着目して、楽しさや喜びを見出すとともに体力の向上に果たす役割を捉え、公正、協力、責任、参画、共生、健康・安全といった視点を踏まえながら、自己の適性等に応じて「する・みる・支える・知る」等の多様な関わり方について考えること



指導上配慮が必要な内容や個々の学びのプロセスに対応した個別指導

能力等の育成と 主な評価の例	知識・技能	・発達段階に即して、運動の特性に応じた行い方や一般原則等の知識及びスポーツに関する科学的知識を理解し、各種の運動が有する特性や魅力に応じた動きや技能を身に付けている実現状況を評価する。
	思考・判断・表現	・課題に応じて活動を選んだり工夫したり、課題に応じた運動の取り組み方を工夫したり、伝える相手や状況に応じてわかりやすく表現することなどの実現状況を評価する。
	主体的態度	・主体的に運動に取り組もうとするとともに、公正、協力、責任、参画、共生、健康・安全に関する態度の実現状況を評価する。

※課題発見・解決の学びのプロセスは例示であり、これに限定されるものではない。また、必ずしも順序性を示したものではなく、一方向の流れではない。



写真① グループ毎の「花は咲く」



写真② 指導者役の学生の真似をさせた後、互いの教えあいが始まる

（『女子体育』2016. Vol.58・8・9 掲載）

2. ダンスのある風景 横浜国立大学 高橋和子

1. ダンスを見たり踊ったりするのは当たり前時代

2013年9月GoogleのおしゃれなCMが1分間流れました。ダンスを小学生に教えるためにNexus7を使い奮闘する男性教師が、メトロノームでリズム取ったり、スタンドミラーを5枚買ったりと、一生懸命取り組んでいる様子の映像です。テロップには「小学生 好きな曲」「振り付け簡単」「ダンス教え方 ポイント」「ダンス楽しくなる方法」等が添えられています。現在までの視聴数は659万です。関連のホームページには、「現代の小学校では、ロックダンスやヒップホップダンスが表現運動として必修だそうです。そりゃあ、ダンス苦手な先生は大変ですよ」との書き込みもあり、ダンスを習いに行った教員も増えました。ここで確認しておきますが、すでに小学校は戦後から男女を問わずダンス（表現運動）は必修です。また、ロックやヒップホップが必修になったわけではありません。現行指導要領（解説）に関わった私のところには「学校で振り付けダンスが行われるのを推奨するようなCMは困るので、Googleに異議申し立てをして下さい」との声が寄せられました。

この騒動が収まらない翌月、AKB48の「恋するフォーチュンクッキー」に合わせて、県内の観光地等を紹介する「恋するフォーチュンクッキー神奈川県 Ver.」がYou Tubeで公開され、2日間で100万を超える視聴数（現在までは434万）を獲得し話題になりました。ロケは、みなとみらいから箱根までの78か所、知事をはじめ県市町村職員、観光客等1,500人が踊る動画です。ちなみに神奈川県知事は早稲田大学在学時に「ミュージカル研究会」に所属しており、ノリノリでダンスを披露しています。

これに先駆けて、普通の人が踊る映像もテレビで取り上げられるようになりました。記憶に新しいところでは、2010年秋のNHK朝の連続テレビ小説「てっぺん」のオープニングです。葉加瀬太郎のテーマ曲「ひまわり」に合わせて近藤良平（横浜国立大学卒）が振り付けた「てっぺんダンス」は、視聴者参加型のダンスになっています。この企画が高視聴率に繋がったとの分析もあります。Googleや「恋するフォーチュンクッキー神奈川県 Ver.」の視聴数だけで、神奈川県民912万人を超えています。メディアの影響力を感じます。

ダンスは「見る」だけでなく「する」世界も広がりました。2015年横浜市では「幅広い市民参加や次世代育成、世界水準の文化芸術による都市の魅力の国内外への発信、賑わい創出と経済活性化」を掲げ「Dance Dance Dance@YOKOHAMA 2015」を開催しました。「市民参加プログラム」の一つ「コンドルズと踊る！横浜大盆ダンス2015」には筆者も参加してみました（写真①）。横浜赤レンガ倉庫で、老若男女が「ブルーライトヨコハマ」をはじめ横浜にちなんだ軽快な楽曲に乗せて、盆ダンスに興じていました。「次世代育成プログラム」には、幼児から大学生に対して、①発表の機会（58校参加、観客12万人）、②ワークショップの実施（EXILE等のプロアーティストの派遣）、③鑑賞機会の無料提供等がありました。

また、2004年から開始された「横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム」では、この10年間に約560校の横浜市の小・中学校、特別支援学校で、8万人を超える児童・生徒たちが、アーティスト（外部指導者の活用）の授業を受けています。コーディネーターは37芸術団体が務め、NPO法人STスポット横浜が事業の束ね役を担っています。ダンスが必修化した影響もあってか、2014年度からはコンテンポラリーダンスの体験型プログラムが急増し、2015年度は24校で実施したそうです（写真②）。この企画の素晴らしい点は、コーディネーターが芸術家と学校を繋いでいる点です。全国でも稀有な取り組みの事例です。

世の中が不穏になるとダンスが隆盛すると言われていますが、このようなダンスの現状になろうとは、一昔前は考えられませんでした。世界一踊る民族としてNHKで紹介されたアフリカのセネガルでは、部族間の闘争がないようです。ダンスで感動や楽しさを共有し、言葉を越えた心身の繋がりを生むのだと思います。ダンス（dance）の語源は、生への希求（desire of life）です。生きる証として、太古の昔からいまに至るまで、世界中どこでも誰でも共に踊ってきました。日本の皆さんも、踊る楽しみを純粹に味わっているのだと思います。

2. 学校ダンスの現状

では、ダンスが必修化した中学校の現状はどうなっているのでしょうか。全国調査（中学生約3万人と教員450名、高橋和子研究代表者）の結果を紹介しながら、課題を述べたいと思います。

中学生の「女子はダンス、男子は柔道」を「得意」「楽しい」「技能が向上した」と答えています。男子がダンスを好んで踊るにはもう少し時間が必要ですが、中学女子の運動離れにはダンス授業が歯止めになると思われます。ダンスの履修学年は、必修が導入された中学1・2年が多く、履修状況は、現代的なリズムのダンス（以下、リズム系）約8割、創作ダンス約6割、フォークダンス約5割でした。ちなみに神奈川県はリズム系と創作ダンスは65%と同率でした。

教員に指導内容を聞いたところ、リズム系では「振付ダンス（応用）」「発表鑑賞」が多く、「リズムに乗って自由に踊る（基本）」は5割弱でした。「振付ダンス」の高い実施率について、教員への聞き取りからは、映像教材や教師やダンスが得意な子らが提示した振りを習得するやり方が多く行われていました。これは戦前の振り写し教育の現代版とも言えます。創作ダンスでは「簡単な作品創作（応用）」「発表鑑賞」が多く、「即興的な表現（基本）」は約3割でした。フォークダンスでは「外国のフォークダンス」は約4割でした。つまり、学習指導要領（解説）等で提示している「基本的な内容」はあまり教えていない現状でした。

この「基本的な内容」については、教員自身の経験や指導経験があるほど指導していることが分かりました。逆に男性教員は「踊った・指導した」経験に乏しく、指導が難しいと感じていました。経験がないのに教えることが難しいのは当然です。この背景には、「小中高でダンス授業を受けていない、教員養成大学でダンスが必修化されていない、教員採用試験でのダンス実技がない、ダンスの指導内容が分からないので教えたことがない」等、「ないないづくし」が厳然としてあります。また、運動会や体育祭で踊ったことでダンスをおしまいにする学校も多く、なぜかダンスではこれがまかり通っています。このことは、運動会で障害物競争（走って跳んでタッチ等）をしたから、陸上競技の授業をしないのと同様ではありませんか。

以上の結果から挙げられる一番の課題は、「ダンス＝振付」からの解放です。生徒も教員も身近に目にするダンスは、TVに映し出される振付ダンスやよさこいソーラン等でしょう。それらはカウントに合わせ皆がそろって決まった振りを習得するダンスであり、発表の場を運動会や体育祭に設定することが多いと思われます。必修化した今、「振付・そろえる・見せる」という学習の進んだ段階以前に、子どもに学ばせたいこと。それは、あるがままに感じたままに即興的にイメージを表現すること。リズムに乗って全身で自由に弾んで踊ること。伝承された踊りを交流して楽しむこと。そのようなダンスイメージに、子どもや教員が抱くイメージを変えることです。そのためには、具体的な教材を、どのように指導するのかを中心にした研修会が必要です。筆者はダンスの基本的内容を収めた2015、2016年版DVDを、横浜市の全中学校と県教委に届けていますので、ご覧いただければ幸いです。

3. ダンスは戦後70年間アクティブ・ラーニング

昭和22年の学習指導要綱においてダンス領域は、戦前の教師が創った既成作品を踊ることから、子どもが思い思いに表現する学習へと転換しました。このために取られた指導法は、子どもが主体的に協働して問題を解決していく、いま、まさに注目されている「アクティブ・ラーニング」です。その意味では、いま文科省が提言している指導法を70年前から行ってきたのですが、実際のダンス指導はそうではないようです。

前述した実態調査によれば、生徒が「ダンスで身に付いた力」として、創作ダンスの履修が多い神戸市では「表現力」「創造力」を挙げ、リズム系の履修が多い全国では「身体感覚」が高い割合でした。リズム系においても本来は、多様なリズムを共有しながら交流する方法を取るべきで、そうなれば身に付く力も多様な広がりを持つと思われます。また、表現系の基本である「即興的な表現」の典型教材「新聞紙」（写真③）を90分でも体験した学生は、「レジリエンス」（生きる力）が高まったことも実証されています。「表現力」「創造力」「生きる力」は21世紀型能力とも一致し、協働して創っていくダンスへの期待が高まると考えています。

最後に、70歳で世界デビューした舞踏家大野一雄さん（1906-2010年）の話です。大野さんは横浜の捜真女学

校の体育教師でもあり、ダンスも教えていました。彼が扱うテーマには「母・生・死」が多くありました。母親から全部栄養などを奪って自分が生まれてきた。捕虜になり、ニューギニアから引き揚げてくるときに、戦友たちの亡骸を海に投げ入れ水葬したら、水母(くらげ)のようにプカプカ浮いてきた等。大野さんにとっては常に、生きる、あるいは死ぬことが、つながっていたのです。生と死の摂理を熟考したなかでこそ、表現や舞踏が生まれ出たと言えます。写真④はイエスの生誕劇の場面です。この練習においても、天使役の高校生に動きを教え込むことはなく、どのように天使を演じるのかを、自分で考えさせ続けていました。つまり、「教育は引き出すこと」を文字通り行っていたのです。明治時代に生まれ軍事教練や戦争を体験した大野さんですが、彼のダンス指導は一斉指導ではなく、生徒たちはグループで考え、自らと対話しながら表現していくものでした。

子どもの可能性を引き出すことに大きな特徴があるダンス指導法により、教員自身のこれまでの指導観、教育観が大転換した先生方を、私は数多く知っています。学習指導要領改訂に振り回されることなく、目の前の子どもたちが幸せに生きていかれるための教育(内容や方法)をじっくり考えていきたいと思えます。



①横浜大盆ダンス 2015(筆者撮影)



②ダンサー山下彩子による六浦小学校での取組み
(写真 ST スポット提供)



③即興的な表現「新聞紙」



④イエス生誕劇 ⑤が大野一雄

(神奈川県教育文化研究所『所報』2016掲載)

3. からだとこころが自由になるダンス！45年後のダンスダンス 野中真理子

1. 踊る快感、ひとりバレリーナ 小さい頃の好きな遊びは、ひとりバレリーナ。1960年代のささやかな自宅の6畳間で、母のクラシックレコードをこっそりかけて、風呂敷や帯ひもや端布を髪やからだにまきつけて、一人自由に夢見心地に踊る時間。木枠の窓ガラスから夕日が入ってくる頃、気分は最高潮になり、その後、母が買い物から帰ってきて現実にひき戻されるのでした。

2. 一方的に決められた動きはむずかしい 自由に踊るのは楽しくても、決まった動きを覚えてみんなと合わせるのが苦手で、運動会の踊りやラジオ体操がずれていました。それで「体育は不得意、ダンスは下手な私」でいましたが、苦手意識が決定的になったのは11歳の時です。ある日担任の先生に呼ばれて「近隣の学校と合同で6年生の運動会をします。初めに全員で行うラジオ体操の時、わが校の代表として前で体操してもらいます」と告げられ、凍りつきました。人前に立つとあがってしまう私には恐ろしい話で、厳しい先生でしたが「わたしにはできない、やりたくない」とがんばって反論しました。しかし、もうプログラムに名前を書いていたということで、どうしてもやることになりました。

私の子どもたちの学校生活を見ていると、こういうことはクラスのみんなと相談したり、やりたい人が立候補したりして決めるのに、一方的な時代だったのか、それともその先生が特別だったのでしょうか。

心が明るくなるように、こたつの上に立って飼い猫の前で何日もラジオ体操の練習をしました。猫とは心が通い合っているので安心で、おかげで大丈夫な気になりました。ところが当日壇上にあがると、1,000人以上の6年生と心を通わせることなど到底できず、一人孤立したような寂しさの中、おなじみの曲が始まりました。緊張している上に、一斉に同じ動きをする子どもたちを見下ろす角度で眺めていたらなんだか気持ちが悪くなってしまい、途中で音も色も消えてからだが固まってしまいました。でも他の学校の代表の子がちゃんとできたので、みんなの体操は無事終わったのです。翌日担任の先生に「あなたのおかげで恥をかかされた」と言われ、勝手に決めたのにひどいなあと思いました。やれやれそのせいもあり、決まった動きを人前でしなくてはいけない時、からだもこころも縮こまるような暗い時代があったのです。

3. 『ダンスの時間』で扉があく それから45年後、映画『ダンスの時間』をつくりました。踊るように生きている村田香織さんを通して、からだとこころが自由になるダンスを知りたいと思ったのです。ダンスは素晴らしいダンサーの表現です。でもそれ以前に「うまい、下手」「合っている、ずれている、間違っている」ではないダンスの踊る喜びが、私たちみんなの生の根源にあると思ったのです。実際そうでした。映画が縁で、障害のある人とダンスでコミュニケーションする機会を得た時です。重度の障害で言葉の不自由なキヨミさんが私を指名してくれてペアを組み、小さな打楽器の音に合わせて、目を合わせ、互いを感じながら、自分の思いをからだで伝えながら、即興で自由に踊ったのですが、2人とも大興奮！これはもうダンスでしかない感動というか、ダンスでしか味わえない「お互いが自分の心の扉をあけて相手と触れ合い、セッションした」という嬉しさでした。

4. 高橋和子先生の授業でワイイ 『ダンスの時間』パンフレットの対談で近藤良平さんにお会いして、扉がまたひとつ開きました。ダンスは自分があって相手があって一緒に生きていることが面白くなることなのだとわかり、こういう素敵なことをもっと子どもに知ってほしいと思いました。

それで先日、横浜国立大学で高橋和子先生のダンスの授業を見学させていただき、ちゃんとつながっている！と感激したのです。和子先生は笑顔で立っているだけで、まわりの光も踊っているような自由があります。授業は「こうあらねばならない」という思いが打ち砕かれます。深く考えずに履修してしまった学生も、即興でダンスを創っていく中で、自分を引き出し、相手を受け止め、新しい表現を探していました。寛容で野生的な両方向の授業。将来子どもを教える立場になる学生も多いと聞き、ワイイって嬉しくなりました。

からだとこころが自由になるダンスを求めていると、次々に思いがけない快感があり、まさにダンスです！

(『女子体育』2017 Vol. 59-12・1掲載)

4. 映画『ダンスの時間』をめぐる対談

:映画監督 野中真理子・横浜国立大学 高橋和子

『ダンスの時間』という映画を作った野中監督に、映画作成への想いを中心に何う機会を、横浜国立大学の高橋和子ゼミで2016年10月18日に設定することができました。その対談の様相を紹介する中で、「ダンス」「コミュニケーション能力」「引き出す教育」について、理解を深めることができればと思っています。

1. 映画の世界

野中さん（以下、野中と略す） 初めに、なぜ、映画の世界に関わるようになったかのお話しをします。私は早稲田大学教育学部の国文学科を卒業しました。最初は中学の先生になろうと思い、教育実習にも行きました。色々子どもに教えるのは楽しかったのですが、ワッと皆が盛り上がったときに、これを統率、統制する能力がなくて、私も一緒に遊んじゃったりして。これでは、ちょっと自分は未熟で、先生には向かないのかしらと、思いました。今でこそ、こんな風に喋っていますが、大学生の頃はすごく喋るのが苦手で、先生になりたかったのに、結局、教師にはなれなかったのです。

高橋（以下、高橋と略す） 何年くらいの前の話ですか。

野中 今、私は56歳なので、30年くらい前の話です。結局、教員になる道はやめて、出版社に行きたいと思い、30社くらい受け、すべて落ちました。そして、入ったところがテレビ番組を作る会社で、アシスタントディレクターというのをやり始めたのが、最初の仕事でした。

高橋 教員になりたかったのに、教育実習に行って、その道を断念したのですか。

野中 教育実習行ったところで、こんなに一杯の人と向き合わなきゃいけない仕事だということ、初めて知りました。大学で教わっているときはのんきでね。先生の話聞いてノートに書いていけばよかった。教育実習行って初めて、50人くらい中学生がバーっといて、びっくりしちゃいました。…ともかく何十年前のことなのであんまり明確じゃないのですけれど。迷った末、就職がなぜか、番組制作の会社に入りました。もう全然思いもしないで、予想もしなかったのですが。でも与えられた人生と思って、そこで働こうと思いました。その頃はバブル全盛期でしたが、他の就職した人と比べれば、私はわずかな給料で24時間働くようなブラック企業みたいなところでした。ですから、絶対やめようと思っていたのですが…。

3年して初めてモルディブに海外ロケに行ったときに、ディレクターに「現地の子どもとコミュニケーションしてこい！」と言われ、カメラ1個持たされて、何語かもわかんなかったのですが、現地の子と一緒に遊びました。撮影しているうちに、遊んでいる姿をモニターに映して見せてあげようと思いました。30年前ですから、モルディブの子ども達にとっては、自分が映っているのを見ることは、新鮮だったようです。みんな色々踊ったり声も出したりして、すごく盛り上がっていました。私にとってもすごく貴重な体験で、こういうコミュニケーションを「映像」を通してできると思って。それからですね、この仕事は面白いかなと思い始めて、前向きに取り組むようになりました。父からは「石の上にも3年！」と言われていましたので、辛くとも、絶対にやめてはいけないと自分に言い聞かせていました。3年経った頃、やっと面白いかなと思ったのです。

その頃は、テレビ番組の『世界の車窓から』とか、色々なドキュメンタリーで、年間に何百日もロケに出されました。プロデューサーに「じゃあ、野中！ 今度はモロッコに行ってこい！」って言われ、「はい」って返事をして行ってくるのです。その繰り返しの日々でした。私は胃腸がもともと丈夫なのと、背も小さくてフワフワしているので、意外と現地の人やスタッフとも仲良くできたのですね。ロケに行くのも、構成能力とか演出能力はもちろん求められるのですが、結局「コミュニケーション能力」が大事なのです。優れた演出家やディレクターでも、現場スタッフと喧嘩しちゃう人もいて、スタッフが途中で変わることもしばしばありました。

あと現場でコーディネーターの人がスペイン語だったりフランス語だったりして、通訳の人も入るのですが、自分でもある程度わかんないなかで、話さなきゃいけないので、そういうときも何とかやっていく能力が必要でした。ということで、私はお腹も壊さないし、重宝がられていっぱいロケに行きました。

高橋 映画監督になったのは、いつ頃ですか。

野中 20年以上前になりますね。『こどもの時間』という映画が一作目です。これは、1人目の子供を産んで産休に入っていたときです。テレビ東京のドキュメンタリー人間劇場という番組に『こどもの時間』というのがあるって、そこで作ったのです。テレビの番組は色々構成を作って、お茶の間で見る方が飽きないように流れも作ります。チャンネルを変えずに最後のCMも見てもらえるように作るので、ナレーションを入れたり変化をつけたり、それは当たり前のことなのです。でも、『こどもの時間』を作ったときは、「このセミを見ている男の子をあと20秒映像で見せれば、説明をしなくても見た人には分かるのになあ。この男の子の鼓動を感じられるように見てほしいなあ」と思いました。それが、テレビ番組ではワンカット20秒とか見せていると、ピッピって変えられちゃうのが普通なのです。本当に残念に思っていました。そこで、この男の子をしっかりと見ってもらうためには、「映画」だと思ったのです。テレビ東京のドキュメンタリーの素材にちょっと撮り足して、80分のドキュメンタリー映画を作りました。子どもって面白いなあって思って撮って、その面白いなあってことが伝わればいいと思ったのです。映画を見てその子ども自身の主体性とか、こんなこと考えるんだあってことが伝わるってことが大きな目的だったので、そういうものになったと思います。

映画二作目の『トントンゴギコ図工の時間』は図工室の子どもを対象にしました。子どもって、ものを作るのがこんなに好きだっていうのが、すごい発見で、今度はそれが伝わったらいいなって思い作りました。

高橋 『トントンゴギコ図工の時間』は、図工の先生の間では、必読書ならず、必見映像と言われていますね。野中さんの映画づくりの原点は、ご自身が面白いと思えるところにありますね。これは、ダンス作品創作にも授業の教材開発にも通じます。本人が面白いとかこだわりとかがあると、観客にも、子どもや学生にも、何かが伝わっていくと思っています。

2. 映画『ダンスの時間』は「ヒト・モノ・コト」との心身の対話

野中 映画三作目の『ダンスの時間』は、3才からダンスをしている村田香織さんという現在61歳になるダンサーが主人公です。香織さんは、モダンとかタップとかジャズとかバレエとかの基礎はある人なのですが、ダンサーとしての世界っていうよりも、周りのモノと向き合う、その姿を伝えたいと思いました。例えば水族館で、トカチアナゴやイルカに向き合ったときに、心で、いや、心以上に身体で繋がっていく。香織さんを見ると、モノとかティーカップとか、こちらへんにあるモノみんなが、身体で繋がっていて…。

この繋がっていると思えたきっかけは、20年前に見たある光景に遡ります。香織さんとは以前から知り合いでした。あるとき、香織さんが事務所でペットボトルを片付けているのが目に入りました。ペットボトルを濯いでラベルを剥がして、キャップをとって潰していました。それがすごく印象に残って。そりゃもちろん、ダンサーとして鍛えているから、腕が美しいとかあるのかもしれないけど。それ以上に、ペットボトルが潰されているのに「嬉しそう…！」に、私には思えました。香織さんにとっては何気なく、日常でやっている一瞬の光景ですよ。何が、そう思わせたのかを振り返ってみると、私はその頃、埼玉県の桶川に住んでいて、職場の赤坂まで片道2時間かけて通勤していました。常に前のめりで走っていて、ペットボトルを濯いでラベルを取って潰すとかは本当に嫌な時間でしかない、鬱陶しい行為でした。掃除とかも出来ればしたくない。食べていくのに精一杯で、片付けとか掃除とか本当になければいいのに。暮らしのなかではそういう時間でした。かたや同じ時間帯のなかで、ペットボトルがこんなに嬉しそうに潰されているなんて、と思ったのです。もちろん私と香織さんは違う人生なのですけれど。この違いは何なのかと思ったのが20年前でした。その時は、これを映画に撮ろうと思ってなくて、しばらく違うことをしていました。

そして3年前かな。香織さんが水族館でイルカショーを作っているときに、イルカにエサをやって、ピーっ

て笛を吹いて、イルカを跳ばすのは嫌だと思ったというのです。イルカの認知能力はすごく幅広くて、例えば飼育の人たちの目を見ながら、イルカはクルクル回ったりする。それができると餌をもらえる。しかし、水族館のダンサーのアクアンという人たちには、エサじゃなくて身体の繋がりで、イルカたちに跳んでもらえたらと、香織さんは本気で思ったのだそうです。ダンサーの踊りの合図で、イルカが跳んだり寄ってきたりするようにしたいと。アクアンの子たちもイルカに伝わるように踊りたいけれど、イルカは「こいつ、まだ新人だから上手くないけど、こうやってほしいのかな」と思ってくれて、頑張ってる跳ぶらしいんですね。香織さんのそういう話を聞いていると、イルカと通じ合えると信じているのです。必ず伝わると思っている。それが面白くて。そういう香織さんの中にある既成概念とか、かっこいいを作らないでもきっと繋がるはずとか。そういうコミュニケーション能力は自分の心とか身体を使って人と繋がっていくし、自分の思いも伝える。そういうのって面白いなあって。それで映画『ダンスの時間』の主演に香織さんをしたかったのです。しかし、香織さんからは「全然いま現役で踊ってないし、踊ってない私に『ダンスの時間』は無理、無理！」と断られました。いや！ ダンサーの時間っていうよりも、そのダンスの奇跡みたいな、ダンスってものが暮らしの中の楽しさとか生きていくのに楽になるものとして、あるに違いないと思ったのです。

例えば私。ダンスとは縁遠い生活です。学生のころからステップ踏むとかも全然できない。どんくさくて、体育も音楽もできない。今、学校にいる子ども達だって全員が上手に踊れる子ばかりじゃないし、好きじゃない子もいるけれど、その子たちにとっても面白いダンスっていうのがあるに違いないって思ったのです。

香織さんは生きてることとダンスが一心同体になっている。大事な飼い猫とのコミュニケーションも、すべてダンスのように感じていったのです。寝たきりになったお母さんの介護も撮影させてもらったりして、そうすると私にはこれがまさに「ダンスだ！」と思えてきたのです。ちょうどその頃、私も父を介護していたのですが、私はもうイライラして、「なんで出来ないの！とうとうできなくなっちゃったかな」と思うのだけれど…。何か香織さんがしているのは、寝たきりのお母さんと一緒に心がダンスしているって感じ。それも、その日その場のそのときそのときで違うし、相手の状態も違うのだけれど、きっと即興で身体が感じたままに動いて、何か繋がっている。そう思って撮影して編集して上映しながら、だんだん、作ってよかったと思うようになりました。

『ダンスの時間』は、心と身体の話みたいなことがテーマになっています。「ダンス」という言葉には、そういう意味合いがあってもいいと思うのです。だから上演初日に、和子先生が見に来てくださって「ダンスの時間の映画、良かったです」と言っていたから、本当に喜んで、作ってよかったと思えました。初めて専門の方にOKをもらえた感じでした。自分のなかでは、ものすごく体育ができなくて音痴でも、心身の繋がりを求めているものっていうのがあるので、作っている実感でした。

3. 映画製作の周辺

野中 今回の映画作成の資金は、前の二作の映画上映やDVDを売ったり、文化庁助成金も頂いたりして貯めたものです。例え映画はつまらなくても誰にも迷惑はかけてはいません。それでもやはり映画館に来て見ていただいた方に、最悪な時間だったと思われては申し訳ないので…。ちょっとは見てよかったかなとか、フーン、こんな生き方もあるのだとか、ダンスって面白いなとか、自分の身体を考えるのって面白いなあって思ってもらえたらいいなと思っています。

高橋 ところで、今回の映画の製作費はどれくらいかかっているのですか？

野中 まあ、一千万円単位ですね。チラシなどの宣伝費用もありますね。

高橋 宣伝のためのパンフレットには、振付家の近藤良平氏との対談もありましたね。彼は横浜国立大学時代の私の教え子でしたので、パンフレットを読んで、私のことも書いてあったので、驚きました。

野中 近藤さんとの対談はとても面白かった。僕はドロドロだけど、和子先生は天使みたいと言っていました。その和子先生が、偶然にも初日に見に来てくださったから、もう感激でした。

高橋 野中さんのお話を聞いて、ゼミ生にも意見をいくつか言ってもらいましたが、いかがでしたか。

野中 お一人ずつに答えたい気持ちでいっぱいです。ご期待に添えるかどうかは分からないのですが。最初は編集についてお話しします。撮影した素材を編集するときには、自分なりに見てくれる人をすごく信頼して、見てくれる人の「考える時間を保障」したいと思っています。だから、先回りしては説明しない。みんな違うことを思っても全然構わないわけです。今思ったのと次に見るのとは違うかもしれない。二度三度見てもらった友達が見るたびに何か違う！ストーリーがあるものと違って、見るときの今日の気分だったり、人生のちょっとした変化で変わって感じられたり。映画は、自分が作ったときにはただのモノで、テープとかメディアです。それが、見ていただいて初めて命を与えられ、みなさんのなかに入って生きていくと思っています。だから、ぜひ生かさせてほしいし、皆さんの中に乗みたいになって入れたら嬉しいなと思っています。

高橋 小説を若い時に読んだのと、年を重ねて読んだ時では感じ方が違うのと似ていますね。私がダンスを上演する時も、「考える時間を保障する」というか、ダンスを見ながら、大袈裟ですが、それぞれの方が自分の人生を振り返ったりすることに繋がったらいいなと思っています。

野中 それから、今回の『ダンスの時間』は、できない自分のダメさなどを受け止めるってことも一つのテーマにしています。自分が得意なものとか、よくできちゃうこととか、分かり合える友達を受け止めるだけではなくて、ちょっと分からない人とか、もちろんイルカとか、認知症のおばあさんとか、隣り合っている生き物だけど違う文化だったり言葉だったりを受け取る。特に違うものを受け止める。そんなことを思って編集しながら、サブテーマを『隣り合うのは面白い』って考えました。違うものを受け止めていながら、自分の思いも伝えていく。それが、広い意味でのダンスって思えたのです。

人間って踊るのが楽しかったりする。何かを受け取ったり隣の人と共振したり、木とかとやり取りしながら動いていくと、なんか楽しいっていうことを発見しました。天照大御神、あの人はシャーマン的ですが、踊ってというのは太古から人と繋がったり、自分の思いを踊りで伝えたり、それが祈りとか生きてることと密接に繋がっていると、やっと分かったのです。私にとっても多くの人にとって、「ダンスなんてすごく遠いもの、とんでもないもの」だったのが、バレエやフラメンコを踊りたいという思いにも繋がるかもしれない。『ダンスの時間』を作りながら、「ダンスのはじめの一步」を自分が発見したように思えたのです。

高橋 私が映画『ダンスの時間』を見に行っただのは、偶然が重なったのですが、必然とも感じる出来事でしたので、そのことについてお話しします。『ダンスの時間』を知ったのは、朝日新聞の紹介記事でした。写真も掲載されていて40年ぶりに昔とちっとも変わっていない村田香織さんに巡り合ったのです。私と香織ちゃんは学生時代、正田千鶴先生のダンススタジオで踊っていましたので、そのうち映画を見たいと思っていました。そして、渋谷での上演初日に偶然にも見に行く時間が作れ、野中監督と主役の香織ちゃんのご挨拶を聞くことができました。その時に、私が香織ちゃんに手を振ったら、私だと気が付いてくれたのです。映画を見終わってパンフレットを見ていたら、野中監督と近藤良平氏の対談が掲載されていたので、野中さんに映画の感想を勇気をもってお伝えしました。というよりは、とても感動したことを伝えたかったのです。

『ダンスの時間』はダンスのレッスンやダンスの映画というよりは、身体を通した自己や他者との対話でした。ここで大事にされていたのは、私が40年間ダンスを中心に教員養成に関わってきて思い続けてきたことが、表現されていました。他者との身体を通したかかわりが希薄になっている現在、特に大事にしなければならないことが、美しい映像と音楽の中に、ひそやかに表出されていました。特に、他者との双方向のやり取りや、指導者が相手の思いや能力を引き出すやり方が、何気に自然にクローズアップされていました。是非とも、教員や看護や介護の人たちに、見てほしいと思いました。そのことを野中さんに是非とも伝えたかったのです。初めてお会いし、お話ししたにも関わらず、私にとっては旧知の友と話している感覚でした。その後、何回かのメールのやり取りで、今回の対談や大学でのダンス授業を見ていただく機会に繋がりました。

野中 引き出すのって、とても魅力的ですね。

4. 正田千鶴先生と松本千代榮先生の影響力

高橋 『ダンスの時間』の中で、香織ちゃんが水族館のスタッフに対して行っている即興表現を見ながら、私と香織ちゃんの共通のダンスの恩師である正田千鶴先生のことを思いながら、映像を見ていました。正田先生はすでに 80 歳を過ぎておられますが、現在も新作を作り続けています。これまで、多くの方々にダンスの種をまき、それが、各自のからだに根付き独自の花を咲かせているのだと実感しました。正田先生のダンスのレッスンは、基礎的な体の動かし方から始め、次は様々な観点から創った動きを練習する、そして最後は、グループに分かれて動きのモチーフを創り発表するというやり方だったように思います。そこで、面白かった動きは、正田先生の作品に採用されましたので、頑張っって面白い動きやオリジナリティに溢れる動きを創ろうとしていました。45 年ほど前の日本におけるお稽古場のレッスンは、先生の動きの振り写しがほとんどだったと思うのですが、正田先生は違っていました。正田先生の恩師の江口隆哉先生も「引き出す教育」だったようです。また、江口さんの弟子であった世界的舞踏家の大野一雄さんも、捜真女学校のダンスの授業は「引き出す教育」だったといえます。

正田先生の影響を受けた方は沢山いますが、一人目は映画の主役の香織ちゃんです。野中さんと対談をした振付家の近藤良平さんもそうです。教育界にも正田千鶴先生影響を受けた方々があります。特に学校教育の指針になる学習指導要領作成協力者としてダンス領域に関わった片岡康子お茶の水女子大学名誉教授、村田芳子筑波大学名誉教授、そして私です。

3 人とも正田千鶴先生のみならず、松本千代榮お茶の水女子大学名誉教授の影響を受け、独自の指導法を展開していますが、子ども達の可能性を引き出すことに重点をおいているのは共通しています。松本千代榮先生は 96 歳になりますが、日本の学習指導要領体育の中のダンス領域に、表現系のダンス、それも振り写し教育ではなく、子どもの主体性や表現力や創造性を引き出す内容を位置づけた先生です。戦後 70 年間にわたり、日本のダンス教育では表現系が守り続けられています。ダンスは海外では芸術科目に位置付けられている国も多いのですが、日本は体育の中で、しかも、2012 年からは中学校の 1・2 学年ではダンスが必修になりました。70 年前では考えられなかったことが今、現実になっています。その発端は、松本千代榮先生なのです。

野中 その引き出す教育って、体育の授業でも行われていたのですか。

高橋 ダンスが先導してきたと思いますが、体育の領域でもグループ学習など様々な方法が実践されてきました。

野中 そうか、体育の時間に引き出すっていう授業がされていたのですか。そういえば、16 歳の娘が三鷹の小学校にいるときやっていた体育も、その一つかもしれません。バスケットとか野球とかサッカーのルールもグループで話し合っって、「ナントカ君は蹴るのが苦手なのでどうしようか考えます」とかっって、みんなで毎日メモを書くんです。思い起こせば、それも、子ども達が話し合っって解決策を導き出していたのかも知れませんか。

高橋 三鷹市は小中一貫校が多いし、教育に熱心ですね。

私の中には、正田先生と松本先生が作ったダンス教育の大きな二つの潮流が脈々と流れています。このように、からだを通して培われた動きや技や指導法は、DNA のように次世代のからだに受け継がれていくように思います。

2020 年実施予定の新学習指導要領は、戦後の大きな改革と言われています。そこでは「主体的・対話的で深い学び」が協調され、子ども同士が対話してコミュニケーションしながら、自分を表現していくことが求められています。教師はそれを誘導し、引き出し、見守っていくのです。ダンスが果たしてきた役割が、いま、まさに改めて求められています。正田先生や松本先生が種をまき、影響を受けた人たちのからだの中にかくつもの可能性が開かれています。人間には自分を出せる能力がちゃんと備わっています。それは人と関わる中で実感できます。それには、本当に人を信頼することが大事だと思います。特にダンスを通して、一人一人がみんな生きていいんだよとか、それでいいんだよとか、あるがままに動く即興のようなものが認められる。人生はそもそも即興的な表現の軌跡なのかもしれない。そんなダンスが、色々なところで展開するといいなと思っています。ですから、『ダンスの時間』は、ダンスの本質を問う綺羅星のごとく、私の前に現れたのです。

野中さん、本当にありがとうございました。

(対話記録作成は高橋ゼミの黒川葵さんによります)



写真④『ダンスの時間』初日の映画館にて



写真④ダンス授業を見学された野中監督（前列④）と受講学生 2016.10.18

5. 踊る快感、動く楽しさ コンドルズ主宰 近藤良平

1. はじめに

今年で「舞踊」に携わり 25 年くらい、そして自分が率いて活動している「コンドルズ」というダンスカンパニーは、今年で 20 年を迎えた。まずはこの場をかりて感謝を申し上げたい。今年がそんな節目な年でもあり、こうやって書く機会を与えられたことはありがたき事だ。さあ今回は「踊る快感、動く楽しさ」と大きいお題。これを言葉のみで表す事はかなり困難な事、でもこうやって今でも自分が踊りを続けているという事は、確かに「踊り」そのものに魅力と快感があるのだろう。

2. コンドルズを続けて 20 年

20 年前にカンパニーを始めた頃は、「踊り」の魅力など全くわからず、ほぼ余暇の延長であった。ある種のサークル活動と同じで「ワイワイ」するのがただ楽しいというレベルであった。そして「身体を使いこなす」という固有な遊びなのかとも思っていた。それまでは、球技などのスポーツしか味わっていなかったので、身体をメインにするダンスの世界が「素敵なことだなあ」と思うようになった。と言っても、そのままダンスにずっと関わるといふ決意を持ち続けた訳ではなかった。日々の暮らしの中で現れては消えていく、そんなことが「ダンス」の世界なのかと。20 代、30 代を経過する中で「どうやってダンスを続けるのか」「ダンスをやめるときがきた！」など、周り様々な形で、ダンスに取り組み、考えそして悩み、「ダンス」から離れていった人たちを見た。もしかすると「ダンスと自分」なんていう大きな指針を掲げるとダンスが離れていくのかもしれない。今は 20 周年を迎えて、続けていたからこそ感じられる「ダンス」という快感なのかもしれない。カンパニーのメンバーは結成当時から、誰もやめることなく、舞台に立ち、踊っている。もちろんそれぞれで大学や予備校の講師、店のオーナーや企業の社長をやりながら飄々と舞台に立っている。ここまでもいくと「暇つぶし」のように始めたダンスがらみの生活も今や本筋だとも思う。「快感」を得るために踊り始めたのではなく、踊り続けたら「快感」を得て生活につながった。間違いなく我々は、踊りに助けられている。

3. ダンスを産み出すこと

ダンスに関わる、ダンスを通して産み出すような行為は、喜びであり困難な道でもある。そして簡単には「ダンスはただ楽しい」とは言えない。「陶芸家」という言い方も職業的には「製陶業」と呼ぶ。陶芸家というとアートな響きが伴うが、「器の生産者」でもある。そこには生産する仕事としての「陶芸家」である。同じく「舞踊家」という響きも怪しい。さらに「職業ダンサー」ということばがある。同じダンスという領域でも価値が違うところに求められる。中学校ぐらいから接する「ダンス」という領域も、「ダンス」は楽しいものという次元で終わらせるのは危険なことでもある。ダンスの価値の行方は、定かではない。ダンスはより文化的な価値観が付随するべきだと最近をよく思う。絵画の授業が小学校中学校と学んだ後に、やがて大人になり「僕は絵を描くのが下手ですから」といって全く絵を描こうとしない人はたくさんいる。それは小学校中学校時代に評価ばかりが先行した結果だ。踊りという領域も同じように小中学校で触れ、大人になって「僕は下手なので踊れません、踊りません」と宣言することを覚えるだけになってしまう。そんな考えで「舞踊」を終わらせないために、どうして踊るのか、何を描くのかは大切な要素があると思う。「何を踊る」と楽しいのか、踊ることで「何が可能となるのか」を探ること。そんなことで人生の中の「舞踊」が必要不可欠なものなのだという事に少しずつだが近づくだろう。

4. ダンスに求めること

自分が舞台やワークショップを通して、たくさんの方々に関わって感じる事。本人のやる気が 80 パーセント。10 パーセントくらいの向上心。残り 10 パーセントは仲間や友達。本人のやる気があれば「ダンスが下手だ」という考えはうまれにくい。「上手になりたい」という気持ちは大切だ。そして続けていく。仲間たちと。そんな風が続いている方は、やっぱり豊かに感じる。そんな「ダンスを続けるきっかけ」のようなものが学生時代に芽生えるといいなと思う。

余談になるが、年齢無制限のダンスワークショップに小学生から83歳のおじいさんまでが参加した機会があった。そしてそのおじいさんは、動きもよければ、反応や喜怒哀楽もはっきりしていて80代を迎えた方には思えなかった。Wsを終えてから話を聞くと彼は、若い頃は戦争で戦闘機に乗り戦後は大学で生活指導に関わり、75歳を迎えた時に蜷川幸雄さんが始めた「ゴールドシアター」に応募して初めて舞台上立つ。そして80代になり「ダンスがもっと上手になりたい!」という心意気でワークショップに来られたのだ。そんな姿を見ると、自分ももっとダンスをやり続けなければなど素直に思う。そして向上心の中で自分に合うダンス、年齢に相応しいダンスを見つけていくことも大切なだろうと思う。

5. 「動く楽しさ」または「楽しく動く」ことについて

「動く」こととは基本、日常の動きを示す。「歩く」や「座る」や「飲む」など。それらは、ほとんどの場合、目的があり、コンビニまで「歩く」だったり、客席に「座る」だったり。以前1日の間に行うであろう「動き」を羅列してみたことがある。「目を開ける」始まり「からだを起こす」そして夜に「夢を見る」あたりまでだ。するとものすごい数の動詞そして「動き」がでてくる。300以上の「動き」はでてくるだろう。人は、それほどたくさん「動き」を1日の間に体感しているのだ。ではそれらの動きに「楽しく」をくっつけてみる。「楽しく歩く」「楽しく座る」「楽しく飲む」。それはそれでかなり陽気な変な人になってしまうがそこには大きなヒントが隠されている。「動く」から「楽しさ」があるのか「楽しさ」から「動く」のか。ほとんどの人たちが追われているような生活の中で、「目的地獄」に陥るところを少しでも「目的のない」や「楽しさが伴う」動きができれば、それはそれで良いことかもしれない。さらに目的を持たない動きの一つとして、少しだけ「ダンス」について考えてみるのも良い。人間生活において誰にとっても必要なものとして「ダンス」があるのだろう。まさしく「動きを豊かにするための処方箋」である。

6. 「動き」を拡大すること

「動き」は、平仮名3つで「う・ご・き」であるが、その内容は限りがない。例えば「広場を一周する」うごきを想像してみる。あなたは何かができるでしょう。

- ・ただ走る・飛行機のように走る・ダラダラと歩く・アピールしながら周る・命がけで周る・目隠しして歩く
- ・歌いながら歩く・音を出して歩く・手をつないで歩く・裸で歩く・水の中のように歩く・ねっとり歩く
- ・宇宙空間のように歩く・子どもになって歩く・矢が刺さったように歩く・初めて立った時ように歩く
- ・盗人のように歩く・ピノキオのように歩く・ゴジラのように歩く・おんぶして周る・4つんばいで周る

まだまだいくらでも挙げることができる。そしてどんな動きもイメージすれば、再現可能だ。その部分は人間の面白いところ。何も考えず広場一周もよいが「イメージ」して一周すると表現になっていく。そして「動き」に豊かさが生まれるとより日常が鮮明になっていく気がする。そんな「動き」の延長に「踊り」っぽいことがあるのだと思う。さあ「くだらない」と思わずに、「こんな幸せなことばかりでいいんじゃない!」と言おう。「今の時代、許される時間、喜びを持つことは年齢を超えて、どんな場所でもいいんじゃない。」と。「人生に快感あれ!」



(『女子体育』2017 Vo1. 59-12・1 掲載)

6. ダンスはだれもが主役・みんなが主役 横浜国立大学 高橋和子

赤ちゃんはだれもが主役である。物心ついた頃からは、他者と比べながら自己を知り、成長することができる。比べる対象者や地域は、学校、地域、社会、他国等ドンドン広がることによって、主役になれたり、脇役だと思えたり、存在自体に不安を感じたりと、様々な様相に直面する。どんな状況に置かれても、「だれもが主役・みんなが主役」でいられればよいのだが、なかなかそうはいかない。

そのために私たちは色々な「ひと・もの・こと」に救いを求める。例えば、歌。国民的アイドル SMAP の『世界に一つだけの花』は 300 万枚も売れたそうだが、「ナンバーワンにならなくてもよい、元々特別なナンバーワン」の歌詞に自己肯定感を得た人も多いただろう。この歌は 2003 年にリリースされたが、その年は「総合的な学習の時間」が新設され、子どもの個性を育むことを主眼にしたゆとり教育が本格化した時期と重なったこともあり、教育界ではこの歌を、ゆとり教育の応援歌と捉えている先生もいる。

その後、日本はグローバルの荒波にもまれ、小中学校の試験や大学ランク付けや経済も国際競争を余儀なくされた。そんな折、2016 年に登場した歌は『みんながみんな英雄』である。この曲は、我が国で最も普及したフォークダンス「オクラホマ・ミクサー」の編曲で、多くの人が口ずさめるメロディである。「特別じゃない英雄じゃない みんなの上には空がある」の歌詞のリフレインにより、英雄じゃなくとも主役になれなくとも、すべての存在がそのまま素晴らしいとのメッセージを受け取り、元気をもらえたのではないだろうか。類似の言葉「みんな違ってみんないい」は、金子みすゞ[1903-1929] が百年前に使っており、ダンス領域の特性を表わしている言葉として認知されている。

このように、単一民族国家であり自己肯定感が低い日本では「みんなが違う」ことを強調する。反対に、人種や民族が「皆、違う」多国籍国家では「みんなが同じ」であると訴えるメッセージが多い。どちらにしても、多様性を受け入れることは重要であることは、間違いない。

では、ダンスは本当に「だれもが主役・みんなが主役」になれるのだろうか。2017 年現在のダンス人口は 1,000~1,500 万人ともいわれており、この数値から、学校期のみならず生涯にわたって、ダンス愛好家が多いことが推察できる。加えて、2018 年ブエノスアイレスで開催される第 3 回夏季ユースオリンピックにダンススポーツ（ブレイクダンス）種目が追加された。この種目のみならず、ローザンヌ国際バレエコンクール等においても、日本はユースダンサーを輩出する大国として評価されている。このようにダンス領域では、最近とみに、だれもが主役になれる機会が増大している。次に、みんなを主役にさせるために、指導者はどのような配慮が必要なのであろうか。それには、下記に示すような、ダンスの知識や指導の技術や留意点等を押さえる必要がある。その上で、主役になれなかった脇役には、「なくてはならない、かけがえのない存在である」ことを伝えたい。これらのなかにはダンスのみならず、指導者として大事にすべき共通点も含まれている。

- ①人間はもともと創造的で主体的な存在であることを認識し、一方的な指示に従わせるのではなく、自らが考えて行動できる場を作り、それを促す。
- ②考え方や履歴や価値観、身体の組成や動かし方等が違うことも個性と捉え、それぞれの個がいろいろな場面で活躍できるように配慮する。
- ③ダンスはノンバーバルコミュニケーションとして、人種や宗教や国を超え、誰とでも通じ合えるツールであることを知る。
- ④ダンスには様々な場面や役割がある。例えば踊り創り観る。発想やイメージを出す。作品構成や群構成（隊形・フォーメーション）や空間構成を考える。音楽を探す。衣装作成や調達。映像を撮ったり配信したりする。発表会を企画する。ポスターやチラシやプログラムを作る。広報活動をする。みんなをまとめる。
- ⑤教えあったり言葉で伝えあったりして、共通理解を図るようにする。
- ⑥日本の学校ダンスは戦後間もない時から、創造的・主体的な問題解決学習を行ってきた。いわゆる「アクティブ・ラーニング」であり、このことは、体育の他領域にも大きな影響を与えてきたことを知る。
- ⑦あなたなら他にどんなことを思い浮かべるだろうか。沢山考えられるほど、あなたはアクティブ・ラーニングの主役になりえるのではないだろうか。

（『女子体育』2017 Vol. 59-4・5 掲載）

7. 内側から捉える身体とダンス教育:ソマティクス(身心学)の視点からみる即興性



ボニー・ベインブリッジ・コーエン Bonnie Bainbridge Cohen (1943 年生まれ)
Body-Mind Centering® (BMC)の開発者。ソマティクスの主要な実践者として 50 年以上にわたり動きやからだ、認知への総合的アプローチを研究し、全米各地でダンス指導も行ってきている。オハイオ州立大学で作業療法学の学士を取得。エリック・ホーキンスにダンスを師事、ボバース博士夫妻よりボバース法(神経発達療法)を学び、また Laban Movement Analysis、Kestenberg Movement Profiling の認定も取得している。

聞き手 吉田 美和子 上智大学准教授 高橋和子 横浜国立大学教授
ボディマインドセンタリング(BMC®)プラクティショナー

1. はじめに

近年、ダンス教育へのソマティクス(身心学)導入に日本でも関心が高まっている。欧米のダンス教育では、以前より Laban Movement Analysis/Bartenieff Fundamentals(LMA/BF)やアレクサンダー・テクニークなど多様なソマティック実践法が導入されてきているが、その一つであるボディマインドセンタリング(Body-Mind Centering®)の創始者、ボニー・コーエン氏(以下コーエン)が2016年4月に来日した。

本インタビューは、4月30日に開催された日本女子体育連盟国際交流企画「Dance and Body-Mind Centering®」ワークショップ(於:日本体育大学)における同氏への公開インタビュー、およびワークショップ後の高橋和子氏(横浜国立大学)によるインタビューを通訳の立場からまとめたものである。キーワードは「内側から捉える身体(body perceived from within)」、「全人的なかかわり(to meet the whole person)」、そして「即興性と創造性」である。

2. 「Dance and Body-Mind Centering®」ワークショップ

ワークショップ開始前、コーエン氏は会場に集まったダンス専攻の大学生を主体とした参加者を前に笑顔で佇んだ後、その場の参加者に合わせた即興的なダンスワークショップが始まった。

当日コーエン氏が選択したのは、Body-Mind Centering®の体験的解剖学のアプローチによる「骨盤と脚の関係」をテーマとした動きの探求だった。会場には骨格標本が置かれ、参加者は、骨盤は2つに分かれること(pelvic halves)、股関節、恥骨結合の構造を最初に視覚的に理解し(Visualization)、各部分を

区別せず固定した(hold)まま動かすとき、骨盤の前後にアンバランスさが生じることを学習する。その後、実際に身体の各部分を意識して動かしながら(Somatization)、動きを固定することなく、丁寧に分けて使うワークが行われた。

主要なエクササイズは2つ。一つは四つ這いになり、背骨の末端にある尾骨を中心として骨盤2つを分け、左右の脚を交互に使い分ける動き。もう一つは片脚をバーに上げ、パートナーに骨盤に軽く触れてもらいながら、片側の骨盤から股関節、恥骨結合へと脚を分けて動かすものだった。普段のレッスンで何度となく繰り返してきた単純な動きでありながら、あらためて他者に触れてもらいながら、自分の動きを丁寧に探っていく作業は難しかったようである。会場は様々な戸惑いや小さな驚きの声で溢れ、終了後には次のような質問が受講者から投げかけられた。

参加者 自分のからだの細やかな動きを感じるのは、とても難しいと思いました。人の動きを客観的に見て、その動きが繋がって流れているなどか、固定されているなどというのは何となくわかるのですが、何にポイントを置けば、自分のからだの動きへの気づきを生み出せるようになるのでしょうか。

コーエン それには時間がかかります。そして同時に、あなたが本当にそうしたいと(気づきたいと)欲することが必要です。私は15年以上こうした実践を続けています。時間をかけてきているのです。このようなアプローチの目的は、例えば、私がパフォーマンスを指導する際、その人の豊かな表現を引き出すために、いかに動きの容易さ(ease)を見つけていくかであり、

どこかで固定されている動きを表現することではありません。そのためにはどんな振り付けであれ、今日実践したような、からだの感覚を「内側から見る時間」が必要となります。もちろん実際の舞台ではすべてを忘れ、ステージや照明、観客を楽しめばよいのです。

願わくば、今日体験したようなからだの探求を普段から続けて欲しいと思います。テクニックによって脚をただ高く上げるのではなく、脚を上げながら自分はどうかしているのか、それを感じる為の時間をとるだけのことなのです。もちろん、それには時間がかかります。



ワークショップ風景

3. ダンス教育へのソマティクスの導入

コーエン いまサンフランシスコで、バレエ教師にソマティクスを教えています。最近バレエ団のカリキュラムのなかでも、ソマティクス—内側からからだを感じるトレーニングを、小さな子どもたちのクラスに導入し始めたそうです。トウで立つ前に自分のからだを感じる時間を持つ—つまりテクニックと同時に、動きの容易さ(ease)を求めているのです。また大学のダンス教育でも、テクニッククラスの最初の 15 分間にソマティクスを導入し、自分のからだ丁寧に向き合う時間をつくり、テクニックに活かしています。

参加者 人のからだに触れるとその人の動きがわかるのですが、自分の動きは自分ではわかりません。やはり誰かに見てもらうことが必要だし、それに見合う相手が必要な感じがします。

コーエン ソマティック教育では、パートナーワークが非常に大切になります。こうしたワークを皆さんが教える立場になるとしたら、どのように生徒達に教え

支えるでしょうか。そのとき今日実践したような、互いの動きを見たり触れたり、話し合うようなワークが必要になります。それは一つの会社組織の中で、職場の皆が支え合うのに必要なことと同じだと思います。(最後にコーエン氏より参加者に問いかけがあった)

私の方からも皆さんに質問があります。からだを内側から見つめていくワークを皆さんは自分で続けていけますか? もし続けたいのにそれが続けられないとしたら、何が必要なのだと思いますか? どのようなサポートをあなたは必要としていますか?

4. 即興表現とダンス

ソマティクスと即興性は切っても切り離せない関係にある。「いま、ここ」にあるからだに「全人的 whole person」に出会おうとする場合、その関わり方や実践法は即興的にならざるを得ない。今回のダンスワークショップでも、コーエン氏は会場の参加者に合わせて即興的にワークを展開したが、来日中開催された他の会合においても同様の試みが行われた。参加者にソックスを手に履き、会場のフロアを共に四つ這いで動き回ることが即興で提案されたのである。会場は一変し、一体化し、同じ目線で個のからだの経験について話し合う場が創出された。

ソマティクスの歴史のなかで、アレクサンダー・テクニックやフェルデンクライスメソッドなど多くの実践法がこれまで生み出されてきたが、ボディマインドセンタリング (BMC®) はダンスとの関わり、特にコンタクト・インプロヴィゼーション(CI)との関わりも深い。コーエン(1993)「Sensing, Feeling and Action」も、Contact Quarterly 誌に連載された、CIのパイオニア Nancy Stark Smithとの対話—インタビュー記事から生み出されたものである。

5. 創造性と表現力

ワークショップ後、高橋和子氏より日本における中学校からのダンス必修化とその現状、今後の指導要領において重視されることが予想される「創造性」と「表現力」について説明があり、コーエン氏のダンス経験について質問がなされた。

高橋 クリエイティブダンスの基本は即興であり、即興表現を 90 分実践するだけでもレジリエンス(立ち直る力)が向上することが調査から明らかになってきました。コーエンさんが即興をやってきたなかで、自己肯定感が増したり、あるいは生きる力が感じられた

りしたといった経験はありますか？

コーエン 即興ではありませんでしたが、私はダンスを3歳から学び、10歳から12歳までの高校時代、それは貧しい地域だったのですが、新たな教育システムを導入した新設高校で週5日、毎日最低1時間、3年間ダンスを創り続けてきました。当時のダンスの先生は一般の体育教師であり、ダンサーではありませんでしたし、どんなトレーニングをしたか思い出せないのですが、とにかくその先生は学生たちにダンスを創り続けさせたのです。

高橋 それは楽しかったですか？

コーエン ダンスが私の人生を、特に10代の危機から救ってくれました。

高橋 ダンスが人生を救ったとは、表現することにより「自分が此処にいるんだ」ということが実感できたからなのでしょう。

コーエン 自分を表現できたからです。すべての葛藤、困難、素晴らしいことも含め、とても深いところまでいくことができたのです。人生はやさしいものでなかったけれど、ソロであれグループであれ、共に助け合い表現をつくることができたのです。毎日のダンスの時間を、人と関わるコミュニケーションの時間を私は心待ちにしていました。先生はステップを教えてくれた訳でもなく、またどんな風に教えたくれたかも覚えていません。ただ選曲してくれた音楽で私たちは動き続けました。体育教師だった彼女のスキルやレベルもわかりません。1950年代、クリエイティブなダンスは誰もがやっていることではありませんでしたから。とても前衛的な学校だったのだと思います。

6. 本物の教師との出会い

コーエン 私にとってダンスの先生は本物の教師でした。生徒を愛し、そして非常に厳しかった。クラスメートが「なぜ先生はあなたに厳しいのかしら」と聞いてきたことがあります。「それは先生が、私が出来ること知っているから」と私は応えました。彼女は非常に厳しかった (demanding) けれど、それは「求めて (demand)」くれたのだと思います。先生が求めてくれたこと、それは私自身のなかの「優れたもの (excellence)」を試させたかったのだと思っています。

また私は「creation of the world (天地創造)」というダンスの卒業作品を45分間踊り通し、いかに世界が創造されたかを吐いて倒れるまで踊り、母に家ま

で連れ帰ってもらったことがあります (笑)。母はサーカスのダンサーでした。日々命懸けでパフォーマンスしている、ストレスフルな、しかし高いスタンダードの素晴らしいサーカスの人たちの間で私は育ちました。そして母から自分は何でも出来るということを学んだのです。

高橋 晴らしい教師に出会ったことがコーエンさんの運命を変えたようですね。

コーエン たった一人でも真の関係性を持つ教師に出会うことができれば、それが私たちの残りの人生を支えてくれます。私には今、94歳になる中国出身の素晴らしい画家の先生がいます。数ヶ月前に彼が病気になって以来、私は毎日彼に会いに行こうとしました。私にとってそうすることは、内側から行かざるを得ない、選択の余地のないことだったのです。育まれた関係性のなかで、彼は私の家族であり親なのです。これが私にとっての先生なのです。教師のスキルはもちろん重要ですが、関係性こそが最も大切です。彼もとても厳しい先生ですが、私は厳しい先生、スキルのある先生—私が出来ることを引き出してくれるスキルのある先生が好きなのです。同様に、私たちが教えざるを得ないよう引き出してくれる生徒、その存在は喜びそのものです。生徒にとってすれば、自分で出来るとは思えないようなことを教師は求めてくるものですが、教師は生徒が出来るであろうことを求めるのです。

高橋 そのような関係性は、いまのダンスやボディワーク、即興表現など、身心を動かすなかでより形成されるということでしょうか？

コーエン 教師と生徒との関係性とは、人として出会う (to meet the person) ことです。その人の豊かさを引き出すこと—外側の豊かさではなく、その人の内側の豊かさを求めることなのです。

厳しさとは、その人が出来ることを求める (calling for) ことです。それは常に即興的です。たとえば今日、私はワークショップの具体的な内容を何も決めていませんでしたが、開始15分前に会場に佇み、学生たちが笑って互いに重なり合い転がったりしている空間を感じ、そこで最初に空間を歩き、互いに通り道を横切り合うような動きから始めました。彼らの「居る場所」から始めたのです。今日のワークショップでは、どうやって創造的になるかを教えずに創造的であることを学生たちに要求しましたが、そのヒントとして、

何が創造的な問いなのかを考えてもらうことから始めました。私たちは創造的ですし、学生たちが私たちに創造的であることを求めてくることで、こちらもまた、学生にいかに創造的になるかを返していく。私たちは互いに求め合っているのです。

高橋 世界中、どこいっても同様の即興的なやり方をなさっているのですね。私も即興的ですが、即興にはある程度の引き出しというか、経験が必要になると思います。私の師である伊東博先生（ニュー・カウンセリングの創始者）も、ワークショップを繰り返すなかで即興の力を得たと仰っていました。

コーエン 高校3年間、毎日繰り返してきた即興的なダンス経験が、私を「創造的な在り方」にしてくれま

した。即興が私の学びの方法だったのです。その意味では、何を教えるかというより「動くこと(movement)」が最も大切な基本です。言葉がなくとも赤ちゃんが動くことから学ぶように。ダンスが日本で必修化されたのは素晴らしいことです。子どもたちは非常に早い時期から動きを、ダンスを通して学ぶのですね。自分自身のからだに在ること、自らを表現し、仲間を大切にすることを。ダンス教育を通じて、今とは違ったどんな未来を、私たちは目にすることになるのでしょうか。

(2016.4/30 インタビュー『女子体育』Vol. 58-6・7 掲載)

写真④コーエン氏と高橋和子

写真⑤左端は足立美和親子、右端は吉田美和子氏

写真⑥ワークショップ受講者：日本体育大学にて



8. 生涯学習社会の実現のために

: 学校教育と社会教育・男女共同参画の視点から

有松育子 文部科学省生涯学習政策局長



有松育子(1958年徳島県出身)

1982年早大法卒、旧文部省へ。2009年スポーツ青少年局企画・体育課長、横浜国立大学理事・事務局長、大臣官房審議官(生涯学習政策局担当)を経て、2014年7月文化庁次長。2016年1月から現職。

聞き手 高橋和子(日本女子体育連盟会長)

専門分野は舞踊教育学・体育科教育学。
1977年福島大学を経て、1981年横浜国立大学。2013年から日本女子体育連盟(以下、JAPEW)会長。

1. 有松局長は憧れの女性

高橋 私が有松局長にお目にかかったのは、局長が2009年にスポーツ青少年局企画・体育課長になられたときです。ちょうど学習指導要領改訂が済み、小学校では移行措置として先行実施が始まった頃でした。初の女性課長就任でしたので、村田芳子理事長が『女子体育』のインタビューを行いました。その後、横浜国立大学に初の女性理事として赴任され、学長補佐だった私は数年ご一緒させて頂きました。職員をまとめられる力や学長とのやり取りも素晴らしく、私の授業でも一緒に踊って下さる行動力と分け隔てなく接する人柄に憧れておりました。JAPEW60周年記念号にも『女性とスポーツをめぐって』という論考を頂き、今回は『女子体育』3回目の登場です。この数年で、局長にまで登りつめるキャリアも含め、今回は生涯学習政策局長としての抱負や政策局とはどんな組織なのか、また日本が置かれている課題もお伺いできればと思います。

有松 そんなにお褒めいただき、恐縮です。私にとって、大学の職に就いたのは横浜国立大学が初めてでした。大学とは「こういうように動いているのだ、すごく走っているのだ!」と実感できましたことは刺激的でした。

2. 生涯学習政策局の組織と仕事

有松 生涯学習政策局の組織には「政策課、情報教育課、生涯学習推進課、社会教育課、男女共同参画学習課、参事官(連携推進・地域政策担当)」があります。近年は、IT化、グローバル化の進展等、社会・経済が急激に変化しています。また、社会の成熟化に伴い、幅広い年齢の人々に学ぶことへの意欲が高まっています。文科省では、これらの変化に対応していくために、さらに、学歴社会の弊害を是正していくという点からも、「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学習することができ、その成果が適切に評価される」ような生涯学習社会の構築が必要だと考えています。生涯学習とは、学校において行われている学習のみならず、地域・社会で行われている学習をも含んだものです。学校教育や社会教育も含めた、生涯学習社会の実現を目指しているのです。

高橋 JAPEWが女性の視点から学校体育・生涯スポーツの普及・振興に貢献し、健康で生きがいのある生活の実現を目指しているのと似ていますね。「いつでも・誰でも・どこでも」がキーワードですね。それにしても、局長は就任してまだ一か月しかたっていないのに、組織の全てを把握しているのは驚きです。

有松 数年前に同じ組織内にいたので、ある程度

は分かっておりましたが、状況は日々変化してきます。有能なスタッフの方々に支えながら、勉強の日々です。

高橋 局の具体的な仕事には、どんなことがあるのでしょうか。

有松 例えば「政策課」では、生涯学習の観点から、文教施策の総合調整、行政機関等との連携・協力体制の推進を担当しています。豊かな人間性を備えた創造的な人材の育成のための教育改革や生涯学習に係る機会の整備、教育・スポーツ・文化等に関する調査や統計、中央教育審議会の庶務等も行っています。「男女共同参画学習課」では、男女共同参画社会の形成のために、生涯学習機会の整備や女性教育の振興も担当しているのです。

高橋 実に多様な拡がりがありますね。中央教育審議会と言え、私も 2015 年から委員をしています。会議の冒頭、文科省側からの説明があります。その役割を担う女性室長は、周到な準備と要点を押さえた分かりやすい説明を、いつもされます。すごい能力です。説明を受けて、体育関連の私たち委員が意見を述べるのですが、その主査役は筑波大学の山口香先生です。このように、昨今は女性が活躍する場が増え、男女共同参画の実現を感じています。さて、政策局では、2016 年の一番の課題はなんでしょうか。

有松 学校と地域を創生しようとする課題です。具体的には、2015 年 12 月に中教審から 3 つの答申が出ました。①地域と学校の連携・協働、②チーム学校、③教員の資質向上、に関する答申です。この中教審 3 答申の実現に向けて、2016 年 1 月には馳文部科学大臣から、「次世代の学校・地域」創生プラン(通称、馳プラン)が出されました。これは、我が国が抱える課題を解決して、子供たちが自立して活躍する「一億総活躍社会」「地域創生」の実現を目指すものです。

高橋 我が国が抱える課題とはどんな課題ですか。

有松 主に 4 つの課題があります。「高齢者人口は増大する一方で生産年齢人口は減少」「グローバル化の進展に伴い国際環境は激変」「学校の抱える課題の複雑化・多様化」「地域社会の支え合いの希薄化と家庭の孤立化」です。それへの対応として、答申①の「地域と学校の連携・協働」では、「コミュニティ・スクール」とともに「地域学校協働本部」

(保護者・地域住民・企業・NPO 等)を創り、その活動を継続するための地域コーディネーターを置く等の案があります。答申②の「チーム学校」では、学校の組織運営改革のために校長のリーダーシップの下、教員とスクールカウンセラー等の多様なスタッフが連携・分担する体制を整備します。答申③の「教員の資質向上」では、教員制度の一体的改革として、養成・採用・研修を通じた不断の資質向上を目指します。

高橋 学校と地域が両輪となった改革ですね。いつ頃までに完了の予定ですか。

有松 学習指導要領改訂は小学校の場合 2016 年度を目指し、2020 年の東京オリ・パラには全面実施を計画していますが、それと連動して「馳プラン」では、各ガイドラインの改訂・策定・普及・定着や法改正(社会教育法・地教行法・学教法・免許法・教特法)等、5 年間の行程表を示しています。

高橋 急ピッチで、様々な改革がなされますね。私も中教審の委員として、次世代の子どもたちが幸せに生きていけるような意見を述べていきたいと思っています。ところで、2016 年 2 月に内閣府は「教育・生涯学習に関する世論調査」結果を発表したようですが、特徴的な傾向を教えてください。

3. 「教育・生涯学習に関する世論調査」は実益重視

有松 この調査は 2015 年に、全国 20 歳以上の 3,000 人に対して、調査員による個別面接聴取によって行われたもので、回収率は 55.1%でした。1988 年から実施され、今回で 7 回目になります。主な特徴についてお話しします。① 1 年以内に生涯学習に取り組んだ人は長期的には増加傾向にありますが、前回調査時(2012 年:57.1%)からは 47.5%に減少。②取り組んだ理由の内訳(複数回答)は「学習が好きであったり人生を豊かにしたりする」が 54.8%で最も多く、「健康の維持・増進」(43.2%)や「親睦を深めたり友人を得る」(32.1%)が続いています。多くの項目は前回調査より減少していますが、唯一増加したのが「現在の仕事や将来の就職・転職に役立てる」(28.0%)です。実益重視の傾向が強まったと言えます。また、今回初めて「教育への関心」について調査したのですが、③高校までの教育で関心があるテーマは「いじめや不登校への支援」が 69%と最も多く、④大学教育等での

関心があるテーマは「教育費負担の軽減策」(43%)、「社会人の学び直しへの対応」(39.3%)でした。

高橋 社会人の「学び直し」とは具体的にどのようなことでしょうか。

有松 2013年の教育再生実行会議が設置され、抜本的な教育改革の提言が出されました。「学び直し」とは、社会人が再び大学や専門学校、放送大学等で学び、新たに必要とされる知識や技能を身につけることを意味しています。調査結果によると、「学び直し」を希望している年代は30~50代が、男女別では女性の方が比較的高い割合です。学びたい分野について、「外国語」は20~50代までが上位を、50~60代では「医療・福祉」、70代では「健康・スポーツ」が上位を占めました。

教育・生涯学習に関する世論調査	2015年	2012年
①生涯学習をした(複数回答)	47.5%	57.1%
健康・スポーツ	21.0%	30.4%
趣味的(音楽・舞踊・レク等)	18.8%	25.7%
②生涯学習に取り組んだ理由(複数回答)		
学習好き・人生を豊かに	54.8%	59.4%
健康の維持・増進	43.2%	48.8%
親睦を深める・友人を得る	32.1%	42.3%
現在の仕事や将来の就職	28.0%	25.6%
③高校までの教育への関心(複数回答)		
いじめや不登校への支援	69.0%	
道徳教育	54.7%	
④大学等での教育への関心(複数回答)		
教育費負担の軽減策	43.0%	
社会人の学び直しの対応	39.3%	

*表は聞き手が内閣府の調査結果から作図。

高橋 私も放送大学で教えていますが、20~90代までの女性が多く受講しています。入学理由には「老後を夫と毎日テレビを見て過ごすのは耐えられない」と言う方もおられました。「日々の生活に彩りを」との願いが学びの動機になっているようです。ところで「学び直し」の成果は、社会に還元されるのでしょうか。

有松 いい質問です。学習成果の活用が生涯学習社会を豊かにする訳ですが、学習歴の「見える化」を測り、資格等を持った人を地域の人材として提供するためのマッチング機能が必要です。これまでは、各個人が各自で活動できる場所を探してお

られたと思います。これからは、個人の関心事と地域社会が求めていることをつなげる役割も、大事になります。そのためには、「学びの質保証」もいるでしょうね。しかし、それと同時に、国や地方自治体ではソフト面やハード面の整備充実が必要です。例えば、公民館や学校施設の開放、経済的支援、情報提供、支援者の育成や配置、インターネットを使った学習活動の充実等が求められています。このような方策が、生涯学習の振興につながっていくと考えられます。

高橋 私たちが学生だった頃からすれば、夢のような時代になりましたね。横国大でも、定年後に博士課程に入ってこられる方がいます。卒業式では80歳の方が博士課程の総代でした。私は「学び直し」より「学び続け」の言葉のほうがしっくりしますが。これらを推進するトップが有松生涯学習政策局長ですね。局長への期待が益々膨らみますね。

4. 女性がキャリアを重ねること

高橋 次にお聞きしたいことは、女性がキャリアを重ねることについてです。局長にとって、34年間働き続けることができたコツや仕事と家庭の両立等について、伺えたらと思います。JAPEW会員は女性が多く、共働きをしながら、ボランティアとしてJAPEW本部や各県の役員をされており、頭がさがる思いです。その間、育児や介護や転勤で、勤めを辞めた方も、多くおられるのです。

有松 高橋先生も40年近く働き続けておられるので、私の先輩ですよ。私が文部省に入った時は、育休はなかった時代でした。そんな時代でも、子どもを産み育てた先輩たちは何人もおられました。先輩たちは平気な顔をしておられましたが、その陰にはやめようとしたことや大変な思いをされたことは、一つや二つではなかったと思います。それを乗り越えて、働き続けておられたのだと思います。幸い私は職場結婚でしたので、夫は私の仕事をよく理解してくれました。それが大きな助けになりました。また、家を離れての単身赴任もなく、そういう意味では、職場が女性に配慮してくださっていたのかもしれないですね。保育園に預けて虎ノ門を往復した時期も、今思えば懐かしいですね。横国大では2013年に男女共同参画推進セ

ンターが創設され、育休や子育て中の教職員が談話会を通して、子育てや研究の悩み等を気軽に話せる場ができましたよね。私も文化庁に転勤になった時に、やりました。好評でした。

高橋 横国大もこの数年で大きく変わりました。医学部はないのですが、学内に保育園ができました。0歳児から80歳を超えた方々や1,000名近い留学生もキャンパス内を行き来しています。休日に実施される入試等での「一時預かり保育」や育児中の教員が研究支援を受ける制度等をはじめとして、2015年には「男女共同参画宣言」をしました。生涯学習政策局の男女共同参画学習課が、我が国の男女共同参画をリードしていきますので、今後の政策にも期待いたします。次に伺いたいのは、局長は数年単位で職場が変わりながらも、その場その場の重責をどのように果たしておられるのかについてです。

有松 私はおそらく、強烈な性格の持ち主ではないと思います。自分にしかできないことをやる、どんどん突き進むタイプではありません。公務員として、大きな流れの中で、与えられたその場で、その時々で、最善を尽くそうとしてきました。その思いは変わることはなかったし、今後も変わらないと思います。ただ、大事にしてきたことは、方向性を誤らないよう充分留意することでしょうか。

高橋 その見極めが凡人には難しい。局長のバランス感覚がどのように育まれたのか、「女性がキャリアを重ねるための必須アイテム」として研究対象になると思います。最後になりますが、局長として現在やるべき課題は何でしょうか。

有松 前述した「次世代の学校・地域」創生プランは、学校と地域を巻き込んだ新しい改革です。それを推進するための法改正等は、できるだけ早く

行いたいと思います。また、現在は第2期「教育振興基本計画」(平成25~29年度)に基づき、様々な教育活動が行われています。そろそろ第3期(平成30~34年度)の計画立案の時期です。それが当面の仕事です。

日本女子体育連盟は、学校体育と生涯スポーツの両輪をうまく走らせておられる、素晴らしい団体です。今後とも、生涯学習や男女共同参画学習を推進する活動に、期待しております。

高橋 エールを頂きありがとうございます。本日はご多忙の中、インタビューにお応え頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

(収録日 2016年2月16日)

(『女子体育』2016.Vol. 58-4・5 掲載)



スポーツ庁創設記念レセプション

第2章 発達を踏まえたダンスの指導法

1. 幼児の表現遊び指導について:物を使った初心者向けの実践

共立女子大学 足立美和

I 研究の背景・目的

幼稚園教育要領の「表現」は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」ことを目的とし、「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して豊かな表現を楽しむ。」ことをねらいとしている。幼児教育における表現活動は、幼児の生活体験や身近な物からイメージするなど、単純で素朴なものが多い。本実践は身近な素材を使って指導初心者でも手軽に取り組み、素材から受ける感覚(感触、音、材質の持つ特徴)などを味わいながら、個々のイメージの世界を十分楽しみ、また、仲間と息を合わせたり集団で一つの世界を味わったりできる教材の実践を報告する。

II 研究の概要

1. 日時 2017.1.18.(水) 9:40~10:10
2. 場所 大日坂幼稚園 遊戯室
3. 対象 年中児 33名
4. 実践内容

分	流れ	活動内容	経験する遊び
5	導入	はじめのお話し ①手遊び「お弁当箱」	手遊び
8	展開1	②新聞紙の島 どこまで乗れるかな 【四つ折り、八つ折り…】	からだ遊び 運動遊び
		③新聞紙になろう	
		④新聞紙キャッチ!	
10	展開2	⑤何みたい?【ナマケモノ、泥棒さん】	真似っこ遊び 表現遊び
		⑥風に乗って出かけよう 【日本橋、スカイツリー、宇宙旅行】	
7	終り	⑦丸めた新聞紙で【お星さま、流れ星】	感覚遊び
		⑧ちぎった新聞紙で【星の雪、星屑】 終りのお話し	

5. 幼児の実態

この学年の幼児はなりきり遊びなどで、すぐに遊びこめる素直さがある。現在お遊戯会で発表するリズム表現活動を、保育時間に練習している。

普段は自由保育が中心の保育で、一斉指導による活動は少ない。表現遊びや自由な身体表現は、通常の保育活動の中ではあまり実践がなく、今回は外部講師(筆者)のもと表現遊びを行った。

III 実践の展開

1. 心を開いて体をひらくために

アイスブレイキング

子どもたちは担任教諭に連れられて遊戯室入室し、横隊で座って支持を待った。外部からの講師であることもあり、子どもたちの「お話を聞く」閉じたからだを見て、心を解放し身体を自由にするためのアイスブレイキングとして、朝ごはんの話から手遊び「お弁当箱」を始めた。

お弁当箱のスタンダードな手遊びから、蟻のお弁当箱、そして、立って象さんのお弁当箱を全身で行い、そのまま新聞紙活動に入ろうとしたが、子どもたちはまた元の位置にすっと戻って座ってしまった。

2. 材質の特性を楽しむ

真似っこ遊びからイメージの世界へ

少し笑顔が出てきたところで新聞紙を分けて、新聞紙に乗る遊びに移る。「新聞の島に乗ってワニさんから逃げろ!」と場面をイメージする言葉かけで展開していくが、新聞紙に乗ったまま移動する子どもが出てくる。また、新聞紙が破れて取り替えたいと申し出てくる子どもも出てきて、活動の声掛けが若干滞る。

「新聞紙になろう」では、講師の動かす新聞紙を見て、思い思いにまねる姿が見られた。二枚の新聞紙で近くの友達と一緒にくっついたり離れたり。全身で表現、とまではいかないが、個々では楽しそうに活動し始めた。

新聞紙の材質や特性を生かした活動に移る。投げ上げた新聞紙を手でキャッチしたり、落とさな

いように風になびかせたりしているうちに、頭に載せて落とさないように移動する姿から、ナマケモノ、泥棒を連想する。泥棒のストーリーの中で止まったり動いたりポーズをとったりと、様々な動きを引き出す声掛けを行う。子ども達は想像の世界でなりきりながら、新聞紙をうまく操作し、声掛けに合わせて楽しそうに活動していたが、動きの種類がなかなか増えないように感じられた。

「風に乗って出かけよう」では、さらに広い範囲での活動を試みた。お空から自分の住む町をのぞいたり、行きたいところに行ってみたり。「魔女になりたい」という女兒の言葉からさらに空高く飛び、最後はCDをかけて宇宙旅行に出発した。

物の特性を生かして楽しむ

子どもから上がった「流れ星！」という声をきっかけに、新聞紙を丸めてお星様を作る活動に移る。ひらひらさせていた新聞紙を硬く丸め、投げ上げたり転がしたり、持って走ったり、いろいろと試しながら遊びを展開する。中には新聞紙のボールに尻尾を付けて、流れ星を表現する子どもも見られた。

今度は新聞紙をやぶってバラバラにし、ちぎった新聞紙の山を作りながら、星屑の集まりを作る。ふわふわした新聞紙のかけらを投げ上げたり集めたり、その上に乗ったり、寝転がったり、その感覚を楽しむ遊びに展開していった。最後は

「朝がきましたー。星屑さんもおやすみねー。」とみんなでちぎった新聞紙を箱に入れて活動は終了した。

IV 考察

1. 物を使った表現遊びのむずかしさ

今回は講師が外部講師であることと、表現遊びにあまりなれていない子どもたちが対象ということで、身近な素材の新聞紙を手掛かりに、活動を展開することにした。子どもたちは素直に活動に取り組み、徐々にからだを解放しつつ活動が展開していった。表現遊びで物を取り扱うことは、初心者にとっては有効な手段である。しかし、その物の扱いにとらわれてしまって、体の動きのボキャブラリーがなかなか増えなかったり、物の素材を楽しむ感覚遊びから真似っこやイメージの等の表現遊びにどう移動するか迷ったり等、物を使うことによる展開のむずかしさも潜んでいる。

2. 指導者自身の感覚や動きの予備体験

物を使って表現遊びを計画するときには、実際にその物でどんな活動ができるか、自分でやってみて、シュミレーションしておくことが必要である。今回の新聞紙では、乗ってみる、たたんでみる、靡かせたり震わせたりしてみる、投げる、体につけて走る、丸める、ちぎるなど、たくさんの動きを引き出すことができる。やってみてどんな感じがするか、どんなイメージがわくか、指導者自身の感覚を試しておかないと、子どもたちとの活動の中で、その場その場に合った適切な言葉かけは準備できない。造形やその他の活動で、下準備をしたり教材について調べたりするのと同じように、表現遊びでも予備活動・予備体験として、事前に一度体験しておくことが大切である。

今回は外部講師であったことや、自由な表現活動に不慣れな子ども達であった割には、素直に活動に参加でき、展開できたと思う。遊戯室の広さは33人が走り回ることができる程ではなく、常に講師の周りに子ども達が集まっているという状態であった為、全身的な動きへの展開は難しかったが、最後まで飽きずに活動に集中できていた。

V 総括

1. 身近なものを使った活動

表現遊びの指導の初心者にとって、表現遊びの手掛かりとして身近なものを扱った活動を計画することは有効である。新聞紙の他、シフォン、リボン、縄、ビニール袋、ペットボトルなど、材質や性質の違いで、様々な活動が展開されることが予想される。

2. 指導者の教材研究

取り扱うものがどんな素材でどんな性質を持つのか、指導者は事前にその可能性を試しておく必要がある。その予備体験があるかないかで、実際の活動中の声掛けの豊富さに差が出るものと思われる。また、材質の違いによって予想される動きも違ってくるので、その物を取り扱ってできる真似っこ遊びや表現遊びの種類も違ってくる。物を使った表現遊びでは、実際に指導者が活動してみても計画を考えることが重要である。

2. 日常的な表現運動を通して、 より開放された表現運動の授業を目指す

川崎市立東門前小学校 村井 美沙

1. 実践の概要

1) はじめに 昨年度は4年生最後の体育の単元として表現運動を行った。楽しんで表現運動を行う児童が多い反面、自分の殻をやぶることができず、見てだけの児童、周りの目を気にして動きが小さな児童が目立った。私自身の指導力の至らなさも原因ではあると思うが、日ごろから、友達と触れ合う経験（手をつないだり、肩を組むなど）が希薄になり、からだが開放されていなかったことも原因ではないかと考える。そこで今年度は表現運動の時間だけ、表現運動を行うのではなく、毎日の隙間時間などを利用し、表現運動に慣れていくことで、より開放され楽しめる授業を目指したい。

2) 実践①

- ・クラスで協力できたことや成功したことがあれば、近くの人とすぐにハイタッチをする空気を作る。
- ・新出漢字の指導では、友だちの背中にも文字を書くことで、必然的に触れ合う空間を作る。
- ・席替えの際には、生活班で1人が目をつぶり、周りの人がバラバラに握手していくことで、誰の手なのか当てる活動を行う。

3) 実践② 以下、指導案参照

4) 終わりに 表現運動の単元は、運動会のリズムダンスなどのふり写しで終わってしまうことが多いのが現状である。本単元で扱った「花は咲く」など、表現運動の単元の最後の発表部分を運動会と当てることで、小学校学習指導要領の内容（身近な題材の様子や特徴をとらえてそのものになりきり全身の動きで楽しく踊る、動きの中に急変する場面を入れる）を押さえながら、ふり写しで終わらない、表現運動の授業をできるのではないかと考える。表現運動の授業を通して、子どもたちの心も体も開放し、楽しい体育を指導していきたい。その為に、普段の学級経営の中で、友だちと触れ合う場面を多く取り入れ、からだごと開放していける雰囲気作りを行う必要性を感じた。

2. 実践② 2年1組の花をさかせよう

第2学年 体育科学習指導案 指導者 川崎市立東門前小学校 2年1組 村井 美沙

1. 日時・場所 12月12日（月）～12月22日（木） 川崎市立東門前小学校アリーナ

2. 単元名 「2の1の花をさかせよう」表現リズム遊び

3. 学習のねらい：動物や海の生き物、昆虫などの身近な題材の特徴をとらえて、即興的に踊ったり、急変する場面を入れて簡単な話にして続けて踊ったりすることを楽しむ。また、「花は咲く」の音楽にのせて、「跳ぶ・回る・ねじる・這う・素早く走る」など全身を使って、踊ることを楽しむ。

4. 評価規準

技能	思考・判断	態度
<ul style="list-style-type: none"> ・身近な題材の特徴をとらえて、全身をつかって即興で踊ることができる。 ・動きの中に急変する場面を入れて、続けて踊ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全身を使った動き方（跳ぶ・回る・ねじる・這う・素早く走るなど）を知り、動きを選んだり、友だちのよい動きを見つけたりしている。 ・題材の特徴を考え、その特徴にあった動きを選んだり見つけたりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に気をつけて進んで運動に取り組もうとしている。 ・だれとでも仲よく踊ろうとしている。

5. 子どもの姿 男子 18 名、女子 17 名（内、特別支援級児童 1 名）の 35 名の学級である。何事にも前向きに取り組むことができ、元気な子どもたちが多
い。自分の好きなものが段々と分かってきはじめ、休み時間などには気の合う
友だちだけで過ごす姿も多くみられる。事前にアンケートを行い、表現運動に
対するイメージを聞いたところ、「たのしそう、おもしろそう、自分が好きそう」などの表現運動に対して好意的な意見が多くみられ
る。まだ、あまり恥ずかしさを感じない低学年だからこそその結果であるとも考
えられる。

体でひょうげんする	5
たのしそう	16
おもしろそう	7
まねをするもの	1
体があたたまりそう	2
自分が好きそう	1
むずかしそう	1
合計	33

6. 学習活動計画 技=技能 関=関心 思=思考・判断

	ねらい	学習活動	評価規準
1	いろいろな動物にな りきって表現遊びを 楽しむ。	・ピザ配達 ・新聞になりきろう ・海や空の生き物になりきろう	・生き物になりきって進んで踊ろうとしている。関 ・生き物になりきって、全身を使って即興で踊るこ とができる。技
2	遊園地の乗り物にな りきって表現遊びを 楽しむ。	・ピザ配達・色々ハイタッチ ・ジェットコースターになりきろ う・海賊船でエア決闘	・乗り物になりきって進んで踊ろうとしている。関 ・遊園地の乗り物になりきって、全身を使って即興 で踊ることができる。技
3	「花は咲く」に合わせ て、植物になりきって 表現遊びを楽しむ。	・からだじゃんけん ・手のひらスキップ ・種から芽を出そう (花は咲くの曲にのせて)	・だれとでも仲よく踊ろうとしている。関 ・植物になりきり、種から芽が伸びていくところを 全身を使って即興で踊ることができる。技 ・友だちの良い動きを見つけたりしている。思
4 ・ 5	「花は咲く」に合わせ て、急変する場面を入 れ、踊ることを楽し む。	・いろいろハイタッチ ・ダイヤモンドウォーク ・走る—止まる—走る (海になりきろう) ・花は咲くにのせて、急変する場面 を入れて踊り続けよう	・急変する場面を入れて、続けて踊ることができる。 技 ・植物の特徴をとらえて、全身を使って即興で踊る ことができる。技

7. 学習の道すじ

12月12日(月) 第1時 【ねらい】 いろいろな動物になりきって表現遊びを楽しむ。	
教師の支援	学習活動
<p>1. 心と体をほぐす運動 ●ピザ配達を行う 5分 2人組になり、1人は目を瞑り、1 人は目を開けて歩く。目を瞑って いる方がもう一人の人差し指を 上に手のひらをのせ、歩いて行く。 2人組は、自分たちのタイミングで 変えていく。(写真1・2)</p>	 <p>写真1</p>  <p>写真2</p>

- 新聞紙になりきる(2人組) **15分**
1人が新聞紙を操り、もう1人は新聞紙になって体を動かす。(写真3)
- 海の生き物になりきる(2人組) **10分**
先頭の人に真似をしながら、海の生き物になりきる。(写真4)
- 空の生き物になりきる(2人組) **10分**
先頭の人に真似をしながら、空の生き物になりきる。(写真5)
- 振り返り **5分**



(左上) 写真3
(右上) 写真4
(左下) 写真5

12月13日(火) 第2時 【ねらい】 遊園地の乗り物になりきって表現遊びを楽しむ。

- ピザ配達 **5分**
- いろいろハイタッチ **10分**
お題を提示し、そのお題にあったハイタッチを行う。
(例) 嬉しい、悲しい、怒りんぼう、
恥ずかしがり屋 (写真㊸)
- ジェットコースターになり **15分**
5~6人のグループでジェットコースターになりきる (写真㊹)
- 海賊船でエア決闘 **10分**
海賊船の上での決闘を表現する。
攻撃を受け、さらに攻撃するというのを2人組で行う。(写真6)
- 振り返り **5分**



写真㊸

写真㊹



写真6

12月15日(木) 第3時 【ねらい】 「花は咲く」に合わせて、植物になりきって表現遊びを楽しむ。

- からだじゃんけん(2人組) **5分**
からだでじゃんけんをする。
- 手のひらスキップ(4~5人組) **15分**
掌を合わせ、形を崩さないように動きあう。(写真8)
- 種から芽を出そう(花は咲くにのせて) **20分**
種から少しずつ芽が出る場面を表現する。
- 振り返り **5分**



写真8

12月20日(火) 第4時 【ねらい】「花は咲く」に合わせて、急変する場面を入れ踊ることを楽しむ。

- いろいろハイタッチ 5分
- 走る—止まる—走る (2人組)
- 15分 海の波をテーマに、教員の合図で、激しく動いたり止まる場面を作り急変する場面を表現する。
- 花は咲くのにのせて、急変する場面を入れて踊り続けよう 20分
- 激しい波に襲われる、激しい波になりきる場面を取り入れ、急変する場面を表現する。
- 振り返り 5分

12月22日(木) 第5時 【ねらい】「花は咲く」に合わせて、急変する場面を入れ、踊ることを楽しむ。

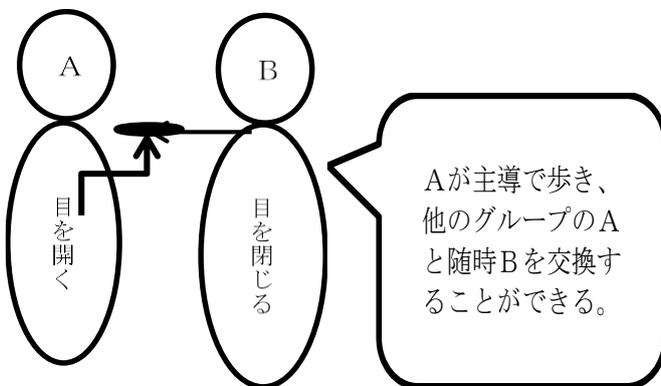
- ダイヤモンドウォーク (4人組)
- 10分 ダイヤモンドの形を作りリーダーの動きに合わせて動く(写真㊸)
- エア決闘 (波 ver) 10分
- 波になりきり、波で襲う、襲われる場面を表現する。(写真㊹)
- 「花は咲く」を踊る 25分
- 「振り返り」 5分



8. 各教材について

1)ピザ配達

①方法 2人組を作る。1人は目を瞑り1人は目を開けて歩く。目を瞑っている方の方がもう一人の人差し指の上に手のひらをのせ、歩いて行く。2人組は、自分たちのタイミングで変えていく。



どこにつれていこうかな？

②子どもたちへの影響 目を閉じているお友だちを自由に連れて歩いたり、ペアを交換したりしていく中で、他者に動きをゆだねることの楽しさに気づくことができる。また、いつも仲の良いお友だちとばかり組んでしまう児童に対して、特に仲良しでなくても、自然とペアを組むことのできる良さがある。授業の冒頭に行うことで、子どもたちの緊張もほぐれやすい。

2)新聞紙

①方法 2人組をつくり、1人が新聞紙を操り、もう1人が新聞紙になりきり動く。音楽をかけながら活動することで、自然とからだを動かすことができるようになる。

(はじめから、2人組で行うのではなく、最初に教師が手本を見せる。)

②子どもたちへの影響 なりきる具体物(新聞紙)があることで、安心して表現することができる。また、2人の世界に没頭することができるので、「周りの人に見られて恥ずかしい。」という感情をあまり抱くことがなく、活動できる。特別支援級に所属している児童も、やることが明確なこの活動は、取り組むことができていた。



3)海(空)の生き物になりきる

①方法 2人組をつくる。先頭の人が親となり、後ろの人は先頭の子の動きのまねをする。「サメ(タカ)が来た！」の合図で、親は子を隠し、じっと止まる。その後は親を交代して再開する。あらかじめ、教師がどのような動きをすればいいか参考までに動く。海の生き物は魚だけではないことを再確認し、動きから何の生き物なのかを当てる時間などをとった。

②子どもたちへの影響 海の生き物は、子どもたちも想像が付きやすい様子で、魚の他にも、くらげ、たこ、かになど様々な生き物になりきっていた。今年度は遠足で水族館に行っていたので、その影響もあると考える。子どもたちの身近にある題材で行うことの必要性が分かった。いつも動き続けるだけでなく、あえて止まっているペアも認めることで、動きの幅を広げることができる。

4)いろいろハイタッチ

①方法 題を提示し、題に沿ったハイタッチを行う。ハイタッチは、歩いていて目が合った人で行う。

題一覧・大喜び・怒りんぼう・恥ずかしがり屋・10年ぶりに出会えた！・びっくり！・悲しい気持ち
・ピカチュウ(ハイタッチすると電気が流れる)・大やけど(ハイタッチすると、とっても熱かった)
・泣きながら・ゾンビ

②子どもたちへの影響 大喜びハイタッチでテンションを上げていきながら行っていった。お題はこちらがいくつか提示すると、他にもやってみないと、子どもたちがどんどん提案していった。なかでも、恥ずかしがり屋、ピカチュウ、ゾンビが人気であった。恥ずかしがり屋は「ハイタッチ&恥ずかしい」の相反する状態がおもしろい様子、ピカチュウ、ゾンビはなりきることが楽しい様子であった。様々なお友だちとハイタッチができるので、全体の空気もあたたかなものとなっていった。

5)ジェットコースターになりきろう

- ①方法 1 ジェットコースターが登っていくところは、寝ている友だちの上を転がっていくように指示
2 友だちが地面についたら、各グループ、前の人の肩に手を置き、ジェットコースターを表現
- ②子どもたちへの影響 1 の動きは友だちの上を転がるという非日常が楽しいようで、何度も行っていました。こういった活動を機に、グループで表現する際の動きの幅も広げていければと思います。



1 みんなの上を回るのは楽しい！



2 前の人が速くて大変だ～！

- ## 6)海賊船でエア決闘
- ①方法 2人組になりスローモーションで「攻撃→受ける or かわす」を繰り返す。
- ②子どもたちへの影響 ゆっくりと体を動かすことで、伸ばす動きや指先までの動きを意識することができる。様々な必殺技を飛び出し、決闘の世界に没頭する姿が見られた。



7)種から芽を出そう

- ①方法 1人で種になりたい場所を選び、それぞれが考える種の形をつくる。そこから少しずつ芽を出していくが、開いていくところ、タイミングは個人の自由にした。
- ②子どもたちへの影響 子どもたちは生活科の授業で野菜を育てており、「種から芽が出る」という題材は、身近で想像しやすいようだった。少しずつ動き始める姿や、出ていたと思っていた芽が止まってしまう様子表現する姿など、その都度価値化していくことで、様々な種の姿が生まれていった。

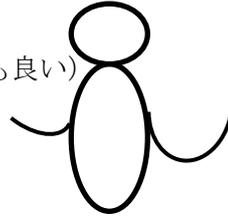
8)走る—止まる—走る

- ①方法 2人組で行い、後ろの人が先頭の人まねをする。テーマを「海の波」とした。「走る」は大波や小波を意識して、ジャンプ、回転なども取り入れながら激しく動く。「止まる」は合図で動きを止めるように指示したが、海なので小さく動いている児童が多かった。海を表現しているの、少し動いているのは許容した。※「走る・止まる」の合図は教師がタンバリンをならすのを合図とした。
- ②子どもたちへの影響 緩急をつけた動きを意識することができるようになる。

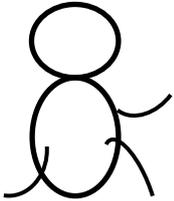
9)花は咲く

①方法 「花は咲く」(作詞岩井俊二 作曲菅野よう子)にのせて体を動かす。「花は咲く」は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の復興を応援するために制作されたチャリティーソングであり、東日本大震災の話にも触れながら、子どもたちに紹介する。

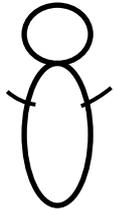
- 1 「真っ白な 雪道に ～ 誰かの笑顔が見える 悲しみの向こう側に」
「種から芽を出そう」のワークを活かし、それぞれの種から芽が出ていく場面を表現する。
- 2 「花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に (サビ)」サビの振付は教師が提示する。
「花は」(右手開く) 次は(左手開く)
「花は」(左手開く) 次は(右手開く)
「花は咲く」(右や左に行きながら回転、ジャンプしても良い)



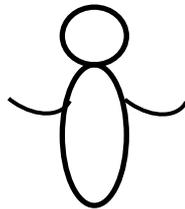
「いつか生まれる君に」(地面から手を上にあげ、芽が伸びる様子を表現)



「わたしは」(両手胸の前)

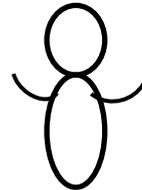


「何を」(左手開く)



「残しただろう」

(両手を上に上げながら、少しずつ前進)



「夜空の向こうの ～ 今はただ愛おしいあの人を思い出す」

(「走る—止まる—走る」のワークを活かし、津波を表現する)

「誰かの想いが見える ～ 悲しみの向こう側に」

(2人組で向かい合い、両手を合わせる)

サビ2回目」(2人組で向かい合い、踊る)

「サビ3回目」(クラス全体で1つの円をつくり、踊る)

②子どもたちへの影響 東日本大震災の様子を伝えながら、大切に踊っていきたいメッセージを伝えた。少し難しい題材ではあったが、子どもたちなりに、動きに想いをのせて表現することができていた。

3. 附属鎌倉中学校のダンス授業の現状と課題

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校 松村智也

1. はじめに

平成20年3月に告示された学習指導要領では①「生きる力」という理念の共有、②基礎的・基本的な知識・技能の習得、③思考力・判断力・表現力等の育成、④確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保、⑤学習意欲の向上や学習習慣の確立、⑥豊かな心や健やかな体の育成の為に指導の充実、に重点を置いて改訂が行われた。これに基づき保健体育科では、生徒たちの豊かな心と健やかな体をはぐくむために授業時数を現行の90単位時間から105単位時間に増やすと共に、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて多様な運動の基礎・基本を経験することが望ましい時期として、これまでは第1学年で「武道」又は「ダンス」のいずれかを選択し他の領域を必修としていたことから、すべての領域を第1学年及び第2学年において履修し、第3学年で選択授業が行われるようになった。これまでは、男子が武道を選択し、女子はダンスというイメージが強かったが、平成24年度から新指導要領は完全実施となり、男女必修でダンスを履修することとなった。ダンス経験の有無に関わらず教員はダンスを指導しなければならないということとなった。

これまで、ダンス領域は平成元年の改訂で男女共修となり、平成10年の改訂で従来の「創作ダンス」「フォークダンス」加えて新たに「現代的なリズムダンス」が導入され、3種目から選択履修できるようにするなど、学習指導要領改訂のたびに大きな変化を経てきた。

しかし、男女共修となっても「武道」との選択履修であったり、現代的なリズムダンスでは「自由に動きを工夫する」という学習指導要領の意図がある中で、教員が一斉に既成の運動技術を指導したり、ダンスの振り付け師が作成したビデオ映像等の踊りを覚えて発表するだけの授業が展開されているなどの実態があるとされている。

高橋健夫¹⁾は生涯学習社会に対応した学校体育は、ダンス文化を基盤とする身体表現芸術の教育、スポーツ文化を基盤とするスポーツ教育、体操・トレーニング等を基盤とする身体教育からなる複合的教科領域として理解されるべきと述べている。「思考力・判断力・表現力等の育成」の具体的方法として「体験から感じ取ったことを表現する」「課題について構想を立て実践し、評価・改善する」「互いの考えを伝えあい自らの考えや集団の考えを発展させる」等を挙げている。

これらの方法はダンスの表現・創作学習と見事に合致しており、ダンスは体育の中でも「生きる力」の育成に向けて体力向上以外の面でも十分に貢献できる運動領域といえる。高橋和子²⁾や村田³⁾は、ダンスには「習得・活用・探求」の学習が組み込まれており、とりわけ創作ダンスや現代的なリズムのダンスは集団学習のスタイルによる探求型の学習（課題解決学習）を主体として、コミュニケーション能力や認め合う態度、論理的思考力を育むことができるとし、ダンス必修化の意義を論じている。

そこで、中学校におけるダンス授業の現状と今後の計画を把握するとともに課題を明らかにすることを目的とする。

2. 学校としての実態

各学年とも4クラスで、各クラス42～44人の生徒で構成されている。保健体育科の授業としては、「陸上競技」「球技」「器械運動」の領域に関しては2クラス合同で授業を行っているが「体づくり運動」「ダンス」「水泳」の領域に関しては1クラス毎に授業を行っている。

3. 生徒としての実態

クラスの大部分の生徒が同じ敷地内にある附属鎌倉小学校から進学してきている。外部の小学校

から入学してくる生徒も少なくないが、全体的に生徒は明るく、男女ともに仲がいい。

運動に関しては、体育の授業に積極的で朝の始業前や昼休み等に校庭や体育館で遊んでいる生徒が多くいる。運動部に加入している生徒も多いが、部活動には加入せずに地域のテニススクールやアイスホッケーなどのスポーツを実施している生徒もいる中で、バレエやフラダンス、シンクロナイズドスイミングなど、自己を表現する種目に取り組んでいる生徒もいる。ダンスに関しては、附属小学校で表現運動の授業を好きだった生徒はダンスへの意欲へも高く、自己を表現することに対して苦手意識や恥ずかしがることも少ない。一方、小学校の表現運動の授業が苦手で身体を動かすことにすら抵抗がある生徒も少なくない。

4. 附属鎌倉中学校におけるダンス授業について

平成 28 年度に行った授業では、第 1 学年は運動文化としての体験から「フォークダンス」を行い、第 2 学年は同じく「フォークダンス」と表現する楽しさの体験や互いを認め合う態度の育成を図ることを目的として「創作ダンス」の内容を扱った。

第 1 学年のフォークダンスでは、「マイムマイム」「ジェンカ」「オクラホマ・ミクサー」の 3 曲を使用した。ダンスの単元の導入の時間では、生徒達が知っているダンスの種類について挙げてもらい、「ダンス」＝「踊ること」とは何かを表現していることについて考えさせた。フォークダンスに関しては、小学校の時に習ったことがある生徒が多かったが、ステップや振りを覚えている生徒は少なかった。フォークダンスにはそれぞれどんな意味があるのか、どんな起源から成り立った踊りなのかを理解していくと、楽しそうに声を出して踊る生徒が増えてきた。

第 2 学年では、第 1 学年のスキー実習の際に「ジンギスカン」の曲に振り付けをした踊りを、学年全員で踊っているの、ウォーミングアップのダンスとして取り入れた。フォークダンスに関しては「ジェンカ」「マイムマイム」「コロブチ

カ」の 3 曲を使用した。第 1 学年と同じく、単元の導入の時間で、生徒達の知っているダンスの種類を挙げてもらった。「創作ダンス」に関しては、4～5 人でグループを作り、45 秒間の曲の中で、自分たちが表現したいテーマを考え、練習した。iPad などの ICT 機器を用いて練習中の動画を撮影し、2 グループで中間発表をしてアドバイスをしあい、最終発表に向けて練習に取り組んでいた。

5. ダンス授業についての課題

ダンス授業に関しては、3 つの内容のうち、指導がしやすいとされるフォークダンスより、生徒達の興味関心が高く踊る楽しさ体験を重視した現代的なリズムダンスが全国的に多く取り上げられている。しかし、現代的なリズムダンスの授業では既存の振り付けや作品を模倣することなどが多く占められていて、授業の特性を十分に達成しているとはいえないだろう。創作ダンスについてもグループでの活動がメインとなり、指導する場面が少なくなってしまう恐れがある。創作ダンスや現代的なリズムのダンスは探求型の運動学習であり、技能の到達目標が一定ではないという特性から他の運動領域に比べて指導が難しいのも課題の一つであると考えられる。

文 献

- 1) 友添秀則、高橋健夫、佐藤 豊、伊藤久仁、木下光正 (2008) 座談会・新学習指導要領と体育一何が、どう、なぜ変わり、どうなるのか一、体育科教育 56-6、10~18
- 2) 高橋和子 (2008) なぜいま「ダンス必修化」なのか、体育科教育 56-3、20~23.
- 3) 村田芳子 (2008) 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは一学習内容と「習得・活用・探究」の学習をつなぐ一、体育科教育 56-3、14~18

4. 支援を必要とする児童生徒を対象とした表現活動 :体ほぐしから表現へ 取り組みやすい教材提示

横須賀市教育委員会支援教育課 ゆうゆう坂本相談教室 齋藤 昌子

1. はじめに

教員にとってダンス領域は他の運動領域と比べ指導が難しいといわれる。その一因として、作品づくりでテーマを提示しても、なかなか生徒たちが動き出せず活動量の少ない授業になってしまうケースが考えられる。他者の目が気になる小学校高学年～中学生において、自由な発想や、自主的な動きを引き出すには授業の場が「何をしてもよい」「お互いを認め合える」安心安全な空間であることが大切である。

今回の授業では、心と身体をほぐし、他者とのかわりや活動が「楽しい」と感じられる空間づくりを意識した教材を提示し、ダンス指導における「導入」に活用できるかを検証した。対象は、不登校児童生徒が学校復帰に向けて通級している「相談学級」（適応指導教室）の児童生徒である。不登校の原因や背景は様々であるが、共通していることは自己肯定感が非常に低く、他者とのかわりが大変苦手であり、感情を表にあらわさない子が多い（特に笑顔が苦手）ことである。自己表現の苦手な児童生徒たちが活動を通して何を感じるか、変化はあるかその効果を検証した。また、今回の教材は普通級の授業の導入でも十分活用できるのではないかと考えている。

2. 検証授業

1. 検証授業

①授業実施日：平成 28 年 11 月 24 日、12 月 5 日

②対象：ゆうゆう坂本相談教室通級児童生徒

（小 6 年女子 1 名、中 1 女子 1 名、中 3 男子 3 名女子 1 名 計 6 名）教員（4 名）

③内容：2 時間扱い（50 分× 2）

「からだであそぼう」をテーマに、体ほぐしを中心に徐々に表現活動へと子どもたちが主体的に取り組める題材を提示し実践する。

2. 質問紙調査：授業後振り返り用紙に記入。

3. 授業の流れ

1) 第 1 回授業（11 月 24 日）場所：教室

<ねらい> 遊びを通して人とふれあう楽しさを味わう。

(1) 2 人組のウォーミングアップ

2 人組は人間関係を考慮して指導者が意図的に組む。教員も参加。

① 握手

○互いに向き合い右手同士で握手し「お願いします」の挨拶：これからの活動を一緒に始めていく仲間との最初のコミュニケーションである。

○握手の姿勢から左手で相手の左ももにタッチ：自分のももをタッチされないようにカバーしながら相手のスキをついてタッチする。

○握手の交換：右手首同士をつかむ（絆の握手）。肩幅に足を開き軽く腰を落とし右手を握手したまま引っぱり合う。つりあった状態で、腰を落とした体制のまま左手の握手に交換する。

② 両手をつないで

○なべなべそこぬけ：お互いが向き合い両手をつなぐ。つないだ手を左右に振る。「1.2.3」のリズムで「3」の時大きく腕を振り頭上につないだ手がきたら身体を 1 回転ひねり元のポジションに戻る。初めはお互いに声を掛け合っているが、できるようになったら無言で相手の気配を感じて回転のタイミングをつかむ。

○手押し相撲：向き合って立つ。手のひらを合わせて押し相撲をする。床についている足が動いたら負け。

- 尻相撲：背中合わせで尻を合わせてタイミングよく押し出す。床に着いた足が動いたら負け。
- 両手をつないで立つ：向き合ってひざを立てて座る。両手をつなぎタイミングを合わせて2人同時に立つ。できたら次は無言でやってみる。
- 背中合わせで立つ：背中合わせで座りお互いの腕を組む。タイミングを合わせて立つ。できたら次は無言でやってみる。腕を離して背中だけをつけた状態でタイミングを合わせて立つ。できたら次は無言でやってみる。

(2) ~になる

人の動きを真似したり、連想して動いたり、表したりして活動する。2人組から多人数の集団へとかかわりを次第に広げていく。

① 人と影

- 2人組で、前で動く「人」と後ろで前の人の動作を真似する「影」の役割を決める。「人」役が後ろを向いたら「影」役と交代する。はじめは「歩く」「転がる」など動きを指導者が指示するが慣れてきたら「人」役に任せる。動きが単調になってきたら「影が真似しにくい動きをしてみよう！」等のアドバイスをするとよい。
- ②なんちゃって縄跳び(エア縄跳び)縄のない状態で縄があるように想像して縄跳びをする。
- ひとり縄跳び：両手で縄を持っている状態になり、リズムよく連続ジャンプをしてみる。交差跳び、片足跳び、二重跳びなど跳び方をいろいろ工夫してみる。
- 大縄跳び：持ち手2名が長縄を持つように向き合う。タイミングを合わせて縄をイメージして腕を回す。持ち手以外の人は縄をとぶ動作で持ち手の間を移動する。縄に入る→跳ぶ→縄から出る、縄に入りすぐ出る、縄に入り跳ぶ→次々中に入り全員で跳ぶ等いろいろな跳び方を工夫する。持ち手役、跳ぶ役両方を体験してみる。

③ジェスチャー

- 順番にジェスチャーをする役になり、ほかの人がそれを当てる。お題はあらかじめ紙に書いて準備しておく。難しいもの、やりにくいお題はパスしてよい。ジェスチャーする人は無言で動作だけで伝える。ゲーム後に、うまく伝わった動き、楽しかった動き、盛り上がった動きなどを全体であげてみる。

(例：サッカー・水泳・富士山・ラーメン・自転車・サル・ゾウ・ハワイ・雪合戦等)

(3) 振り返り

- 2人組で：ウォーミングアップをした2人組で今日の授業を振り返りお互いに感想を話す。うまくいったこと、楽しかったこと、恥ずかしかったこと等。
- 全体で：「人と影」「ジェスチャー」での自分を振り返る。①前で動いたりジェスチャーしたりする等操る立場がやりやすかった。②「影」やジェスチャーで答えるほうがやりやすかった。
- ① ②を挙手して確認してみる。
- 振り返り：個人の振り返りや感想を記入する。

<授業の様子>

子どもたちにとっては、今まで経験したことのない授業である。相談教室の生活では子どもたち同士のかかわりは教師を介して行われることが多く、自分たちで相談して行動するという機会は少ない状況である。2人組のウォーミングアップも始めは戸惑いの表情を見せていたが、「手押し相撲」「尻相撲」では歓声が上がリ笑顔も見られるようになり、場の空気が和らいだ。「ジェスチャー」の場面では、お題が正解すると自然に拍手が起こり、演者は笑顔になっていた。2人組の振り返りもそれぞれのペアが笑顔で話し合いができていた。女性教員は、日頃自己中心的な面が見られる中3男子とのペアを組んだ。「尻相撲」では力任せに動くのではなく、相手の動きに合わせて力を加減してくれたと彼の新たな一面に気づくことができたと言っている。

日常なかなか見せない笑顔や子ども同士が積極的にかかわろうとする姿を見ることができた教員側の気づきも大きかったといえよう。当日は雪の降る寒い日であったが、子どもたちの熱気で教室の窓が白く曇るほどであった。

<振り返り用紙から一授業の感想一>

○今日の活動はどうでしたか？

楽しかった(全員) その理由

- ・久しぶりに体を動かした。
- ・2人で協力してやるのが楽しかった。
- ・普段は話しかしない人と違うことができた

- ・真似や真似されることが仲良くできた。

○感想

- ・ジェスチャーをやるのが難しかったけど、人のを当てるのは楽しかった。身体だけの動作は、わかりづらいなあと思った。
- ・みんなと楽しく色々なことができてよかった。ジェスチャーゲームでは恥ずかしがりながらもしっかりしているところが良かったと思う。次回が楽しみ。
- ・色々なゲームができてよかった。人をまねるのはちょっと大変だった。
- ・かかわることができてよかった。
- ・みんなの笑顔が一杯だった。またやりたい。
- ・ジェスチャーゲームでみんなが難しいやつを分かり易く伝えるために頑張っていた。

2) 第2回授業(12月5日)場所:体育館

<ねらい>集団での活動を通し人と触合う楽しさを味わう。

(1) ランニング

体育館のフロアに引かれたラインを踏まずに個々に自由に走る。ぶつからないように相手との距離感やスピードを考える。

(2) 2人組のウォーミングアップ

○第1回の授業で行ったものと同じ。

- ・パートナーは前回と変える。
- 組み方は、指導者の指示。

(2) 集団遊び

○人間知恵の輪

- ・全員で小さい一重円をつくり内側を向き、隣の人以外の人と手をつなぐ。
- ・手を離さずに移動して内向き（または外向き）の一重円に戻す。

(3) 振り返り ○振り返り用紙で

<授業の様子>

2回目の授業で、場所も広い体育館になったこともあり前回より緊張感はなかったようである。2人組のウォーミングアップも前回とペアを変えて行うことで、同じ動きでも相手によって変わること気づくことをねらいとした。

今回は、2人組から全体で動ける教材を準備し

ていたが「人間知恵の輪」がなかなか解けず円にもどれなかった。何度かチャレンジするものの成功しないので、次へ進もうとしたところ子どもたちの方から「成功するまでやりたい!」という声が上がった。予定を変更して続けることにした。はじめはバラバラに動いていたが、次第に「ここをくぐって」「からだねじって」などと子どもたちの積極的な指示の声が増えてくるようになり時間はかかったが、最後に一重円にもどすことができた。教員も子どもたちの輪の中に交じって参加することで場の共有ができたと思われる。

<振り返り用紙から一授業の感想ー>

○感想

- ・最初はほどけるの?と置いていたけど最終的にごちなくほどけてよかった。
- ・人間知恵の輪が難しかった。
- ・みんな協力して解くことができた。すごくおもしろかった。
- ・みんな協力してよかった。いろいろあったけど最後までやり遂げることができた。

4. おわりに

表現することや人とのかかわりが苦手な子どもたちを対象に、体ほぐしから表現活動へと取り組みやすい教材を提示し、2回の授業を实践した。子どもたちの感想や、参加した教員の様子から、今回の活動は、表現活動の導入として子どもたちが「何をしてもよい」という安心安全な場づくりに有効であったといえる。

また、活動は子どもたちのつぶやきや様子を観察していくと、必ずしも準備したプログラム通りには進まない場合もある。その時々でその場に合わなければカットする、大切なときは時間をかけるといった発想も指導者には必要である。

今後は、一歩進んで表現活動につなげていく授業に発展させていきたいと考えている。

今回の対象者は、相談教室という特別な環境の児童生徒であったが、普通学級の児童生徒の中にも自己表現や他者とのかかわりが苦手な子どもも少なくない。そんな子どもたちが笑顔で取り組める授業づくりを目指していきたいものである。

5. 編集・構成から創作ダンスを考える:かかわる動きをメインに

湘北短期大学 小笠原大輔

I はじめに

ダンス作品の構成要素は主にテーマや振付、隊形、構成、音響などであり、さらに舞台上での演技であれば場合によっては衣装・小道具、照明なども必要となってくる。ダンスを専門としない一般学生や生徒にとって、ダンス作品を創る際に全てゼロから作ることは非常に困難である。またダンス・表現運動では身体を存分に駆使し、自分そして仲間の動きの個性や可能性に気づくことが望まれるが、実際の体育授業における創作ダンスでは、せっかく体育館などの広い空間を使用できるのにもかかわらず、座り込んでテーマについて考え込む時間があまりにも長過ぎたり、さらにひどい時には他者が行っているダンスの振付をコピーしようと皆で集まってうずくまり、スマートフォンの小さな画面を必死に覗き込んだりする姿を見ることも少なくない。ダンス作品の創作過程は振付家・演出家により様々であることに鑑みれば、授業内でも同様に、振付やテーマを考えるのはさておき、音楽や小道具・衣装などをきっかけに作り始めてもよいわけである。体育の授業内で扱うのであれば、何かしらの動きをいくつか繋げてみて、「これって〇〇みたいに見えるから、テーマはこれにしよう」とテーマを後付けに決めるのもよい。

そこで今回は振付を考え、そして覚える・練習するという工程を極力少なくし、既に知っている・できる動きを用いて、そこにひと手間加えて工夫すること、隊形や構成を考える面白さを味わうことに重点を置いた創作法を用いた授業モデルを紹介する。むろん新しい動きもいくつか出てくるが、そのほとんどがペアで動きのやり取りをしながら行うため、目的を伴った動作であることが多く、どちらかが次の動きを忘れてしまったり上手にできなかつたりしたとしても、前後の意味のある繋がりから次に行うべき動きを想起しやすい

ものとなる。対象は主に大学生（中学生以上も可）とし、授業時間は90分を目安とするが、授業時間に応じて内容を選択できるよう構成してある（具体的な選択の仕方は後述する）。

II 内容

1. 導入・ウォーミングアップ

【1】ハイ・ロータッチ その①

本内容は全てペアで行うため、はじめからペアを組む。しかし、いきなり教師が「ペアを組みましょう」と指示を出しても、集団によっては全員がペアを組むまでに時間がかかったり、いつも同じ相手と組んでしまったりすることも少なくない。そのため、この活動から入り、自然にシャッフルされ自動的にペアができるようにする。

1) ハイタッチ

うろうろ歩き回り、すれ違う人とハイタッチをする。

<ポイント>

○右手でも左手でも行う。一人に対して左右両方向から二人が同時にすれ違う場合は、一人は両手を同時に挙げることになる。

<発展>

○「笑顔で挨拶するように」や「敢えて表情を変えずに、目も合わさずクールに」など“〇〇バージョン”というようにアレンジすることで表現の面白さも体験できる。半分に分かれて見せ合うのもよい。

2) ハイ・ロータッチ (図1)

腕を高く伸ばしてハイタッチした後、前方から腕伸ばしクロールの要領で振り下ろしてきた手をそのまま互いにすれ違いざまに下でもタッチする。



図1 ハイ・ロータッチ

<ポイント>

○下でもタイミングよくパチンと手の平が合うためには、互いの歩くスピード調節×腕のスピード調節の二重の調節が必要となるため、やや難易度が上がるが、その分できた時には心地よい爽快感と達成感が得られる。もちろん教師は先にスピード調節などのヒントは与えずに、受講者が「うまくできない」を体験し、自ら考え、動きのタイミングやスピードを修正したのちに「成功する」という経験を保証する必要がある。

<留意点>

ハイタッチ、ハイ・ロータッチ共に広すぎる空間だとすれ違いの頻度が少なくなってしまうため、人数に応じてある程度範囲を決めておくとよい。



図2 開脚



図3 胸開き



図4 背中乗せ&回し

<展開>

最後にタッチした者もしくは近くにいる者同士でペアを組み次の活動へ移る。次の活動では、身体接触度が比較的高いものになるため、集団によっては男女で行いにくい場合もある。その際は、近くの男女ペアと組み4人になってから男2人女2人に分かれればよい

【2】ペアストレッチ各種

以下いくつか挙げるが、もちろんこの限りではない。

1) 開脚 (図2)

向かい合わせで開脚して座り、お互い手を繋いで交互に20秒程度引き合う。

<ポイント>

○手を引っ張ってもらいながら、自らも前方に上体を倒して相手を押すイメージで行うとよい。

2) 胸開き (図3)

一方は胡坐をして、両手を頭の後ろでしっかりと組む。パートナーは自分の両腕を相手の頭と腕で作られた隙間に前から入れ込み、肩甲骨あたりに手の平を添える。そのまま膝を曲げていきながら、手の平で相手の背中を押していく。

<留意点>

パートナーが痛がっていないか注意しながら行う。特に肩関節の脱臼歴のあるものは要注意である。

3) 背中乗せ&回し (図4)

二人とも背中合わせに立ち、両腕を拳上する。一方がパートナーの手首を掴み、前屈しながら背中に乗せる。安定したら掴んでいた手を放し、そのまま軽く浅く膝の屈伸を繰り返して小刻みに振動を与える。次に振動は止め、そのままパートナー



図5 体側伸ばし



図6 肩押し&捻じり



図7 「ゆか気をつけ」

を落とさないように注意しながら時計回りに一周してみる。

<ポイント>

○相手の体重をしっかりと自分の背中で支えられるようにするために自分の尻を相手の尻よりも低い位置にしてから持ち上げなくてはならない。

4) 体側伸ばし (図5)

両手を繋ぎ引っ張り合う。互い違いに表裏になることで、前屈みになるのを防ぎ、より体側が伸びやすくなる。

<ポイント>

○「上の腕は耳よりも後ろ」「顎を引いて覗き込むように少し顔を前に出す」と声掛けすると、さらに伸びてよい。
○逆側を行う際は互いに手は離さずに、ひっくり返るようにすると少し楽しい。

5) 肩押し&捻じり (図6)

普通に組むと肩のつもりでも上腕近位を押さえるだけになり、肩および胸の筋肉が十分ストレッチされないため、相手の肩の方へ手の平を深く入れ込むとよい。その後は捻じるが、その際「上体を捻じって壁を見ましょう」と促すとよい。

<ポイント>

○上体を捻じる際には首だけにならないよう「顔だけではなくおへそも」と付け加えるとさらによい。

【3】ジャンケンゆか気をつけ

ペアでジャンケンをして、負けた方は瞬時に図7の姿勢「ゆか気をつけ」をとる。通常のうつ伏せ寝とは以下の点で異なる。

①顔面は体の正面と同じ（鼻が床の方向）。

②上肢は体側に沿い、中指はズボンの縫い目に合わせる。

③足関節は背屈し、指を立てる。

<ポイント>

○うつ伏せとはいえ、「寝ている」や「倒れている」「死んでいる」という意味を持たないポーズとなる。即ち、「自らの意思を持ち、積極的にこの姿勢をとっている」姿である。「寝ている」などとは似て非なる姿勢であり、日常生活ではまず行わない「非記号的な表現」となる。

<展開>

○勝った方は瞬時にそれ以外の姿勢を即興でとる。これにより敏捷性および瞬発的な即興表現力が養われる。もちろんこの姿勢自体に意味があっても無くてもよい。「ゆか気をつけ」をしている者とかかわる姿勢でも、無関係の姿勢でもよい。見る側としては前者の場合、納得を楽しむことになるし、後者の場合は偶発性や違和感、ナンセンスを楽しむことになる。

【4】てのひらスキップ

全員で輪になって行う。手を“繋ぐ”のではなく、手の平を“合わせる”ことで「いつでも離すことができるが、意思を持ってくっついている」という関係ができるので、こちらの方が面白い（お互い離れないように意識するあまり、つい相手の手を握ってしまったり、親指を絡めてしまったりしがちである）。ウォーミングアップとして直線往復型で行うよりも、円で行った方が一体感が生まれる。また、見る一見られる関係もこの時点で起こることから、「見られる」という要素のある主活動への導入としても有効である。

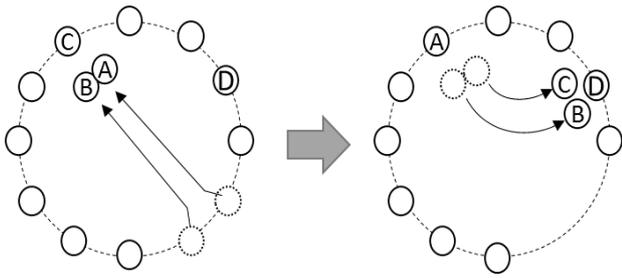


図8 「てのひらスキップ」における
入れ替わりの模式図

<方法>

全員で作った内向きの輪の中で、まず任意の2人AとBが横並びで手の平を合わせたままスキップして適当な所を目指して進む。到着した先にいたCが今度はBと共に行きたい方向にスキップで進む。このときAはCのいた場所に留まることになる(図8)。同じ要領で、次はCとDが組み、BはDのいた場所に留まる。これをくり返す。

<ポイント>

○相手の微妙な力加減で、進行方向を察したり、わざと押し合ったりできるので、その関係を見るのも面白い。

<発展>

○両手の平を合わせて、前後の位置関係になって進んでみる(図9)。さらには、前の者が閉眼で行ったり、後ろの者が閉眼で行ったりする。それにより、「押してもらおう」のか「手が離れないようについていく」のか察知の仕方と力加減が異なってくるので、その違いを楽しむのもよい。

○ギャロップで行う。その際には合わせた両手は窓掃除をするように外回し→内回し→外回し…と大きく回しながら進んでいくと、より楽しく



図9 「手の平スキップ」
前後の位置。

行うことができる。

○人数が多い時は、一度に2、3ペア同時に行う。激突の恐れもあるため、スリルが増すとともに、より視野を広く持とうと意識することができる。他のペアとの衝突を避けるためには進行方向を左右どちらかにその都度軌道修正しなければならないが、その際手を押すのか、はたまた引くのか、その判断をしながらも相手の意志も汲み取る必要があるので、難易度が上がり、白熱する。

<展開>

最終的にできた輪の状態から、隣同士で新たなペアになり、次の活動へ移る。

2. カポエイラの動きから

ブラジルの伝統武芸であるカポエイラの動きを取り入れ、動きのやり取りを楽しむ。授業目的上、本格的な技能および攻防を用いる必要はないと考えるが、「カポエイラは相手と呼吸を合わせ、調和を重んじ、相手との動きのやり取りを楽しむことこそが最も重要である」とされていることから、多様な動きの獲得や仲間とのコミュニケーションという観点から見て、ダンス・表現運動領域では十二分に利用できる教材である。

【1】ジンガ (図10)

カポエイラの基本ステップである。相手と呼吸を合わせて、リラックスしてゆったり大きく動く。

【2】ガロパンチ (平手打ち) (図11)

1) くぐり避け (図11)

ジンガの流れの中で、相手に対してゆっくりガロパンチ、即ち平手打ちをする。それに対して、パートナーはくぐるように避ける。双方またジンガに戻り、ジンガ～ガロパンチを繰り返す。



図10 ジンガ

<展開>

くぐって避けずに、「やられたー」というように大袈裟な表現をし、擬似的に相手のガロパンチを受けて床に倒れ込む。ただ倒れるだけだと平凡なため、「ゆか気をつけ」で終わると面白くてよい。

2) 逆くぐり抜け (図 12)

次に少し複雑な避け方をする。バスケットボールのピボットに似ているが、右に避けようとした際に、右足を一步右に出すのではなく、相手に背を向けながら左足を一步右に出す。その後頭を低くしながら(避けながら)、右足を斜め後方(相手の右側)に引き、左足を大きく時計回りに回しながら相手の右脇をすり抜ける。この動きは視界が大きく変化するため進行方向の認識が少々難しい。従ってまずは歩きのみで方向を確かめてから行うとよい。

<展開>

さらにそこから、相手の裏に回り込んだ後にキック(擬似的に相手を蹴る動き)をして、足先で相手の体のどこかに触れる。触れられた側は、それをきっかけに倒れ込み、「ゆか気をつけ」で終わる(図 13)。

<ポイント>

- パートナーをチェンジし、リズムや間の違いを楽しむ。
- とにかく主動する腕の方のみに意識が向きがちであるが、攻撃していない側の腕を意識して動か



図 11 ガロパンチとくぐり避け



図 12 逆くぐり抜け



図 13 キックとゆか気をつけ

すことで動きがより大きくなり、ダイナミックな表現に繋がる。また攻撃のモーションに入る際に、表情や呼吸をオーバーに行えばお互いに呼吸や動きなどを合わせやすくなる。

3. スポーツなどのマイナー動作を抽出する

—非記号化への導入—

ダンス・表現運動の教材としてスポーツの動きやワンシーンを表現するものがある。動きを新しく作り出すことは初心者には難しいが、日常動作を思い出して行うのであれば、それほど難しくはない。とりわけスポーツは、その動きが大きく、かつ分かりやすいことから、表現の入り口としては非常に扱いやすい教材として多用されている。このスポーツの動きであるが、主に出現する動きはサッカーやバスケットボールのシュートの動き及びディフェンスの構え、野球のバッターやピッチャーの構えや動きといったように、見てすぐに何をしているのかが伝わるものが多いが、このような表現は記号的な表現といわれている。

一方、ここで紹介するのは、同じスポーツの動きでも一見しただけでは何をしているのか分からない、説明を聞いて初めて「なるほど」と納得できる動きである。先に挙げた記号的な表現は言うな



図 14 マイナー動作の例①。ソフトテニス部のマイナー動作。ボールに空気を入れている様子。

れば、そのスポーツのメジャー動作であるのに対し、ここで行うのはそのスポーツを専門としている者なら誰でも理解できるが、それ以外の者は理解できないという意味でマイナー動作といえる。彼ら同士の中ならば「あるある!」「やるやる!」とすぐにピンとくる動きというわけである(図 14)。このように当事者にとってみればマイナー動作とはいえ記号的な表現であることには変わらないわけであるが、彼ら以外の多くの者にとってみれば、非記号的な表現として受け止められる。その結果、説明的でない動きだからこそ、そこに「観る側が自由に想像する」という楽しみが加わることになる。この教材はこれまで様々なワークショップで行っているが、通称「部活あるある」としてどこでも大変盛り上がる教材である。

またスポーツ以外の動きももちろん活用できる。吹奏楽部や書道部など所属する部活動や習い事などでの所作で、当事者のみぞ知るマイナー動作を抽出すればよい(図 15)。

<ポイント>

○逆に当事者だからこそ「当たり前過ぎて思い浮



図 15 マイナー動作の例②。合唱部。高い音程をとる時の動き。

かばない」ということも少なくない。そういった場合には他者に一連の動きを見てもらい、他者により「それ、何しているの」と質問された動きを取り上げるという方法も有効である。

<展開>

マイナー動作に入る前に、わざわざ大げさな前置き動作(遠回り動作)をしてから行うことでひと流れの動きとなったり、表現としての面白みが増したりする。コツとしては、体の向きや高さなどをわざと正反対の位置から始めてみるとよい。

4. ハイ・ロータッチ その②

ハイ・ロータッチその①の続きである。ロータッチの後、手の平を合わせたまま離さずに、互いに体ごと振り返り対面する(肘を下におろすように意識して行くとやりやすい)(図 16の1~4)。右手で行った場合、そこからさらに、手遊びの要領で左手→右手→左手の順で互い



図 16 ハイ・ロータッチ その②

に手の平を合わせ（図 16 の 5）、左手を合わせたまま一旦拳上した後（図 16 の 6）、左手を合わせたまま、その接点を頼りに反時計回りに手の平を回転しつつ下ろしていく。その動作に並行して二人の中心を軸として時計回りに体を回転させながら位置を入れ替え、最終的に互いに左手首を掴んで体重を後方にかけてながらバランスを保って静止する（図 16 の 7）。その後、互いに左腕を引っ張っておいて、反動を使って前方にジャンプしてすれ違う（図 16 の 8）。

<展開>

さらに、これら一連の動きの後に、前掲「3. カポエイラの動きから」の【2】ガロパンチ→2）逆くぐり抜け～<展開>（図 12～図 13）に繋げてみる。

先の一連の動きでジャンプして場所が入れ替わったら、一方は振り向いてガロパンチを出す。この際、ジャンプで二人の距離が離れている場合には、大きく一步相手側に出して近づいてからガロパンチを出す。相手はそれに対して逆くぐり抜けをする。以降は<展開>に繋げる。ここでも最後は「ゆか気をつけ」で終わるとよい。

さらに、この後、蹴って倒した側は先述のマイナー動作を相手に向かって行う（図 16→図 12→図 13→図 17 と繋げる）。

5. 真剣白羽取りダンス

ペアで行うゲームのようなダンス。一方は切り手となり、もう一方が受け手となる。役柄がはっきりしていた方が解りやすくイメージもしやすいため、切り手は「弟子」とし、受け手は「師匠」とする。軽快でノリやすい音楽と、簡単で大きく動きやすい振付により、大いに盛り上がるダンスである。曲自体は1分強しかないが、思いのほか息が上がるため、心地よい疲労感も相まってかな



図 17 マイナー動作の例③。ボーリングのエア吹き出し口に手を差し出している様子。

りの達成感が得られるようである。

使用曲：『La Bella Ciao』（Pascal Comelade）

<方法>

- ①はじめに、全員で切り手（弟子）の動きを覚える。お姫様っぽく行進しシンバルの音に合わせて頭上で両手を合わせて3回切る動きをする。また行進し、音に合わせて丁寧なお辞儀をしてから切り付ける（図 18）。
- ②次に、受け手（師匠）の動きを覚える。気怠い様子でリズムに合わせて手拍子をする。音に合わせて気怠い感じで両手を合わせて3回切る動きをする。また気怠い感じで手拍子をし、音に合わせて丁寧なお辞儀をしてから切り込んで来る弟子に対し、真剣白羽取りを行うが、挟めない。
- ③真剣白羽取りは失敗したため、師匠は失脚。下剋上となり、役柄をチェンジする。
- ④この①～③を5回繰り返す、最後は見事真剣白羽取りが成功する。師匠は弟子の手刀を挟んだまま、左右どちらかに受け流す。弟子は身を任せて倒れ込む。

<展開>

弟子は最後にただ単に倒れ込んで終わるのではなく、これまで何度も出てきた「ゆか気をつけ」をここでも行う。師匠の方も投げ飛ばして終わりではなく、そこから、先述の「ハイ・ロータッチその②」同様、マイナー動作を相手に向かって行う（図 17）。

<発展>

- お姫様らしさや力強さにも個性が発揮されるが、更にそこから発展して個々で歩き方や切り方を工夫することで、表現の可能性が広がる。



図 18 真剣白羽取りダンス。上手に挟めるかな？



図 19 全員で真剣白羽取りダンス。

○ペアで行うダンスであるが、そのペアを繰り返しの5回とも固定で行うのもよいが、その都度ペアを組み替える、即ち下剋上の際に、師匠から弟子に落ちた者は行進しながら今度は別の師匠を探し挑戦しに行くというようにすれば、移動のバリエーションが増え、豊かな構成展開ともなり得る(図19)。

○上記のように即興で相手を替えていくだけでも楽しいが、そこに創作の要素を入れるのであれば、構成を整えるのにある程度の時間を費やさなければならないため、1チーム4ペアほどで組んで行うとよい。そのチーム内で隊形やペアの組み替え方、移動の方法、始まり方や終わり方などを工夫する。出来上がったら、発表会を行うのもよい。音楽と振付、役柄などは共通しているため、各チームがどこをどのように工夫したかが一目瞭然である。

6. まとめ—繋げて踊る—

今回の内容をいくつか繋げて、ひと流れのダンスを行う。

表1の1から5までを繋げて行うが、授業時間

表1 各活動を繋げて、ひと流れのダンスにする。

活 動	図	備 考
1 「ハイ・ロータッチ(その①、その②)」	図16	体の面(向き)を変えることを意識して行くと、動きの奥行きが出てよい。
2 「カポエイラの動きから」	図12→図13	ゆっくり大きく動くとよい。
3 「ゆか気をつけ」&「スポーツなどのマイナー動作」	図17	遠回り動作をしてから行う。
4 真剣白羽取り	図18、図19	「ゆか気をつけ」している者が師匠、マイナー動作をしている者が弟子でスタートする。
5 「ゆか気をつけ」&「スポーツなどのマイナー動作」	図12→図13	先に弟子でスタートした者が「ゆか気をつけ」になって終わる。

や発達段階により活動を取捨選択することができる。例えば内容を少なくするのであれば、2のカポエイラの動きの中の「逆くぐり抜け」は割愛する。この動きは先述したとおり視界が大きく変化するため進行方向の認識が少々難しい。そこで、ガロパンチ(平手打ち)に対して、「逆くぐり抜け」はせずに、「くぐり避け」<展開>で紹介したように、そのまま疑似的にその攻撃を受け、倒されて3「ゆか気をつけ」に繋げてしまうことも可能である。また授業モデルとしては1から3までを1回の授業内で行ったり、もしくは別個に毎回の授業冒頭の準備体操として行ったりした後、4以降を次の授業で行い、最終的に1から5までを繋げるという展開の仕方でもよい。

<展開>

いくつかのペアでグループを作り、隊形・方向などを工夫する。さらに1のハイ・ロータッチの前にグループごとオリジナルの始まりのシーンを挿入してみてもよい。

<発展>

○例えば、あるシーンでは一人だけが師匠でその他全員が弟子といった具合に、役柄を対にせず人数比を不均等にしてみたりするのもよい。

III 受講者の様子—受講後アンケートより—

2016年12月に開催された日本教育大学協会保健体育・保健研究部門舞踊研究会第36回全国創作舞踊研究発表会(岐阜大会)において、今回紹介した内容とほぼ同じ内容で構成されたワークシ

ヨップを行った。ワークショップ終了後に参加者である大学生 63 名を対象に、活動内容に関するアンケート調査を行った。以下に概要を述べる。

【1】属性 (表 2)

女子が約 7 割、ダンスを専門とする者が約 7 割であった。また約 6 割が教員志望であった。

【2】各活動は楽しかったか (図 20)

各活動に対して「とても楽しかった」「まあまあ楽しかった」「あまり楽しくなかった」「全然楽しくなかった」の 4 件法で回答してもらった。

「とても楽しかった」と「まあまあ楽しかった」を併合し肯定的な回答として「楽しかった」とすると、「ハイ・ロータッチ」では 98.4%、「カポエイラの動き」では 95.2%、「スポーツなどのマイナー動作」では 100%、「ゆか気をつけ」では 98.4%、「真剣白羽取りダンス」では 98.4%の者が「楽しかった」と回答していることから、ほぼ全員がこれらのダンスを楽しんでいることがわかった。

【3】どんな力が身についた (身につきそうだと思うか) (図 21)

全活動を通して 10 項目に関して力がついた (つきそうだ) と思うかという問いに対して「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の 4 件法で回

答してもらった。「とてもそう思う」と「まあまあそう思う」を併合し肯定的な回答として「そう思う」とすると、「表現力」に関しては 93.6%、「コミュニケーション力」に関しては 98.4%、「想像力・発想力」に関しては 96.8%、「筋力」に関しては 73.0%、「柔軟性」に関しては 57.1%、「リズム感」に関しては 88.9%、「バランス感覚」に関しては 77.8%、「敏捷性」に関しては 85.7%、「護身」に関しては 68.3%、「ダンスの動きのバリエーション」に関しては 96.8%の者が「そう思う」と回答している。ダンス・表現運動を行う際に特に必要であり、かつそれを行うことで養われることが期待される「表現力」「コミュニケーション力」「想像力・発想力」に関して 9 割以上の者が身についたと回答していることから、本活動はダンス・表現運動の教材として有効であると示唆された。また、「ダンスの動きのバリエーション」に関してもほぼ全員が身についたと回答していることから、既に知っている・できる動きであっても(「ゆか気をつけ」や「カポエイラの動き」のように普段やらない新しい動きもいくつか体験してもらったが、割合としては小さい)、組み合わせたりアレンジしたりするなど、工夫をすることで新たな動きの発見に繋がるということも示唆された。

表2 受講者の属性

性別	人数	%	専門種目	人数	%	教員志望かどうか	人数	%
男	16	(25.4)	ダンス (バレエ、モダンダンス、よさこい)	46	(73.0)	幼稚園 (保育士含む)	3	(4.8)
女	47	(74.6)				バレーボール	4	(6.3)
学年			テニス	3	(4.8)	中学校	7	(11.1)
1年生	15	(23.8)	野球	2	(3.2)	高校	8	(12.7)
2年生	23	(36.5)	新体操	2	(3.2)	それ以上	1	(1.6)
3年生	18	(28.6)	陸上競技	1	(1.6)	いいえ	18	(28.6)
4年生	6	(9.5)	水泳	1	(1.6)	未定	9	(14.3)
大学院生	0	(0.0)	バスケットボール	1	(1.6)			
教員	1	(1.6)	特になし	3	(4.8)			
その他	0	(0.0)						

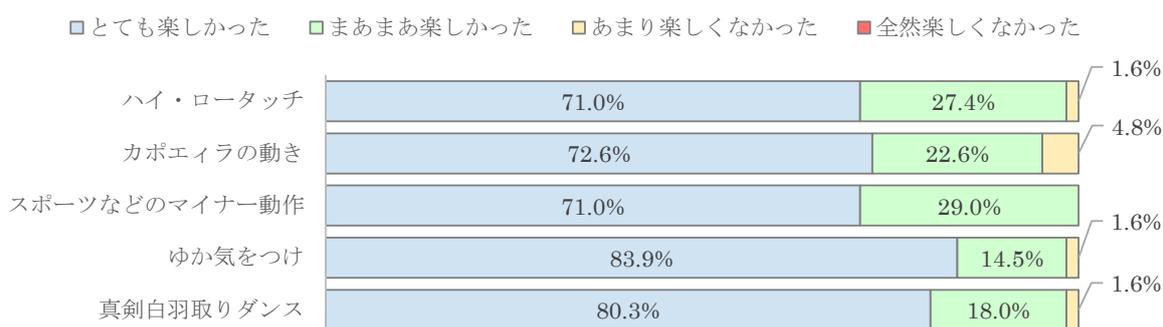


図 20 各活動は楽しかったか

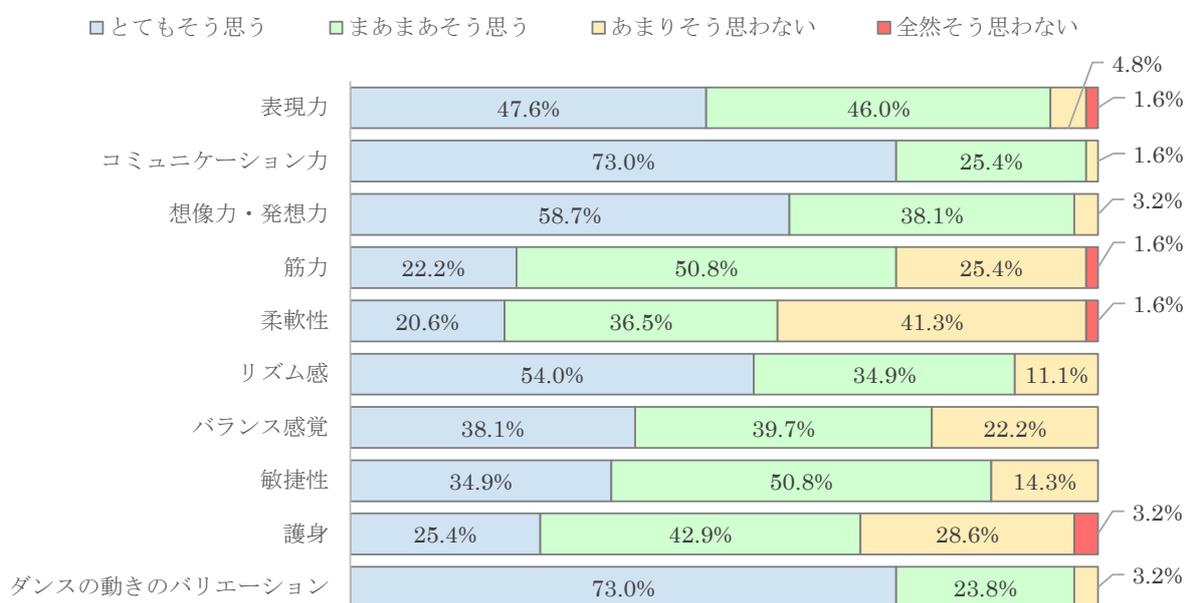


図 21 どんな力が身についた（身につきそうだ）と思うか

さらに「あまりそう思わない」と「全然そう思わない」を併合し否定的な回答として「そう思わない」とし、「そう思う」と「そう思わない」で JavaScript - STAR2012 を用い、直接確率計算 1 × 2 により 10 項目について各々回答の有意差をみると、「柔軟性」を除く 9 項目で有意差が認められ、「そう思う」と回答した者の方が多いということが明らかになった。「柔軟性」に関しては「そう思う」と回答している者と「そう思わない」と回答している者との人数に有意な差がないことから、今回扱ったダンスでは柔軟性を必要とせずに行うことができたとも捉えられることができる。そのため「自分は体が硬いからダンスは

苦手」という先入観を抱かずに済むのではないかと期待できる。

【4】 今回の内容は教育現場（授業や課外活動など）でも使えそうだと思うか

「はい」95.2%、「いいえ」0%、「わからない」4.8%であった。ほとんどの者が今回の内容を学校で行かせると感じていることが明らかになった。

また、そう思った理由（表 3）をみると、「誰でもできる動きを工夫できる」「楽しい動きからスムーズに表現に繋げる」「動きながら楽しくコミュニケーションが取れる」「準備運動やアイス

表3 教育現場でも活用できると思う理由（抜粋）

- ・ 未経験でもやりやすい。想像しやすいので動きにしやすい。
- ・ 他者と関わり合いながら運動をする点
- ・ カポエイラを通じた身体的コミュニケーションや律動的なステップなど
- ・ 子供たちと体の運動として、楽しく動くことが出来そうだったから。
- ・ 仲良くなれる。自分の殻から抜け出せる。
- ・ 楽しいのでみんな真剣に取り組むと思うから。
- ・ 誰でもできる動きが多かったから。また、2人組でやる動きが多く、友達とのコミュニケーション学習ができると思ったから。
- ・ 最後のダンスにもっていくまでの流れの良さ、師匠と弟子というかんたんな役割設定と楽しさ
- ・ 自分達が普段やっているダンスとは違い、自分で思考して工夫した動作を考えることに教育的意義があると思うから。
- ・ 楽しくダンスに取り組めるから。
- ・ 子供たちが楽しくコミュニケーションをとりつつ、カポエイラの動きを通して体の使い方などを学ぶことが出来ると思います。
- ・ 他者とのコミュニケーションを大切にしており、表現の技能、カポエイラの本質を学びながら、楽しく踊ることができると思ったからです。
- ・ やっていったところを繋げていく点
- ・ おもしろく誰でもできる点
- ・ みんなで楽しんでいろんな人と関わることかできそう。
- ・ 変な動き(良い意味で)を真剣にやるのは恥ずかしさもあるが、思春期の子どもたちのなかで流行ったりすることもある。上手く生徒の心を掴めれば、表現運動の苦手意識を払拭する良い教材になると思った。
- ・ 誰でも興味をもって取り組みそう、モノの見方の発見につながりそう
- ・ 面白い点。シュールな動作で、万人受けする。
- ・ 体を全力で使い、仲間と楽しく踊る点。
- ・ 楽しくて、ダンスを続けるのにいいきっかけになりそうだったため。
- ・ なにより自分が楽しめたから。
- ・ 体作りが楽しくできそうだから。
- ・ 講義自体のテンポがよく、効率的な進め方の参考になった。
- ・ どんなバックグラウンドを持った人でもできるからいいと思いました。
- ・ 楽しみながらカポエイラに触れることができ、表現が苦手な子、スポーツが苦手な子も比較的取り組みやすいと思ったから
- ・ 全身を使う点で、準備運動に。また、ハイタッチのところはアイスブレイクで使えそうだと思います。
- ・ ダンスの動きという言葉の先入観を柔らかくしてくれるものだと思います。また、真剣白刃取りダンスは勿論、攻防の動きをもっと自由にしてあげれば子どもが楽しんでやってくれそう。
- ・ 誰でもコミュニケーションを楽しくとれる
- ・ とても面白い内容であるし、表現力やコミュニケーション力の向上にも役立つと感じたため
- ・ ゆか気をつけなど、シンプルで誰でもできるけど意外ときちとした形が重要なところ、いろんな動きの延長として使えるところ、が生かせそうだと思います。
- ・ いろんな年齢、性別関係なく楽しめるため。
- ・ 特にコミュニケーション能力が上がると思ったし、心の通じ合いを直に感じました。
- ・ 誰でもできる動きだけど独創性にあふれていて、非日常的で楽しいから
- ・ 技術に関係なく、誰もが楽しくできると感じたから。
- ・ スポーツマイナー動作に至っては、それぞれが行なっている専門種目について自信と誇りを持って行える上に、実際の動きの定型があるところから表現に繋げていけるため、とっつきやすく没入しやすいと感じます。
- ・ 仲間と関わり合いながら体を動かすことの楽しさを味わえる点。
- ・ カポエイラなど型の決まった動きでも工夫一つでダンスとして取り入れたり面白い動きを作り出したりできる点。動きの新しいバリエーションとして提案したり、ダンスの雰囲気を変えたりするときにも使えるよう子どもたちに伝えたい。また、学年が変わったばかりの時など、クラスの仲を深めるときにも使いたいと思った。

表4 全体を通しての感想（抜粋）

- ・ とても楽しかったです！
- ・ 最後の師匠と弟子は、帰ってからもみんなでやりたいです！！ありがとうございました！
- ・ とても面白かったです！ありがとうございました。
- ・ カポエイラというものを初めて知り、初めてやりましたが、創作ダンスにつながるような動きがたくさんあって、とても勉強になった上とにかく楽しかったです！ゆか気をつけのような、インパクトのあるポーズを作品の中に繰り返し登場させるという手法がすごく面白いなと思いました。これからの創作活動に活かしていきたいと思います。
- ・ お忙しい中、素敵なワークショップをありがとうございました。2年前に先生のワークショップを受けたことがあるのですが、その時の感覚を少し思い出して自分の変化を楽しみながらとりくむことができました。真剣白刃取りダンスは教育実習などで取り入れられたら面白そうだなと思いました。
- ・ 格闘技・スポーツのマイナーな動作・オネエ・師匠と弟子の関係…など、ダンスの題材となるアイデアが多岐にわたっていることにとっても驚いた。ここまで広い視点のなかで創作を行うことはあまりないため、面白さとこれらを組み合わせる難しさ、表現力の必要性を実感した。今後の活動でも、1つの概念に凝り固まることなく広い視点での踊りをしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・ とても楽しかったです。真剣白刃取りは終わってからも皆んなで音楽を捜して踊りました。有難うございました。
- ・ 今回初めての出会った人とダンスを通して楽しくコミュニケーションをとることができました。また、カポエイラの技についても学んでいきたいなと感じました。ありがとうございました。
- ・ 対極というのが印象に残りました。
- ・ 真剣白刃取りダンスは学生みんなのハートを鷲掴みでした！！ありがとうございました！！
- ・ 楽しかったです。側転など得意でない動きでも、苦手意識がなくなって、身体を軽く動かせました。
- ・ 曲と動きのマッチングが面白くてまたやりたいと思った。
- ・ カポエイラの動きは初めてやったのですが、とても独創的でとても面白かったです。1人で行うものではないので、他の人とのコミュニケーションを取る方法の1つとして良い方法だなと思いました。ありがとうございました。
- ・ 格闘技でありながら、相手の目をしっかりと見つめ、相手の心を理解して共に動く、実はとても思いやりのある深い運動であると感じます。やる度に生まれる新たな人との出会いと繋がりが、楽しさと嬉しさを倍増させる温かいもので、私は好きです。ありがとうございました。
- ・ 初めてカポエイラを体験したのですが、とても楽しかったです。自分にとって新たな世界が広がり、今日の経験が活かせる場面では是非活かしたいと思いました。ありがとうございました。
- ・ 私はダンス未経験なので、参加することに不安を感じていましたが、実際に参加してみるととても楽しくて、親しみやすい内容だなと感じました。勉強になりました。ありがとうございました。

ブレーキングとしても使える」「体を全力で動かすことができる」「授業展開のテンポの良さ、最後に繋げていく流れ」など多岐に渡っていた。とりわけコミュニケーションに関する記述が最も多かった。

【5】全体を通しての感想（表4）

「ダンス未経験なので、参加することに不安を感じていましたが、実際に参加してみるととても楽しくて、親しみやすい内容だなと感じました」や「初めての出会った人とダンスを通して楽しくコミュニケーションをとることができた」などの記述から、ダンスの難しさや恥ずかしさを感じることなく、誰もが楽しめる内容であったことがう

かがえる。さらに「格闘技でありながら、相手の目をしっかりと見つめ、相手の心を理解して共に動く、実はとても思いやりのある深い運動であると感じます。やる度に生まれる新たな人との出会いと繋がりが、楽しさと嬉しさを倍増させる温かいもの」「対極というのが印象に残りました」

「創作ダンスにつながるような動きがたくさんあって、とても勉強になった上とにかく楽しかったです」「ゆか気をつけのような、インパクトのあるポーズを作品の中に繰り返し登場させるという手法がすごく面白いなと思いました」「ここまで広い視点のなかで創作を行うことはあまりないため、面白さとこれらを組み合わせる難しさ、表現力の必要性を実感した。今後の活動でも、1つ

の概念に凝り固まることなく広い視点での踊りを
していきたい」などからもわかるとおり、やりや
すさ・楽しさ・面白さのみでなく、かかわること
の奥深さ感じていたり、創作手法に関する深い着
目と理解がうかがえたりする記述も目立った。

場で広く普及することを期待するとともに、筆者
自身もそのために尽力したい。

IV さいごに

各活動は単発でも十分に楽しめるものである
が、さらにそれらを単発で終わらずに、繋げる
ことによってひと流れの動きとなり、より作品と
しての様相を呈してくる。

今回のテーマである「編集・構成から創作ダン
スを考える」は各活動内でいえば、行われる動き
自体は新しい動きというのはおそらく「ゆか気をつ
け」と「カポエイラの動き」のみであろう。そ
れ以外は「歩く」「ハイタッチをする」「くぐる」
やスポーツの動きといった、言葉で簡単に説明で
きる動きであり、振付を覚える煩わしさや「でき
ない」「覚えられない」ことによる劣等感からも
解放されている。既に知っている・できる動きを
組み合わせる、方向やスピード、間を自分たちな
りに工夫するといった過程が編集・構成作業にあ
たる。

さらにいくつかの活動を繋げる際には、「真剣
白羽取りダンス」の〈発展〉でも紹介したよう
に、いくつかのペアでグループを作り、役柄・表
情・距離・方向・隊形といった様々な切り口から
脚色すれば、ある程度の長さを持った一つの作品
となる。作品タイトルをつける場合には、ペアの
方向や隊形からテーマを導くグループもあれば、
ペア双方の役柄とその関係からネーミングするグ
ループもあろう。最初の段階であまり深く考え込
まずに、主に容易で多様な動きを通じてボトムア
ップ的にテーマにたどり着くことができることから、
創作ダンスで陥りがちな「長時間座り込んで
の話し合い」からも脱却できる。また参加者アン
ケートの回答にも多数みられたように、比較的十
分な運動量も確保できることから充実感も得られ
る。

以上のように、今回の活動は他者と共に楽しく
動きながらアイデアを出し合い、無理なく自然な
形で創作に入り込める授業法であるため、教育現

6. ダンスにおけるアクティブ・ラーニングを活用した事例

:生涯にわたってダンスを楽しむコツを探る

横浜国立大学(非常勤講師) 伊藤史織

1. はじめに 自身の受け持つ「リラックス・エクササイズ」「ダンス・エクササイズ」の2つの授業は、学部・学年を問わず受講可能な科目となっており、学生の履修理由も「ダンスが好きだから」「将来、教員になる為にダンスが必要だから」「痩せたいから」など様々である。教職関連科目とは異なり、ダンスの指導法を中心とした内容だけで進めていくことは難しいが、専攻・年齢・目的が違うからこそ生まれる視点や創造性は、生涯スポーツや教職員としてダンスを選択する上で必ず役立つはずである。そのような願いから、アクティブ・ラーニングを活用した授業法を提案し、多くの学生がダンスに触れ、長く楽しむコツを探りたい。

2. 「リラックス・エクササイズ」「ダンス・エクササイズ」としてのダンス

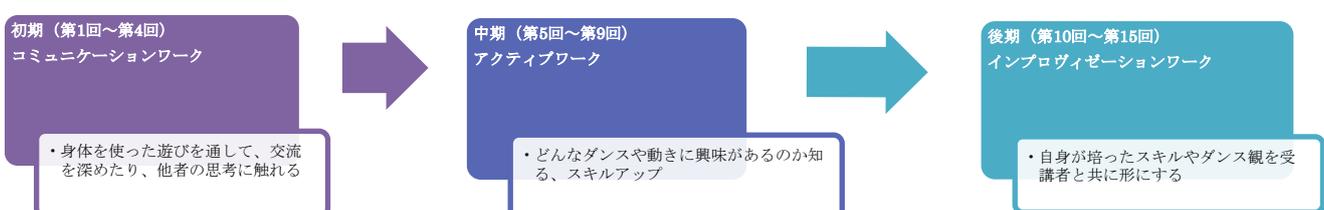
本授業では、様々なダンスのジャンルや動き、そして他者の表現・動き・思考などに触れることによって、自分自身の心と体にあったダンスの形を見つけることを目的としている。さらに、この体験が今後、学生の生涯においてどのような形で活かせるかを考え、持続可能な実践法を探る。

内容については、「ウォーミングアップ」「コミュニケーションワーク」「アクティブワーク」「インプロヴィゼーションワーク」の4つの領域を学生の心身の状態や身につけてきたスキルに応じて、変容させながら組み合わせている。また、全15回の授業を大きく3つの時期に分け、初期は学生同士が交流を深められるようにコミュニケーションワーク、中期はスキルアップや自分がどんなダンスや動きに興味を持ち継続をしたいのかを探れるようアクティブワーク、後期は個々が身に着けたスキルやダンスに対する思考を受講生と共に実践し、簡単な作品を構築できるようインプロヴィゼーションワークをそれぞれの時期に領域ごとの活動時間を長めに設定し、学生がより集中して取り組めるよう配慮した。

【領域ごとの活動内容】

領域	活動内容
ウォーミングアップ	今日の身体の観察 呼吸を整える
コミュニケーションワーク	交流を目的とした遊びやダンス
アクティブワーク	様々なジャンルのダンスや動きを体験 各自の心身の状態に合わせたスキルの習得
インプロヴィゼーションワーク	曲やテーマに合わせて即興で踊る その動きを発展させ簡単な作品創作を行う

【時期に応じ主体活動の領域の変化】



ここからは、授業において特に学生が印象に残ったという内容を領域ごとにピックアップし、紹介する。

	授業内容
第 1 回	ガイドダンス
第 2 回	コミュニケーションワーク（ピザ運び、しじみゲーム、人間知恵の輪、トントン列車）
第 3 回	コミュニケーションワーク（人間飛行機、彫刻、群像、オノマトペジェスチャーゲーム）
第 4 回	コミュニケーションワーク（ジャンケンダンス、新聞紙）
第 5 回	アクティブワーク（アニメソングで踊る、フォークダンス）
第 6 回	アクティブワーク（ヨガ、フロア、「フルドライブ」で踊る）
第 7 回	アクティブワーク（ヨガ、フロア、「フルドライブ」で踊る）
第 8 回	アクティブワーク（シェイプアップエクササイズ、フロア、「オドループ」で踊る）
第 9 回	アクティブワーク（シェイプアップエクササイズ、フロア、「オドループ」で踊る）
第 10 回	インプロヴィゼーションワーク（「花は咲く」で踊る）
第 11 回	インプロヴィゼーションワーク（基本的な動作からダンスを考える）、作品創作
第 12 回	インプロヴィゼーションワーク（空間を意識して踊る）、作品創作
第 13 回	インプロヴィゼーションワーク（物を使って踊る）、作品創作
第 14 回	作品創作
第 15 回	作品発表、まとめ

2-1. ウォーミングアップ

自己観察 今の自分の呼吸や心身の状態を観察する：仰向けに寝転がり、手や足の位置を楽な箇所において、リラックスしやすい体勢になる。始めは、「今、自分の呼吸はどんな感じ?」という言葉がけから、呼吸の深さやスピードなどより詳細に問いかけをしていく。そのことで散漫している意識を自分に集中させ、自分の心身の状態を丁寧に観察することを目的とする。また、呼吸だけではなく、身体に痛みや違和感などがないかもチェックするよう言葉かけを行い、その後の活動で無理に動かしたりしないよう注意を促す。

ゴロゴロストレッチ 仰向けの状態で行うストレッチ： 本授業は 1・2 限に行われ、あまり身体が目覚めきっていない午前中であることや、後期の比較的寒い時期に行われていたこと、何より運動やダンス経験が少ない学生が多くいたことから、頭の前から足の先まで細かく体をほぐすことをこころがけた。

おおまかな流れ

- ①手をゆっくり握ったり開いたり（グーパー）を繰り返す。指の関節がスムーズに動いてきたら手首を回す。
- ②股関節からユラユラと足全体をゆらす。筋肉がゆるんできているのが確認できたら足首を回す。
- ③頭をどちらかに傾け、首筋をじんわりとのばす。ほぐれたら反対側も。
- ④両膝を抱え、左右上下に転がり背中全体をマッサージする。
- ⑤どちらかの膝を抱え、反対側の足はのばす。しばらくしたら身体をねじるように抱えている膝を床につける。
- ⑥膝を戻し、股関節をほぐすように足を大きく回す

2-2. コミュニケーションワーク

ジャンケンダンス 2 人組でダンス

自分の両手を 2 回叩いて、その両手を膝にタッチ。もう一度両手を 2 回叩いて、相手とハイタッチ。人差し指を使って右手で左ななめ上、左手で右斜め上、右手で左ななめ下、左手で右ななめ下を順

番にさしていく。腕を組んで 1 回転し、体でジャンケンをする。勝った方は 1 エイト拍手をし、負けた方は即興で踊る。ここまで終わったら別の人と組んで、最初から同じことを行う

群像 4～5人組でお題を表現する遊び

グループ内で順番を決め、お題から連想するポーズを1人ずつとっていき、全体でお題を表現する。

例えば、右図の写真は「温泉」がテーマである。最初の人と2人目は、温泉に浸かっているポーズ、3人目は髪を洗うポーズ、4人目は体を洗うポーズ、そして最後は湯上りの牛乳を飲んでいるポーズを取り、個々のキャラクターを活かしながら全体で「温泉」を表現している。



彫刻 2人組で身体彫刻制作

2人のうち、1人は彫刻家、もう一人は彫刻をされる対象となり、役割を決める。彫刻をされる側の人は、始め直立の状態から立ち、彫刻家の誘導に従い、体の部位を動かし、固定させていく。

右図の写真のように、彫刻される側にとっては、キープをするのが難しいポーズや、寝転がしたり、表情や指先など細かいところまでこだわるように言葉がけを行うと、より作品のクオリティーも高まり、彫刻家も作品づくりに熱が入りやすい。



オノマトペジェスチャーゲーム 1組4～6人のチーム戦で行う。

ホワイトボードなどに10個のオノマトペを書き、見えないように設置する。スタートの合図に合わせて各チームのメンバーの一人が一斉にホワイトボードに書いてあるオノマトペを1つ無言で身体で表現し、残っているメンバーに当ててもらおうというゲームである。例えば「サラサラ」というオノマトペを表現するにも、砂が落ちる様子や、髪の毛を触る、紙にサラサラとペンをはしらせるなど、様々な表現の仕方を楽しみながらあみだしていく。



2-3.アクティブワーク

オドループで踊る 歌手グループ フレデリックの「オドループ」という曲に合わせて、教員が一部振付けをした部分と、シーンごとにテーマを設けて即興的に踊る部分を織り交ぜながら簡単な作品創作を行った。

作品の流れ

シーン① いろんな人ハイタッチ

いろんな方向に自由に歩きながら、目が合った人とハイタッチをしていく。慣れてきたら、そのハイタッチした手をつないだまま引っ張りあい、ジャンプを試みる。

シーン② 好きなポーズ

その場で立ち止まり、1エイトずつポーズを決める。それを4回行う。ポーズは毎回変える

シーン③ 教員による振付けダンス

シーン④ 飛び跳ねながら2重円に移動

シーン⑤ 2重円になって華麗な舞

盆踊りのように2回手を叩いて流す動きを2回繰り返し、次はバレリーナのように舞いながら内円と外円が交差をする。「カスタネットがほらたんたんたたたたたんたんたんたん」という歌詞に合わせて、体のあちこちをたたく。

シーン⑥ 教員による振付けダンス (シーン③と同様)

シーン⑦ 宇宙遊泳

宇宙にいるかのごとく動きをスローモーションにして自由に動く

シーン⑧ 決闘

近くにいる人と2組になり対決を始める。前シーンの動きと対極になるようにキレとスピードを意識させ、エアーでキックやパンチ、刀や手裏剣など「かっこいい自分」で自由に動く

シーン⑨ 教員による振り付けダンス (シーン③と同様)

シーン⑩ 中央に集まってポーズ

シーン① ハイタッチ



シーン② 好きなポーズ



シーン⑧ 決闘



シーン⑩ ポーズ



2-4.インプロヴィゼーションワーク

物を使って踊る ボールを取ったり、投げたりしながら物を使いながら動きの探求を楽しむ。

本来は柔らかいボールを使って、行うことが理想だが、本授業では新聞紙をまるめたもので代用している。下記にはボールの個数に応じて、探求してほしいテーマを示している。

①1つ ボールを浮かせる

床に1つボールが置いてある状態からどのような方法でもいいので、ボールを浮かせる。例えば、指でつまんで持ち上げてみたり、足先で掴む、肘と肘で挟んで掴んでみたり等、やり方は千差万別である。グループになり1人ずつ行い、「前の人が出した方法は使っちゃいけない」などルールを設けると、より動きの探求が深まる。



②2つ ボールを回収する

他者にボールを二つ適当においてもらい、それを別の人が好きなように回収する。例えば、手で拾ったり、転がりながら、足をつかってなど、このやり方も様々である。他者にボールを置かれる為、予想外の距離にボールがあったりすることもあるが、右図の学生は、逆立ちでボールに向かい、片手でひとつずつボールを掴み、見事に回収をしていった。



③3つ ボールと存在する

ボールを3つ持ち、後ろ側に適当に投げ捨てる。置かれたボールに対して、自分が4つ目のボールになったつもりで、好きに存在をしてみよう。偶然1直線に並ぶこともあれば、綺麗な正三角形に並ぶこともあり、なんとも言い難い3点に放たれることもある。しかし、自分が「ここだ!」という場所に好きなように存在することで、その空間が成立してしまうことを楽しみながら体験する。



④いくつでも 2人で踊ってみる

扱うボールの数は学生に任せ、2人組になってこれまで実践してきたことを組み合わせながら、自由に動いてもらった。また、ここまでやってきたことだけにこだわらず、偶然生まれたやりとりや挑戦してみたい動きも積極的に取り入れてもらい、他者との身体での対話を存分に味わってもらった。



3.まとめ

ダンスへの注目が集まる昨今、本授業の受講生も初心者・経験者に関わらずダンスへの期待と憧れを胸に抱き、履修をしてくれている学生が多い。だがその反面、ガイダンスでダンスに対するイメージを聞いてみると「振りを覚えられるか不安」「身体が硬くて…」 「かっこよく踊れない」などネガティブで偏ったイメージを持っている印象を受ける。どうやら音楽シーンやドラマ、CMなどのメディアの影響で振付けのあるダンスを完璧にこなすことだけがダンスである、と捉えている学生も少なくはないようである。もちろん、そういったことも醍醐味の一つであるが、まだたくさんの楽しみ方があること、何よりダンスは自分で生み出すことができることを知ってもらいたいと強く思った次第である。

今回紹介した事例は一部にすぎないが、どれも子どもから大人までもが取り組めるような、シンプルで遊び感覚のものが多い。一見、誰でもできる簡単そうな内容ではあるが、どれも自身の中から生まれる思考や表現を扱って実践し、また複数人で実践する際は、自身のもっているものを提示する必要がある。ダンスにおいては、しばしばこの「自己を表現する」「自分のダンス（動き）を他者に見せる」ことに恥ずかしさや苦手意識を持ち、ダンスを難しいと思わせてしまうことも少なくない。そして、前述したように受動的に振付けやステップの習得が重要視され、それが出来ない・追いつけないこともまたネガティブイメージに繋がり、ダンス普及の課題ともなっている。しかし、本授業での活動は、そのような振付けを完璧に踊れることや高い技術を身につけることを目的とした受動的側面よりも、誰もが取り組めて学生が能動的に活動できるようアクティブ・ラーニングの手法を多く取り入れたことで、自然にかつ楽しみながらできる自己表現を促し、ダンスに対しても肯定的なイメージを持たせることができると示唆された。

多くの学生がこのようにダンスの様々な面に触れる機会を持ち、ダンスに関連する指導者もまた、そのような機会を与えてくれることを願ってやまない。そして今後、受講生たちがこの授業を糧に、自分にあった表現方法やダンスをみつけ、継続し広めてくれることを期待している。



7. 教員養成大学「身近な音楽を口ずさみながら表現してみよう」

横浜国立大学 高橋 和子

<主な内容> なじみのあるイギリス民謡「ピクニック」やアメリカのフォークダンス「オクラホマ・ミクサー」を口ずさみながら、踊ってみよう。この教材では、同じ曲でも多様な広がりを持って表現できること、想像性や創造性を培うこと等を、遊び感覚で体験させたい。そのために指導者は、どんな発想や動きでも受容される場を作り、人と関わりながら空間も広がるような、言葉かけに留意しよう。これまで、大学生やダンス指導初心の教員や生涯スポーツ指導者に提供したが、誰でもが楽しく活動している様子が見えがえた。

1. 「ピクニック」

1) 歌ってみる（下記は歌詞）

丘を越え行こうよ 口笛ふきつつ
空は澄み青空 牧場をさして
歌おうほがらに ともに手を取り
ラララ ララ ララ ララ
ララ ララ あひるさん ガアガアガア
ララ ララ ララ やぎさんも メーエ
ララ ララ 歌声あわせよ 足並みそろえよ
まようは ゆかいだ

2) 歌いながらスキップし出会った人と〇〇組になり テーマに基づき即興表現を行う

1. 例えば「バラ」と言われたら、バラは二文字なので2人組になり、バラを形作る。大きさや高さや使う体の部位を変えてみる。バラの花束になって、それを届けたい人に宅急便で送る。
2. 例えば「ハサミ」なら、三文字なので3人組になる。一人は切る役目、残りの二人は切れた紙などを、接着させる役になって動く。
3. 例えば「扇風機」なら、5文字なので5人組になり、扇風機を形作る。大きさや風の強さや首振り、高速で風を送るうちに故障してバラバラになって飛び散ってしまう等、条件を変化させ、高さや使う体の部位を変えて行ってみる。

3) 「やってみよう」の曲で【〇〇に挑戦】

1. 三太郎シリーズCM ソング WANIMA 1:01 を聴く
*この曲は、「ピクニック」の曲をアレンジし、楽しく勇気もらえる歌詞になっている。

正しいより楽しい 正しいより面白い
やりたかったこと やってみよう 失敗も思い出
はじめよう やってみよう
誰でも最初は 初心者なんだから
やったことないことも やってみよう
苦手な相手とも 話してみよう
知らなかったこと 見たことないもの
あたらしい 楽しい

正しいより楽しい やってみようか
倒れるなら 前に倒れよう
やって後悔などすることないさ
理由なんていない やってみよう

2. 「〇〇に挑戦」をからだで表現してみよう

2～5人組になり、リーダーが出した挑戦のテーマを即興的に表現する。30秒位動いたらポーズで止まる。リーダーを交代する。テーマが浮かばなければ、三種類のカード（形容詞群・動詞や名詞群、オノマトペ群）を用意し、カードゲーム“神経衰弱”のように引いたカードの内容を動いてみる。
<形容詞例>柔らかい/激しい/ギザギザ/ヌル等。
何も書いていないカードも用意し、参加者がオリジナルのものを想像し動けば盛り上がる。

<テーマ例>

空を飛ぶ。宇宙に行く。深海に潜る。エベレストからスキー滑降。超特急レーシングカーの運転。・背中にホクロがあるか確認しよう！一本橋を渡る。世界一怖いジェットコースターに乗る。巨大生物に変身。タイムスリップ。

2. 「オクラホマ・ミクサー」

1) フォークダンスを踊る

わが国では最も普及した「オクラホマ・ミクサー」の踊りの特徴を捉え、誰とでも組んで踊ってみよう。同じパートナーとは32呼間踊る。

1. 隊形：二重円（男性内側・女性外側でLODを向く）
2. 組み方：バルソビアナ・ポジション
3. ステップ：ショティッシュ・ステップ、ヒール・ポイント、トー・ポイント
4. 踊り方
 - ①LODに前進 16呼間
 - ②ヒール・トーと女子移動、パートナー・チェンジ 16呼間

2) 最速・頭臍変化の極限ダンス

同じ曲を使い、踊りを変化させる極意を習得する。それには、からだの中心である「臍」と一番上にある「頭」の位置を変えることにある。

1. 隊形：2人で向かい合って立つ自由隊形。
2. 踊り方：①～④は各8呼間、全部で32呼間。
 - ①両手で2回拍手、両手で膝（相手）を打つ。
 - ②右腕を組みスキップ、体でじゃんけん。
 - ③負けた人は、最速・頭臍変化の極限ダンス勝った人は拍手で応援
 - ④スキップをしながら新しい相手を探す。

3) 「みんながみんな英雄」で【私は〇〇の英雄を表現

（三太郎シリーズCMソング AI）3分

1. 歌を聴いたり歌ってみる（下記は歌詞）

- ①特別じゃない英雄じゃない みんなの上には空がある
雨の日もある風の日もある たまに晴れたら丸もうけ
- ②振り向けば君がいる 前向けば友がいる
走って転んで寝そべって 新しい明日が待っている
悩んでは忘れて 忘れては悩んで
明日あさってしあさって 新しい未来がやってくる
- ③いい事がないうまくいかない それでもお腹はへってくる
向かい風でもつむじ風でも 寝込んでしまえばそよ風
空見れば星がある 夢見れば虹がでる
誰もかれもどんな人も あたらしい世界をもっている
走っては休んで 休んでは休んで
泣いて笑って飯食って 新しい自分になってゆく
- ②を繰り返す
ラランララン…ラランララン…ラランララン…ラランララン…
- ④特別じゃない英雄じゃない みんなの上には空がある
雨の日もある風の日もある たまに晴れたら丸もうけ

2. 「私は〇〇の英雄」をからだで表現してみよう
各自で〇〇に当てはまるのを思い浮かべ、動いてみる。2～5人組になり、リーダーが出したテーマを即興的に表現する。30秒位動いたらポーズで止まる。リーダーを交代する。

<テーマ例>

絵描き・書道家・演歌歌手・指揮者・コック・
祭・格闘家・踊り・オリンピック選手・変装・迷い・脱出・魔法使い・嘘つき・動物王国・空・森

3. 「海の声」

1) 幸せ笑い体操【ウォームアップ】

1. 隊形：2人で向かい合って立つ自由隊形。
2. 踊り方：①～④は各8呼間、全部で32呼間。
 - ①ロングブレス：両腕を頭上に上げながら息を吸い、相手の手に向けて息を吐く、を2回。
 - ②人差し指を斜め上⑤⑥に伸ばしストレッチ。斜め下⑤⑥に伸ばしストレッチ、を2回。
 - ③相手の顔を指さし、大笑い。右肩がすれ違うようにドーシードー。
 - ④右腕を組みスキップ後、さよならをして、新しい相手を探す。

2) 「海の声」に耳をすます【クールダウン】3:48

1. 2人組になり、横たわった相手をマッサージ。
2. 一人になり居心地の良い場所を探し横たわり、深い呼吸をしながら心身を休ませる。

空の声が聞きたくて 風の声に耳すませ
海の声が知りたくて 君の声を探してる

会えないそう思う程に会いたいが大きくなってゆく
川のつぶやき山の囁き 君の声の様に感じるんだ

目を閉じれば聞こえてくる 君のココロした笑い声
声に出せば届きそうで 今日も歌っている
海の声にのせて
空の声が聞きたくて 風の声に耳すませ
海の声が知りたくて 君の声を探してる

例え僕がおじいさんになっても ここで歌ってる
君だけを想って
海の声よ 風の声よ 空の声よ 太陽の声よ
川の声よ 山の声よ 僕の声よ 僕を乗せてゆけ



㊦の写真 「〇〇に挑戦する大学生」

㊦㊧の写真「カード:動詞・形容詞・オノマトペ」 ㊦㊧「私は〇〇の英雄」を演じる介護教員養成課程



8. 大学授業作品の舞台上演に至るまでの創作過程 横浜国立大学 高橋和子 (学生)外川さつき・中澤美穂・宮崎瞳子

1. はじめに： 私は教員養成大学に勤務して40年になる。私が教員養成大学に勤めたのは、自身が考えているダンス指導法を授業で展開し、それを受講した学生が小中校や大学の教員や舞踊家等になり、多くの人たちにダンスの楽しさを教えてほしいと願った為である。その具体的な取り組みの一つに、日本教育大学協会全国創作舞踊研究発表会への授業作品出展がある。出展し続けて、かれこれ35年になる。この大会の主旨は授業作品の上演にあったが、現状は授業作品約5大学、クラブ作品約12大学であり、舞踊教員の退職に伴い非常勤講師のみの大学や、後期の授業が開講していない等の事情もあり、授業作品が減少している傾向にある。

今回は平成28年度に開催された第36回岐阜大学主催の大会における創作過程を辿ることにより、授業作品を舞台に立たせる指導過程を紹介したい。この「ダンス」授業は後期の選択授業(次に示すシラバス)の為、10月に入って受講者が決まる。今回は、大学1年から4年生、大学院生、学部も教育人間科学部、経営学部、理工学部と多彩なメンバーであった。

初めの数回の授業は介護体験や教育実習のために受講者は20名位であり、私は様々な即興表現を提示しながら、受講者のダンスのレベルやどんな動きやイメージで動くのが好きかなどを把握するのに務めた。その後の作品創作においては、どんな作品をやってみたいかを各自に出してもらい、一本に絞るようにしていった。しかし、主催者への照明案提出は11月末であり、出演の32名学生がそろったのは大会当日のみという状況下での作品創作であった。このような事態は例年同様な傾向であり、私一人で学生を把握をすることは難しく、学生代表として、私のゼミ生でありモダンダンス部3年の中澤美穂さんと宮崎瞳子さんを立てた。二人は学生や大会事務局(宿泊、プログラム原稿・照明案等)との諸連絡の役割を担った。それ以上に、作品創作のまとめ役にもなっていただいた。具体的には、出されたイメージにあう場面や音楽の選定、それを包括する作品題名の決定など、私と二人が中心になって作品構成を考えていった。そのような役割を果たしたので、学生代表者として作品にどのように関わったのかについて、まとめてもらったのも掲載する。

2. 「ダンス」のシラバス

1)ねらい：身体表現の最も代表的な舞踊は、古代から近現代に至るまで生活や文化に欠かせないものになっている。それらの背景を踏まえ、他者やものと身体でかかわる視点や、コミュニケーションツール(自己表現)の視点から舞踊を考察する。具体的には創作ダンスを舞台上演する為の創作技能、上演技能を身につける。

2)授業内容

- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 1. 10/ 4 作品鑑賞 | 2. 10/18 即興表現① 日常動作から |
| 3. 10/25 即興表現② 対極の動きの連続から | 4. 11/ 1 即興表現③ 多様な感じの動きから |
| 5. 11/ 8 即興表現④ 群の動きを使った構成 | 6. 11/15 即興表現⑤ ものを使った動きから |
| 7. 11/22 作品創作① テーマの追求 | 8. 11/29 作品創作② イメージにあった動きの追求 |
| 9. 12/ 6 作品創作③ 変化のある運動の連続 | 10. 12/13 作品創作④ はじめ-なか-おわりのひとまとまり |
| 11. 12/17 作品創作⑤ 踊り込み | 12. 12/17 上演法① 照明案の書き方：ぎふ清流文化プラザ |
| 13. 12/17 上演法② 舞台の作法・作品発表 | 14. 12/18 上演法③ 作品発表(リハーサル) |
| 15. 12/18 上演法④ 作品発表・鑑賞(本番) | 16. 12/20 課題提出 |

3)授業目標

①創作ダンス作品を上演することが最終目標である。そのためには、作品創作や舞台上演の知識やダンスの運動技能や表現技能を身につけることができると共に、各役割に対して責任を持ち舞台に立つことができる。

②グループ創作に欠かせない、コミュニケーション能力が必要である。

③最終の「課題提出」では、「私が踊るといふこと」(1,000字)について記述する。

4)受講者 1年生～院生までの32名(教育実習や介護等体験で大会当日に初めて32名が一緒になった。)

3. ダンス作品「さらば愛しきものたちよ」 創作過程 (宮崎瞳子文責)

1) 作品について

- ①目的：2016年12月17～18日に岐阜で開催された教大協の全国創作舞踊研究発表会への出展
- ②題名：「さらば愛しきものたちよ」
- ③表現内容：今の私たちは、迷い悩み怠け焦り…様々な感情の中、ただひたすらに前に向かって走る。そんな毎日もいつかは愛しく、戻ることの出来ない大切なものとなるのではないか。
- ④プログラム解説：「迷い、不安、怠慢、衝動。私達はそんな毎日を愛おしく思い、ただひたすら前へ走る。」
- ⑤曲名『台風』、作曲・演奏「→Pia-no-jaC←」
- ⑥参加者：男子13名、女子19名、計32名
創作ダンス経験者の内訳 15/32名
院・4年 5/8名 3年 6/13名
2年 3/9名 1年 1/2名



2) 学年の傾向

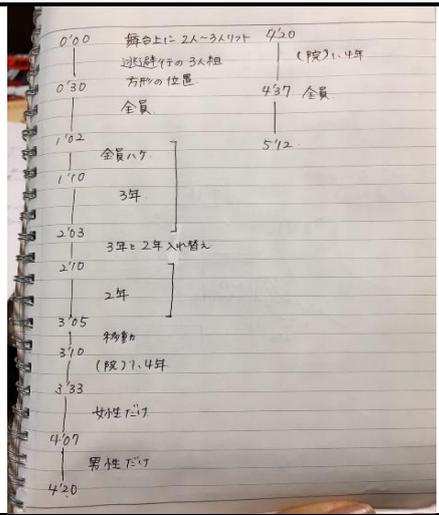
- ①院生（2名）皆モダンダンス部であり、1名は大学まで器械体操、院で初めて創作ダンスに触れる。もう1名は中国からの留学生で、小さいころからダンスを習う。
- ②4年生（6名）3名が創作ダンス経験者かつモダンダンス部。2名が野球部、女子ラクロス部の体育科、1名が音楽科である。
- ③3年生（13名）6名がモダンダンス部（1名はフィンランドから10月にきた留学生）。1名は高校で創作ダンス部、1名は新体操部に所属していた。他ダンスサークル2名、男子バレーボール部2名、野球部1名、の内4名が体育科であり、その内3名が昨年も教大協に出場している。
- ④2年生（9名）3名がモダンダンス部。1名がバレエ経験者、男子3名が野球部に所属しており、モダンダンス部2名以外は皆体育科である。
- ⑤1年生（2名）1名がモダンダンス部。1名は理工学部の男子でダンス初心者。

3)-1 制作過程（概要）

月	日	授業内容	制作
10	4	【初顔合わせ】	・代表(中澤)・副代表(宮崎)決定
	18	【3グループに分かれて断熱材を使用した小創作】・出演メンバー決定	・テーマ・曲等話し合い ・10/17～中澤、教育実習(～10/31)
	25	【3グループ毎のテーマ別小創作】	・参加者に曲案の募集をかける ・参加人数・宿泊人数・WS受講コースと人数の書類を提出
11	1	【作品イメージに合う動きを創る】 ・2年生パート(9名)→焦り、 ・3年生パート(10名)→怠慢、 ・院・1・4年生パート(13名)→輝き	・大まかなテーマと題名、音楽を決定・衣装試案検討 ・全体パートと学年パートの曲割りを決定 →音楽の秒数と担当学年を表示し、メンバーに送付 ・題名・音楽・40字・メンバー表等プログラム用原稿提出
	8	【作品制作】	・以降授業時間を12:20～に変更(計2h10min/毎) ・全体パートの流れ・前半構成制作→前半のユニゾン制作

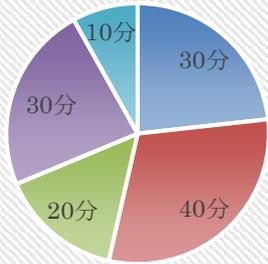
	15	・ラストのユニゾンの振り入れ、配置決定	・全体パートの流れ・構成制作（後半） →ラストのユニゾンの振り制作
	22	【作品制作】・C メロからラストのユニゾンに入るまでの流れ・構成	・照明案作成開始・宿泊書類提出・全体パートの流れ・構成制作（ラスト） ・衣装仮案（白ボトム・黒白以外のトップス）
	29	【提出用映像撮影】	・照明案完成→照明案・CD・映像提出・会計開始 ・全体パートの流れ・構成制作（全体）・衣装決定（白ボトム・カラーYシャツ）
12	6	【作品固め】	・会計&集金額通達・衣装配布
	13	【最終衣装付き通し練習】	・しおり完成→全員 MT（集金）・水・木に昼練習（12：20～12：50）

3) -2 制作過程（詳細）学生製作者メモ

月	制作
10	<ul style="list-style-type: none"> ・代表・副代表決定 ・テーマ・曲等話し合い <p>→どんな受講者が何人集まるのかが不明な時点でテーマや曲を選ぶことがかなり難しかったため、人数の多い少ない、明るい暗い面白いなど様々な場面ように曲候補をいくつか挙げておくべきだと感じた。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者に曲案募集→創作ダンス未経験者はどのような曲を選べば良いのかわからず、曲候補が出なかった ・参加人数・宿泊人数・WS 受講コースと人数の書類を提出→授業の為、全員の名前・学年を把握することや全員に確実に連絡がいくようにすることがかなり難しかった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・大まかなテーマと題名、音楽を決定 ・全体パートと学年パートの曲割りを決定 音楽の秒数を担当学年を表示し、メンバーに送付 ・題名・音楽・40字・メンバー表等プログラム用原稿提出 <p>→この週に制作者側が行うことが多すぎたためもう1週早く曲を決定するべきだった。</p>
11	
	<ul style="list-style-type: none"> ・提出期限が迫っており、全員が集まったことが一度もないことから、授業時間を 12：20 からに変更（計 2h10min/毎→他の授業準備や話し合い等が個々に入ることが多く、全員が揃うことがなかったが、積極的に参加した学生は上達していく様子が見受けられた。 ・全体パートの流れ・構成制作。特に前半のユニゾンの振り制作。 →全員の出席ではなく、誰がいないかの把握しにくく、構成を考えにくい場面が多かった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・全体パートの流れ・構成制作。特にラストのユニゾンの振り制作 →ダンス経験者と未経験者が混ざっているため、難しすぎず、テーマに沿った動きを見つけ組み合わせることに難しさを感じた。
	<ul style="list-style-type: none"> ・照明案作成開始・宿泊書類提出・全体パートの流れ・構成制作（ラスト） <p>→人が多くことや、流れを把握している人（毎回授業に参加している人）と把握していない人が混在していることにより、最後の構成をつけるまでに非常に時間がかかった。</p>

3)-3 各授業

日	授業内容
10/4	<p>【初顔合わせ】 ・断熱材を使用した遊び</p> 
10/18	<p>【3グループでの小創作】出演者決定</p> 
10/25	<p>【3グループに分かれてテーマ別小創作】</p> 

<p>11/1</p>	<p>【作品イメージに合う動きをパートに分かれ創作】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年→焦り、3年→怠慢 院1・4年生パート→輝き <p>【全体】ダンス経験者と未経験者をいかに作品に取り込み、楽しんでもらうかが課題であったが、まず皆で踊ることの楽しさを知ってもらおうと音楽に合わせて動いてもらった。</p> <p>【3年生パート】昨年経験者や、全体的に踊れる人が多かった為、個性を活かしつつ、2人組や3人組で3年パート全体の構成を工夫した。その為、どんな流れにするかを決め、その後どのようなリフトができそうかを考えた。</p>		<p>【1・4年・院生パート】1年生のフレッシュさと4年生・院生の大人感の融合を考えた。ダンス未経験者には、過去にやったスポーツの動きを大きめにやってもらった。</p> <p>【2年生パート】体育科が多かった為、体育科の授業を活かして行きたいと考えた。また、男子も多く、そしてバレエ経験者もいた為、そちらも活かすためにはどうしたら良いかを考えた。</p>
<p>11/8</p>	<p>【作品制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・130分のうち、右図の様な時間配分で授業を進めた 	 <ul style="list-style-type: none"> ■ 全体踊り込み ■ 学年パート制作・練習 ■ 男女パート制作・練習 ■ 全体パートの流れ・構成制作 ■ 休憩 	
<p>11/15</p>	<p>【3年生パート】怠慢を表す動きを全員で行うと、ダンス未経験者はただのだらだらとした動きになってしまうため、怠慢の動きの人との対比を見せるためにわざとチャキチャキ動く振りをしてもらった。</p>	<p>【2年生パート】提案をしてくれるものを上手く作品に取り入れることに苦労した。曲は短いがやりたい事は沢山出てきてしまい、また人数も多く一つにまとめることが難しかった。しかし、常に楽しみながら行う事は忘れなかった</p>	<p>【1・4・院生パート】動きに緩急をつけることに苦労した。曲のテンポが速く常に盛り上がりがある分、音に影響され動き過ぎてしまったので、我慢して明確に静止するシーンを選んだ</p> <p>【全体】通常練習に参加できない人や欠席者の為に、授業時間外で補講を行う、振りを動画に撮りLINEのグループに流す等、落ちこぼれないように対処をした。しかし、全体の構成や移動の仕方の習得については、なるべくお昼の練習に参加するよう呼びかけた。全体の振りは作品のテーマに合い、かつ、誰でも動けるものを作成しようとしたが、難しく感じた部分が多かったため、振り写しには「シュッと手を伸ばす」などの擬音語や、あっちにある鉄棒を引っ張る感じなど、動きやすくなるような声掛けを行った。また、様子を見て、ふりを簡単なものに変更した。</p>
<p>11/22</p>	<p>【作品制作】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Cメロからラストユニゾンまでの流れ・構成 		
<p>11/29</p>	<p>【提出用映像撮影】いつもより広い場所で人に見られる感覚を持つことで本番への意識が上がった</p>		

12/6

【作品固め】



【院・1・4年パート】 手足を伸ばす場面は「ピンと伸ばして」という指示はせず、「ほしいものや叶えたい夢を掴みに行くように」という指示をし、感情が動きに反映できるようにした。決められたことをやろうとしすぎると表現が萎縮するので、舞台上ではむしろ何をやっても良い事や目立った者勝ちだと伝えた。それくらいの余裕がほしいと。

【2年生パート】 ビデオ撮影を積極的に行い、それを見てフィードバックをしていた。また、授業時間外でも昼休みに集まり学年で練習したりした。ダンス未経験者も多かった為、カウントを通しの中でも数えたりして合わせた。しかし、カウントでは表せない表現の部分は、悩みが迫って来てそこから逃げるようなイメージで、というような言葉でイメージを共有した。



【3年生パート】 身体にダンスが入ってきた分、与えられた振りを淡々とこなしてしまった。振りの強弱を出す為に、「ここは掌まで大きく伸ばして」「自分の周りの空気を動かすように」と伝えた。楽しさを忘れないように笑顔は欠かさなかった。

12/13

【最終衣装付き通し練習】

【全体】とにかく何回も通しを重ね、身体に沁み込ませる。ユニゾンの細かい合わせ（顔の向きや手の角度）をしつつ、型に捉われすぎず表現を楽しめる様言葉かけや楽しい雰囲気心掛けた。



12/17
～18
本番



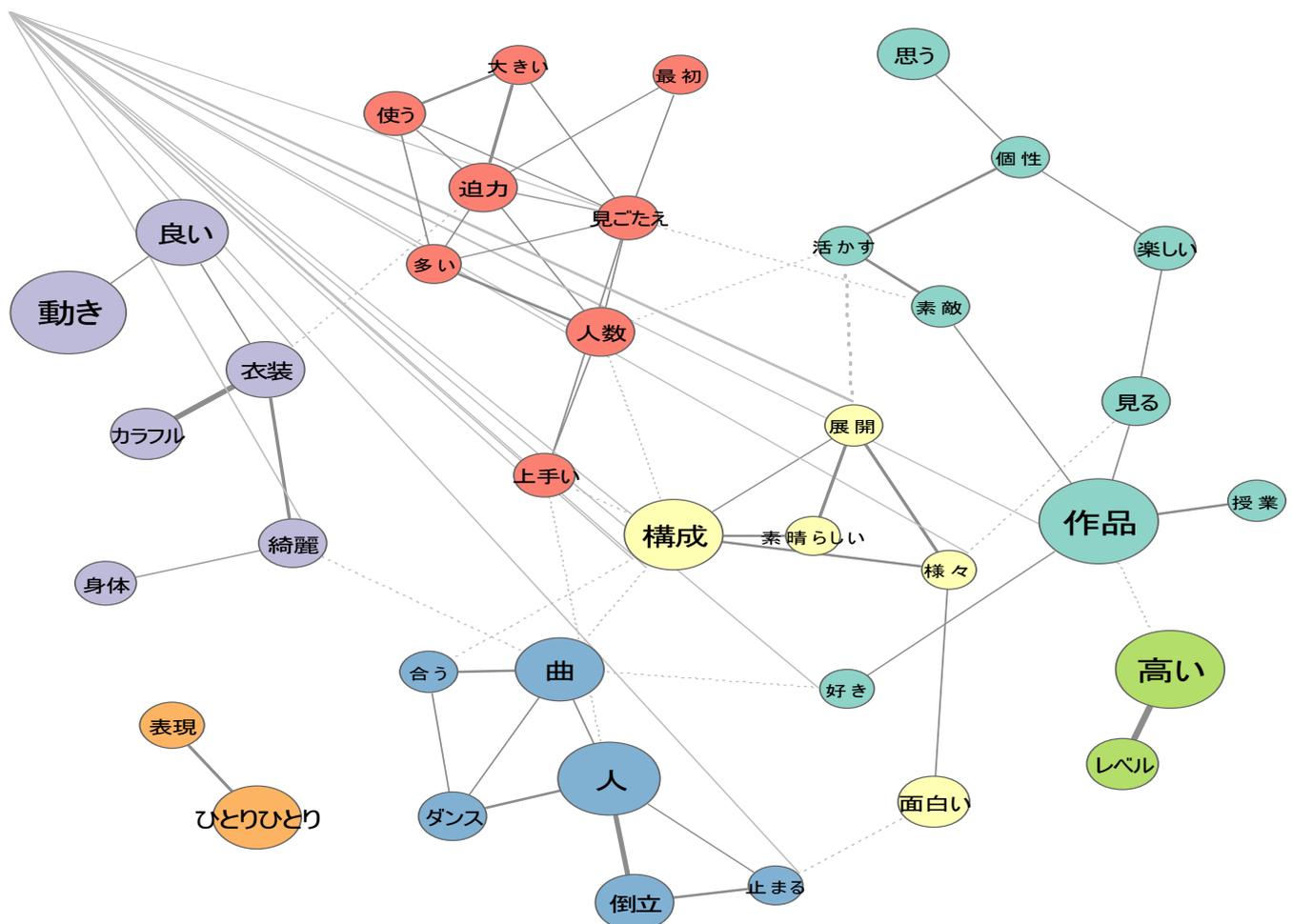
5. 「さらば愛しきものたちよ」への学生による作品批評

この大会の特徴の一つに、学生による作品批評がある。これは、横浜国立大学が大会を主催した1996年の第16回大会において、作品鑑賞を通して学ぶ機会を提供する意図から、他大学への作品批評を始めた。出演者は他大学の3～4作品を見て、小さな紙に感じたことやアドバイスを自由に記述することが義務付けられている。今回の横浜国立大学の授業作品「さらば愛しきものたちよ」に対して、批評（コメント）したのは9大学125名であり、そのうち、授業参加大学は「静岡大学7名・共立女子大学6名・大分大学10名」の23名であり、他の多くはダンス部員「筑波大学19名・埼玉大学15名・愛知教育大学19名・鳥取大学41名・岡山大学4名・千葉大学4名」である。

学生の自由記述を共起ネットワークにかけて、どのような傾向や関係性があるかをみたのが、下図である。語彙の出現数は5語以上、描画数は60、全単語数は150にしてある。その結果、「作品」「構成」「動き」「人」という語彙が多く記述され、それらに関係している語彙がネットワークを形成作していることがわかる。

一番大きな塊は、「作品」を中心にして「授業」「楽しい」「素敵」「個性」「活かす」が関連している。次に、「最初」「見ごたえ」という言葉があるように、冒頭シーンは作品の中でも非常に重要な役割を持っていることが分かる。大人数を活かした演出をすることで、迫力があり、観客の目にとまる作品になったと考えられる。また、「動き」「良い」「衣装」「カラフル」「綺麗」「身体」の言葉が目立つ。ダンス作品の中心となる動きは、テーマに沿った特徴的なものにする事で印象付けられると考えられる。更に、「構成」「素晴らしい」「展開」「様々」「面白い」という言葉が目立つ。大人数をうまく使い構成を次々に展開していくことで、印象的な作品になったと考えられる。そして、「ひとりひとり」「表現」の言葉が多いことから、個性や特技を活かした作品づくりが、上手く個人の表現につながったと考えられる。

(中澤美穂 文責)



9. 教員のダンス研修における成果と課題

横浜国立大学 高橋和子

I 研究の背景・目的

教員にとってダンス領域（表現運動を含む）は他の運動領域と比べ、「指導が難しい」「指導方法の工夫をあまりしていない」「児童は興味・関心をもちにくい」「中学生の知識習得率は低い」等と捉えており、「教師は子どもの期待に応えるような指導方法や授業づくりを充実させる必要がある」との報告がある（文部科学省調査 2016）。ダンス領域は小学校や中学校（2012年～）で必修化されて久しいが、運動会や体育祭の「振り出し」ダンスを行っている現状も多い（村田・高橋 2016）。その為に、各県教育委員会や教員免許状更新講習等においても、研修会をこれまで以上に開催し、教員の指導力向上を目指している。このような現状を踏まえ、本研究が講師を務めたダンス研修会において、教員の知識習得状況や研修会への評価を知り、研修会の成果と課題を明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

1. 対象とした研修会

- ①開催県：宮城/福島/神奈川/長野/香川/宮崎
- ②学校種：幼保・小・中・高・特別支援の教員
- ③研修時間・内容：4～5時間。表現系・リズム系・フォークダンス（FD）系の初歩的段階の指導を、各1時間は実施し模擬授業を行った処もある。
- 2. 質問紙調査：研修会終了直後に実施。
 - ①教員に関する4項目：性別/学校種/専門種目/教職歴
 - ②ダンス指導の5項目：指導歴/指導内容/授業形態/参考資料/指導の難しさ（5段階評定）
 - ③研修会への評価17項目（「授業者・参観者による授業評価」参考、高橋 2012：5段階評定）
 - ④ダンスの知識16項目（『文科省学習指導要領解説 保健体育編』表現系・リズム系から選択。3段階評定：1点説明できる～3点知らない）
 - ⑤研修に対する感想を自由に記述。
- 3. 調査実施日：2014年6月～2016年8月
- 4. 有効回答数：277名（男性80名、女性197名）
- 5. 分析方法：統計ソフト IBM SPSS Statistics22に

て調査項目を単純集計後、一元配置分散分析と多重比較検定、カイ二乗検定と残差分析を実施。有意な確率（ $p < .05$ 以下）について考察。

III 結果と考察

1. 教員の属性

研修を受けた教員の7割は女性。約6割が小学校教員であり、中学校教員は15.2%と少ない。ダンスを専門とした教員は5.3%、武道専門は3.8%と最も少なく、球技専門は42.1%と最も多い割合であった。教職歴は10年未満が5割、20年未満が3割、20年以上が約2割であった。これらのことから、ダンス研修会の受講者は女性や教職歴10年未満の教員が多いことが分かった。また、武道専門の教員はダンス指導を苦手とする傾向があり（高橋 2015）、研修会があっても受講したいとは思わないこと。中学教員は部活や試合等で多忙を極め、受講していないことが推察された。

2. ダンス指導実態と指導の難しさ(表1参照)

これまでの「ダンス指導歴」は4年以下が73.5%（男性90.4%、女性66.5%）と一番多く、その傾向は男性に顕著であった。「指導内容」は表現系とリズム系は約4割、FD系は約2割であり、どの内容も女性が高い割合で指導していた。「指導の難しさ」は、表現系、リズム系、FD系の順であり、特にリズム系指導に男子が難しさを感じていた。

表1 指導実態と指導の難しさ、性別平均値

指導（男女）	難しい(男女平均値) p
表現系 38.6(45.2<65.8)%	1.80(1.70>1.84)
リズム系 41.6(40.5<58.3)%	2.26(1.93>2.39) *
FD系 19.8(19.0<36.7)%	2.78(2.61>2.84)

・男女平均値は「そう思う=1点～そう思わない=5点」と評点化。

「授業形態」は男女共習が82.1%であり、小学校教員が多いことも起因していると考えられる。「参考にした教材」は「映像・ビデオ教材」43.1%、「文科省・県・市資料」38.6%であった。

3. 研修会の評価

本研究者の研修会に対する評価は17項目中、「学習資料(学習ノート・カード)を有効活用」(2.58点)を除く16項目は、全て1点台(そう思う=1点)の高評価であった。特に「ダンス授業をみる(体験する)と参考になる」(1.23点)、「よい授業である」(1.33点)は非常に高く、「明日の授業からすぐに使える」という感想からも、授業に即した教材提供や発達に応じた言葉かけの留意点も含めた指導法の提示も、良い評価につながったと考えられる。

また、男性が女性よりも15項目において高い評価であり、その中でも有意差が見られた項目は「先生は心を込めて生徒に関わっている」「学習成果を生み出す運動(教材・場作り・学習課題)を用意」「児童・生徒が自ら進んで学習している」であった。ダンス研修会が初めての男性教員にとっては「教員のかかわり方が濃密で、肯定的な言葉かけと明確な課題の為、いつのまにか表現世界に入っていた」との感想が得られた。このように、ウォームアップから主活動への展開もスムーズにする工夫やグループ活動を多用し、褒めることを心掛けたことも起因していると考えられる。

4. ダンスの知識

ダンスの知識を問う16項目のうち、「即興的に表現する」「動きのメリハリ」「個や群での動き」のように日本語は高得点、リズム系の語句である「BPM」「シンコペーション」「アフタービート」のようにカタカナ表記は低得点の傾向が見られた。日本語の語句は

何を表しているのかを推測できるとともに、研修を通して知識と実践が融合したとも推察される。ただ「BPM」「シンコペーション」については研修では語句のみの説明で、音楽と動きの事例を提示して理解を図る工夫や時間的余裕がなかったことも、この結果を招いたと推察される。性差に着目してみると、11項目において女性教員が有意に高く($p < .05$)、性差がなかったのは

「多様なテーマから表したいイメージを捉える」「ひと流れの動き・ひとまとまりの動き」「BPM」「シンコペーション」「アフタービート」であった。女性にはダンス専門の教員もおり、指導経験やダンスの知識も備わった中での研修会であった為に、知識に対する理解も更に深まったと考えられる。

以上、体験を伴うと知識の定着率も高いことから、授業においても体験を伴いながらの知識と技能の習得を心がける必要があるだろう。

IV 結論 研修会の成果と課題は次の通り。

1. 研修会参加の教員は、女性・小学校教員・教職歴10年未満が多く、ダンス指導歴は短く、特に表現系の指導に難しさを感じていた。
2. ダンス研修会への評価は高く、自身の授業への参考になると捉えていた事から、研修会への参加を促す仕組みづくりが大事になる。
3. 授業においても体験を伴いながらの知識と技能の習得を心がける必要があるだろう。

*本稿は平成28年度スポーツ庁支援事業の一環。

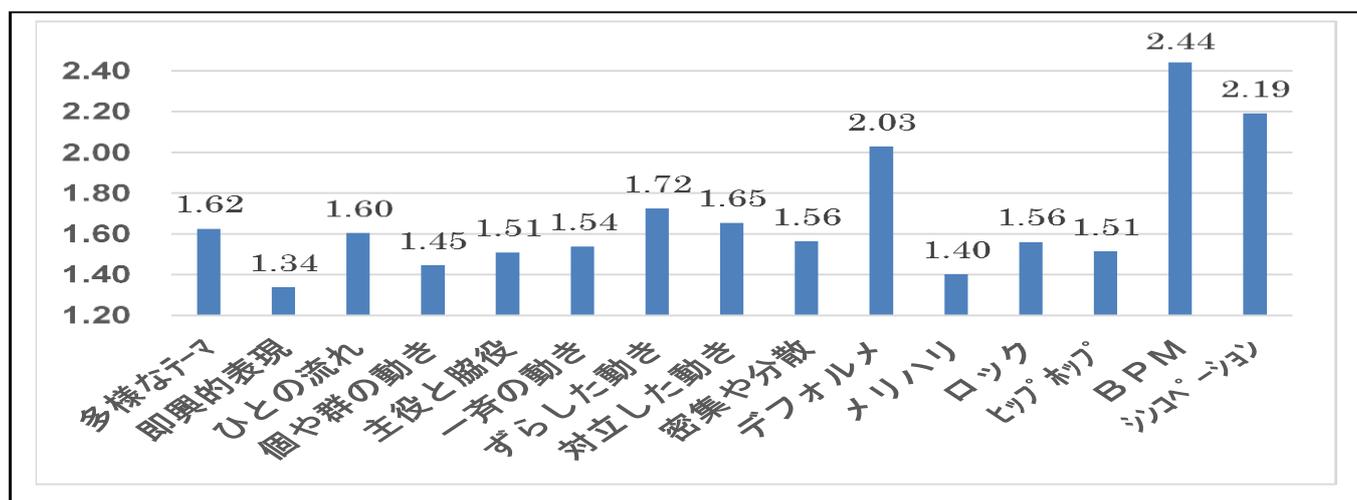


図1 ダンスの知識(平均値: 1点説明できる 2点聞いた事がある 3点知らない)

第3章 ダンス映像

授業の参考になるダンス教材の映像を、各 10 分くらいで紹介している。次の HP を参照してほしい。

<http://kazuko-ynu.jp>

1. 身近な音楽を口ずさみながら表現してみよう「ピクニック」「オクラホマ・ミクサー」

横浜国立大学 高橋和子

①ピクニック ②〇〇に挑戦 ③オクラホマ・ミクサー

2. かかわる動き

湘北短期大学 小笠原大輔

①ハイ・ロータッチ ②ジャンケンゆか気をつけ ③てのひらスキップ

④カポエイラの動きから「ジンガとくぐり避け」 ⑤カポエイラの動きから「ジンガと逆くぐり抜け」

⑥カポエイラの動きから「ジンガと逆くぐり抜け～蹴りとゆか気をつけ」 ⑦マイナー動作

⑧ハイ・ロータッチ その2 ⑨ハイ・ロータッチ その2展開 ⑩真剣白羽取りダンス ⑪全てを繋げる

3. 幼児の表現遊び: 身近な素材を使って

共立女子大学 足立美和

4. 授業作品『さらば愛しきものたちよ』 日本教育大学協会第 36 回全国創作舞踊研究発表会出展

横浜国立大学 高橋和子・大学生・院生

作品内容: 不安、迷い、怠惰、衝動など、様々な感情が渦巻く中でもエネルギーに駆け抜ける若者のイメージ。

5. ダンス作品『あたしにとっての^{あなた}ベンチ～谷川俊太郎詩集より』 横浜国立大学高橋和子・モダンダンス部

第 29 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸 特別賞受賞「主題にふさわしい斬新な動きの発見に対して」

作品内容: 当たり前前にそこにあるもの。でもふと気づくと、あたしにとってかけがえのない存在。

あとがき

我が国のダンス教育は、戦後 70 年間、子どもの主体的で対話的で深い学びを実践し、体育界を先導してきました。しかし、教員養成大学におけるダンス未履修などもあり、指導者養成や教材の紹介や指導方法の紹介も急務であります。そのようななか、文部科学省より「学校教育法施行規則の一部を改正する省令案並びに幼稚園教育要領、小学校学習指導要領案及び中学校学習指導要領案」が 2017 年 2 月 14 日に報道されました。それによると、2017 年には小学校・中学校の新学習指導要領が告示予定であり、2020 年には小学校、2021 年には中学校が改訂指導要領に基づき実施されます。ダンス領域は、小学校も中学校も現行とほぼ同様の内容のようですが、「どのように学ぶのか」ということが盛り込まれています。

本事業で紹介した、ダンスの考え方や指導方法や教材事例が、少しでも日本のダンス指導実践に役立つことを願っております。

本事業を遂行するにあたり、スポーツ庁、各教育委員会、学校法人共立女子学園共立大日坂幼稚園、ダンス研修を受講いただいた先生方や中学生の皆様、アンケートを実施くださった皆様、そして、横浜国立大学会計係の方々には心より感謝申し上げます。また、報告書作成や資料整理につきまして、研究協力者の先生方、高橋和子研究室の事務職員の高橋耕平さんやゼミ生、web デザイナーの五十嵐彰さん、ビデオ編集の北代暁也さんの協力なしにはできませんでした。本当にありがとうございました。